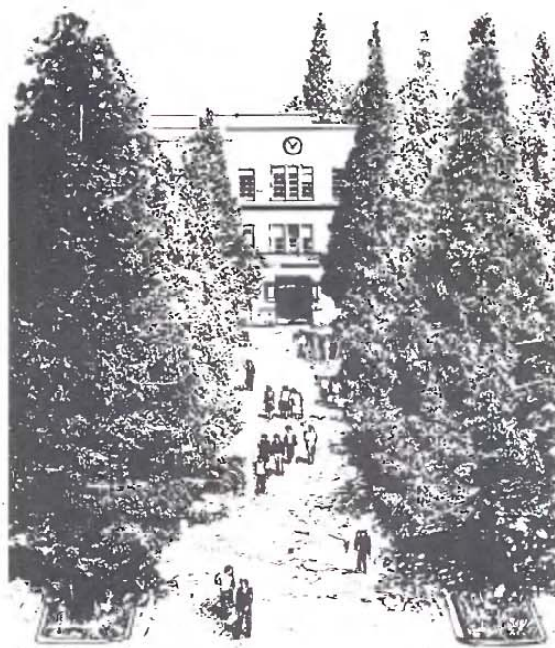


高等教育機関におけるガイダンス教育の展開

石 桁 正 士〔編〕

石桁正士，岩崎重剛，中村博幸，矢内秋生
横山 宏，秋尾保子，池田勝枝



広島大学 大学教育研究センター

高等教育機関におけるガイダンス教育の展開

石 桁 正 士〔編〕

石桁正士，岩崎重剛，中村博幸，矢内秋生
横山 宏，秋尾保子，池田勝枝

広島大学教育研究センター

目 次

1部 理論編

1.	まえがき	1
2.	高等教育機関におけるガイダンス教育	4
2. 1	ガイダンス教育の必要性和高等教育	4
2. 2	高等教育とガイダンス教育の関係	6
2. 3	ガイダンス教育の目標と方向	8
2. 4	ガイダンス教育の将来方向	10
3.	ガイダンス教育のねらいとカリキュラムの設計	14
3. 1	ガイダンス教育の3本柱(意識、知識、 ラーニングスキル)	14
3. 2	ガイダンス教育の標準的カリキュラム	16
4.	ガイダンス教育の内容把握	20
4. 1	ガイダンス教育の場面とねらい	20
4. 2	シラバスに見る内容の展開	23

2部 実践編

5.	ガイダンス教育の先行的試行	31
5. 1	大学受験者に対するガイダンス教育の例	31
5. 2	生協委員による入学前教育の例	34
5. 3	担当科目のガイダンス教育の例	38
5. 4	ラーニングスキル指導の例	44
5. 5	就職活動におけるガイダンスの例	52
5. 6	入学時の動機づけガイダンス教育の例	59
5. 7	実験・演習ガイダンス教育の例	64
5. 8	進路決定のための自己診断を中心とした ガイダンス教育の例	71
5. 9	短期大学におけるプレ卒業研究教育の例	73
5. 10	大学におけるプレ卒業研究教育の例	78
5. 11	卒業前のガイダンス教育の例	83
5. 12	指導教員制度によるガイダンス教育の例	84
5. 13	入学決定者に対するガイダンス教育の例	86
5. 14	職員によるガイダンス教育の例	89
6.	ガイダンス教育の研究的展開	92
6. 1	概念構築のためのグループ研究	92
6. 2	ビデオを用いた実践教育の研究	101
6. 3	研究会組織による研究の活性化	109
7.	あとがき	111
7. 1	筆者らの研究の現状	111
7. 2	今後の研究の目標	111
7. 3	研究会について	112
8.	付録	115

アブストラクト(英文)	123
-------------	-----

著者紹介	129
------	-----

1 部 理論編

高等教育機関におけるガイダンス教育の展開

1. まえがき

我が国の高等教育機関（ここでは4年制大学と短期大学に限定し、以下大学と記す）における教育の現状には、様々な問題点が指摘されている。これらの問題点の具体的内容については、次章以下に展開されるが、大学側特に大学教員側から問われる問題点は、入学してきた学生の態度に関するものが多い。

例えば入試に勝ち抜いて大学へ進学してきた学生達は、「それほど勉学意欲がない」とか、「フレッシュな気持ちで来ているはずであるのに学問に魅力を感じない」とか、「何に対しても感動しない」とか、「入学早々アルバイトに走り、中にはアルバイトに熱心なあまり単位を取れずに進級が難しい学生がいる」とか、「大学のクラブに所属する学生があまりにも少ない」とか、問題は実に様々である。

このような背景には、18歳人口の減少による若者の価値観の変化、高等教育が大衆化の方向をたどる中で、若者の大学に対する考え方の変化、若者の勉学に対する考え方の変化、若者が受けてきた家庭教育や初等・中等教育の質的变化などがあり、しかもそれがあまりにも急展開で起こりつつあることに問題がある。

それに対して大学側は十分にその実態を把握していないばかりでなく、理解も十分でないという面が多く、当然のことながら大学関係者側の対応策が、十分かつ的確に立てられていないという指摘もある。

こうした中で、若者の質的变化を的確に指摘する識者もいる。東京学芸大学の宮腰 賢教授は、「学生の実態から見たFDの必要性」の提案の中で、次のような指摘をされた。

現代の若者（主として高校生）の特徴として、「こらえ性がない」ということと、「璞（あらたま）の魅力」の2つを指摘され、それぞれについて宮腰教授は以下のように説明された。

「こらえ性がない」というのは、1992年には205万人いた18歳人口が2000年には151万人になり、54万人の減少が起こる。当然人口減少による大学受験競争に軟化傾向が生じ、「勉強しない」、「家庭での学習の習慣がない」、「努力しない」、「集中しない」、「興味の対象がない」、「こだわりがない」などの共通的特徴を持ちつつあるとの指摘である。

もう1つの「璞」の魅力というのは、まだ磨かれていない原石のような魅力を持った学生像である。これを理解するには、まず今までの学生像を考えたい。

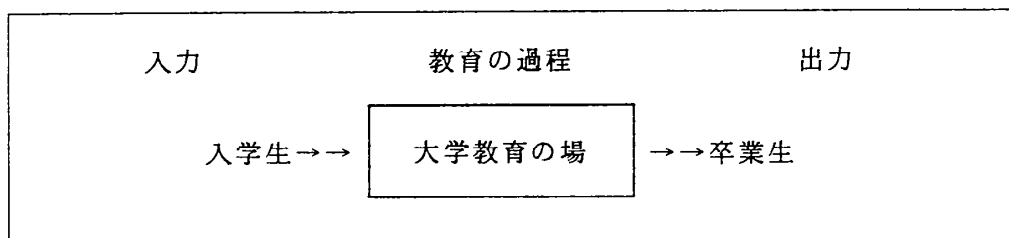
大学受験競争が激化した時代の「伸びきったパンツのゴム症状」や「燃えつき症候群」というのは、小学校時代から高校時代にかけて、徹底的な受験勉強一本槍で、本人の能力よりも受験学力で何とか大学にこぎつけたものの、大学では何もやる気がなくなっている学生の状況を表す言葉である。

これに対して、「璞（あらたま）」すなわち原石のような若者は、これから大学で磨けばいくらかでも伸びて、すばらしい宝石となる可能性を秘めていると見なければならぬという意見である。もちろん、宮腰教授はこのような「璞」の魅力を持った若者に対しては、大学側がそれなりの教育方法を工夫しなければならないということも言われた。

こうした社会的環境の中で、大学は従来からの教育のイメージ（これは多分に旧制の大学のイメージ）から、脱しきれないでいる。例えば、大学の教員の口癖であるが、「君達は大学に来るぐらいだから、勉強は自分で自主的にできるはずだ」とか、「君達は今日から大学生だ、やる気は十分あるだろう」とか、「大学生なら、これくらいのことは常識として知っているのが当たり前だ」とか、「これくらいの本は自分で十分読みこなす実力を持っていないとおかしいよ」とか、ついつい旧制度の（大学生が超エリートであった時代の）模範的大学生を前提として対応しようとしてしまうのである。

ここで、筆者らが考えねばならないことは、2章で詳しく述べるが、もはや大学は大衆化されてしまったのである。したがって大学は、教育のやり方を自然流ではなく、計画的かつ意図的に、もっと強く言うならば、「教育工学的に」工夫し、実践しなければならないところに来ている。

筆者らの教育工学的な考え方を理解してもらうためのパラダイムとして、「大学という教育の場（プロセス、教育をして人間を育てる過程）」と、「その場に入って来る入力（インプットとしての新入生）の属性」を、事前に十分分析して（見抜いて）おいて、そして教育の方法を十分用意して、「出力（アウトプットとしての卒業生）のレベル」を設定し、「適応的に」教育を行なうという見方が必要になる。図1-1にその説明図を示す。



↑
この場全体が、社会という環境の中にある。

図1-1 大学教育を表すブロック図

「適応的に」という言葉を使用したが、この言葉には少なくとも3つの意味があると考えられる。

①新入生への適応

入学して来る新入生のレベルに、大学側が用意している教育のプロセスのレベルをうまく合うように調節するという意味での適応的ということ。

もし大学側が用意している教育のプロセスに対する入力としての新入生の属性を考えた場合、新入生の学力を設定もせず、しかもその学力を同定もしなかったら、大学が用意した教育を入学生に適応させることはできない。そうなると、大学側は入学生の学力を仮定して扱い、大学が用意した教育のレベルに達しないままで放っておくか、不適応な者として切り捨てるか、留年生にしてしまうかである。

②社会の要求への対応

社会が大学の卒業生に要求しているレベルに、大学が卒業させようとする学生のレ

ベルを合わせるように、大学側が用意した教育のプロセスのレベルを調節するという意味での適応的ということ。

もし大学側が用意した教育のプロセスに対する出力としての卒業生のレベルを、社会が要求している水準に合わせることができなかつたら、「あの大学は実力のない学生を卒業させている」として、その大学を評価の低い大学として社会から認知されてしまうであろう。あるいは、社会が要求する卒業生のレベルを固定的に設定してしまうと、当然その水準の学力を持った学生のみを世の中に送り出すことになり、卒業延期生が大学に溜ることになるであろう。

③内部組織への適応

大学側が提供できる教育のレベルは、担当する教員の特性で決まるので、上の①と②の調節機能は、教員の適応性に依存している。したがって、大学側は常に教員が適応的であるように、大学の組織をあげて教員を管理したり、指導したりするという意味での適応的ということ。

大学のシステムが提供できる教育が、入力レベルにも出力の要求にも適応できなかったら、そのような大学は、「浮世離れしたところ」とか「常識が通用しない大学」とか非難されるであろう。

いずれの場合も教育的に見て、悲劇である。したがって大学は、若者の特性を知って（入力を見て）、社会の将来を予見しながら出力のレベルを設定して、両者を結ぶ最適な教育のプロセスを適応的に提供しなければならないのである。

このような考え方に立てば、宮腰教授の指摘された現実を十分に踏まえた上で、これから大学は「璞」状態の若者を入力として大学教育の場に受け入れるのであるから、それに適応する教育の方法を、各大学が開発しなければならないと言えよう。

過去の（現在までの）大学教育の理念や方法は、すでに磨かれてきた宝石のような若者達向けのものであった。あるいは、少なくとも理念上は宝石の状態を仮定してきたものであった。

ところが、今や「璞」の学生向けの教育理念を設定し、教育方法も新しく作り直さねばならないのである。しかも大学側が用意した教育の場で、学生達に満足感を与え、卒業時にはその実力を保証し、在学中はやる気を触発・持続・創造させねばならないのである。

「筆者らがこれから展開しようとしているガイダンス教育」は、まさにこのような若者の変化に、これからの高等教育が「どう対処して行くかの答えの1つになる」のではないかと考えるものである。

参考文献

- (1) 研究交流部会Ⅱ「学生による授業評価とFDの必要性」、一般教育学会16回大会発表要旨集録、1994年6月4～5日、名古屋大学情報文化学部。
- (2) M. トロウ、『高学歴社会の大学』、東京大学出版会、1976年。

2. 高等教育機関におけるガイダンス教育

まえがきに述べたことは、高等教育に関する不満や不安などに各立場による認識の違いがあり、また、多くのギャップが生じているとも解釈できる。そして、高等教育を行なう、あるいは受けるための準備や援助が必要であることを意味している。そこで本章ではまず、そのような教育（ガイダンス教育）の必要性について述べ、さらに高等教育とガイダンス教育の関係、ガイダンス教育の目標と方向、そしてガイダンス教育を継続する必要性について述べる。なお、以下の内容は、高等教育全般にあてはまることであるが、大学・短期大学を話題を中心に展開して行くこととする。

2. 1 ガイダンス教育の必要性と高等教育

プロトコル(Protocol)とは、本来条約原案、暫定協定などの意ではあるが、最近ではrule, normなどと並んで行動規範といった意味にも用いられる。つまりあるコミュニティに属する人間が互いにコミュニケーションするときの行動規範(プロトコル)といった意味で、コミュニティの存在意義や解釈、それに基づく互いの行動の要求ルール、手続きなどの方法や解釈にもおよぶ。

その前提に立てば、大学にも学生としての行動規範(学習プロトコル)が存在する。しかしそのプロトコルは、その当事者(ここでは教育側と学習側の両方)が共通認識を持たなければ成立しえないにもかかわらず、現在の大学では関係者間で認識のずれが見られるのではないだろうか。それをプロトコル・ギャップと言うのである。

(1) 大学教育に対する認識のギャップ

学校が文化の再生産のための機関であり⁽¹⁾、また階層文化が存在すると考えるなら⁽²⁾大学もある階層文化のプロトコルの影響を受ける。しかし、その中心となる階層も、ヨーロッパ、アメリカ、日本の間では異なっており、どれがアカデミック・スタンダード(正統的学校文化)であるとは言いがたい。さらに教養的大学と目的的大学との違い、例えば文学部と医学部、あるいは年代や大学の設立の主旨など、個々具体的にになると「大学とは何か」を語るのは難しく、プロトコルも抽象的になりがちである。まして、大学へのかかわり方のそれぞれの視点や立場を考慮するとさらに多岐に分かれる。

大学への視点は、表2-1のような立場により大きく異なる。例えば専門知識や技能の習得についても、大学関係者にとっては習得そのものが目的に近いであろうが、大学を取り巻く者例えば社会や企業にとっては、活動のための準備として位置づけられるであろうし、学生やその家族などにとっては、付加価値の1つにすぎないということがあり得る。

そして付加価値の具体的内容と、その個々のウェイトも3つの立場の間ではかなり相違するに違いない。

(表2-1 大学への認識と立場)

ここでは、大学関係者の視点から大学教育を考えて見ることにする。したがって大学教育によって得られるとされる付加価値についても、ここでは大学関係者の価値観の許容範

困で考える。(例えばサークル活動は就職に有利になるという価値は認めても、セックス体験をするためという価値については大部分の大学関係者は認めがたいであろう。) 大学を卒業することで得られる付加価値を、当面、次の3つに分けることにしよう。

A. 個人ごとの評価の変化

大学卒業という履歴、就職への資格、モラトリアムを楽しむ。

大学を通過することににより、世間の評価や扱い方が外見的な変化として見られる。

B. 共通体験による意識変化

所属意識、同窓意識、下宿生活体験意識、寮生活体験意識。

大学生活を経験することや体験を共有することによる、内面的な意識変化など。

C. 個人の資質の変化---付加価値をつける。

授業料の対価としての付加価値(後述)をつけること。

以上の3つの付加価値のウェイトを大学関係者の視点から考えると、前述のように大学関係者自身はC→B→Aの順であり、学生や家族などはA→B→Cの順(B=CまたはC、Bの者もいる)であろう。そして社会や企業はC→A→Bの順ではないかと大学関係者は推測している。したがって、大学関係者の視点から見ても、この3者の大学教育に対する認識はかなりのずれがあると考えられる。

しかも所属階層により、高等教育を受ける目的が異なっており、昔はそれが校種の違いなどで顕在化していたのが、現在は潜在化してしまっている(表2-2)。しかし実際は高等教育の校種を分けて考えるべきという意見もあり、大学関係者の間にもいくつかの考え方があ

(表2-2 所属階層と大学進学目的)

(2) 大学教育のプロトコル・ギャップ

大学教育に対して立場によって認識が違えば、そこに成立するプロトコルも違いができるのは当然であり、その結果各々のプロトコルのずれがプロトコル・ギャップとして表出する。

(図2-1 大学に対する立場とプロトコル)

①大学関係者の感じるプロトコル・ギャップ

- ・不本意入学.....不満からのスタート、しかし再受験するほど学力や意欲があるわけではない。ただただ不満。
- ・学習意欲の欠如.....不本意就学、勉学より学生生活(キャンパスライフ)の重視。
- ・基礎学力の低下.....進学率上昇、大学の増加による学生の学力格差。
- ・学習スキルの欠如.....レポート作成力、読書力など。
- ・学習マナーの低下.....私語、学習の意味、大学の大衆化、大学の価値の低下。

②学生などの感じるプロトコル・ギャップ

- ・授業が理解できない、理解できるように指導してくれない。
- ・高校までの知識のむしかえしと、惰性的延長。
- ・大学広報によるプロパガンダとの大きなギャップ。

なお前述のように、これは大学関係者の価値観の許容範囲に立つプロトコル・ギャップである。ギャップ解消の一方法としての「学生による授業評価」の採用に際して、学生の成

績や態度によって発言権に差をつけようとする考え方があるが、このようなやり方は教育側の価値観を通そうとするもので、大学関係者の価値観の許容範囲から教育を行なおうとする立場の現れである。

③社会や企業の感じるプロトコル・ギャップ

- ・専門的な学力がない……科学技術、研究条件の不備。
- ・実践的専門力がない……仕事ができるための基礎力がない。
- ・高等教育卒業者としての問題解決行動ができない……大学教育の質の低下。
- ・基本的態度(人間形成)ができていない……大学教育への不信。

その結果、専門教育は就職後、企業内教育で行なうので、大学には入学試験による素材の選抜だけを行なってもらえれば良いという極端な意見さえある。

2. 2 高等教育とガイダンス教育の関係

(1) 大学教育の付加価値

図2-2に示した

$$\text{卒業生の持つ能力} - \text{入学生の持つ能力} = \text{大学教育の成果}$$

の大学教育の付加価値であるが、ここでは次の3つに分けて考える。⁽⁴⁾

(図2-2 大学教育の入力と出力)

I. 学問(専門教育)

- 専門知識の理解、専門技能の習得。
- 学問体系の理解。

II. リベラルアーツ(大学的教養)

- 知的好奇心---知識・教養。
- 問題解決能力。

III. 人間形成

- 学生生活のエンジョイ。
- Generality(統合力)を身につける。

このうち、大学教育ではIを専門課程において系統的に学習し、IIを主に一般教育で学ぶことが意図されていたが、現在一般教育の改革が進行している。⁽⁵⁾ またIIIは大学教育の場面では、付随的な要素と見なされていた。しかし最近では、学生の中に学習意欲喪失や精神面の乱れなど、学力以外の理由で留年やドロップアウトが増加している。したがってこれからは、IIIについても大学教育の中で意識し、少なくとも学習への側面からの援助として位置づける必要があるのではないだろうか。⁽⁶⁾

(2) プロトコル・ギャップの生じる原因

前述のように、大学教育に対する認識のずれからプロトコル・ギャップが生じている。

ここでその原因について分析する。

①進学希望者の増加

大学進学率は40%を超え、しかもさらに上昇しつつある。その結果、学力や出身階層、意欲などの多様な学生が入学することとなる。例えば基礎学力の欠如のため授業が成立しない、大学教育の体験者が身近にいないために生じる大学制度、大学教育への無知、無理解、また学習そのものに関心を示さない学生の存在などである。

(表2-3 大学進学率の増加)

②学習ニーズの変化

近年学問研究に関心を持ち、科学的思考を身につけることを目的とする学生が減少している。すなわち、研究者をめざす者は少数派で、大部分は社会へ出てからの知識、方法としての大学教育を考えている。この傾向は大学院修士課程の院生でも存在する。しかし教育する側は研究者、専門家養成のための特殊な手法、知識の伝達を第一義に考えている。つまりアマチュアのスポーツ選手をめざす者にプロフェッショナルの練習法を指導しているようなものであろう。

③大学関係者の教育認識のずれ

大学がマス化、大衆化しているにもかかわらず、大学関係者は少数エリート時代の大学教育の方法を行なっている。

- ・研究が重要で教育は本務でないという傾向がある。
- ・研究室中心のいわば徒弟制による指導法……人間形成には良い面も多いが、大人数では不可能である。
- ・旧態依然とした授業法……ノートを読み上げるだけというのはもっての外であるが、学習態度は自らつけるべきというエリート主義。

その結果、適応できない潜在的な退学者が増加しても、現状では大量の退学者を出すことに、社会や大学当局が許さない。

④大学の序列化の拡大

大学が増えたにもかかわらず、個々の大学の特色は高校生に伝わってこない。したがって、偏差値などによる序列化のみで選別が行なわれ、ほとんどの学生が何等かの意味で不本意入学になる。その結果は学習意欲喪失などが起こる。その改善として受験産業では偏差値以外の指標による大学選抜の情報提供を始めており⁽⁷⁾、また一部の大学でも、研究の特色やカリキュラムの特色などをアピールを始めている。⁽⁸⁾

(3) ガイダンス教育の定義

大学教育が付加価値を少しでも多く効果的につけるために、プロトコル・ギャップを解消する教育が必要となった。それを筆者らはガイダンス教育と名付ける。これは学生が様々な学習活動を行なうために必要とされるプロトコルを整えるための教育であり、要約すればガイダンス教育は「①学生が②学生であるための③準備教育」と言える。

ここでの

- ①「学生が」とは、身分としての学生を指す。

②「学生であるため」とは、次の3要素を意味する。

○学生として学ぶ----Ⅰの学問をする。

○学生として考え、生活する----Ⅱのリベラル・アーツを身につける。

○学生として生き、育つ----Ⅲの人間形成をする。

③また「準備教育」については、入学前や専門教育のためのプレ・エデュケーションばかりでなく、基礎演習など学習のベースになるものやカウンセリング、オフィスアワーなど側面援助的な教育も含む、大学教育全体の基盤となるものである。

すなわちガイダンス教育は、学生が大学教育から付加価値を効果的に獲得するために行なわれる側面援助としての教育であり、プロトコル・ギャップを解消するための手法・手段でもある。

2. 3 ガイダンス教育の目標と方向

(1) ガイダンス教育の意義

ガイダンス教育は大学教育に対して次の意義を持つ。

①大学設置基準が大綱化され大学の個性化が可能になったが、今のところ多くの大学がどのような人材を輩出するのか依然読み取りにくい。筆者らはガイダンス教育という具体的カリキュラムの提示によって個々の大学が描く人間像を明らかにし、実質的な大学の個性化に寄与する。

②大学の大量化とともに顕在化する大学生の学力、知的好奇心、レディネスなどの不足による教育効果の低下が見られるが、ガイダンス教育を具体的に推進することによって高等教育のある種の水準を保つことに役立つ。

③各種のガイダンス教育を提示することによって、大学教育の教育方法の工夫、改善、人間形成を含んだ教育効果への関心を高め、FD(Faculty Development)を促進する。

④学生レディネスの育成とアイデンティティ形成のための努力は、個々の大学における対応では限界があるが、系統的調査を実施し、他大学との比較・検討を行なうことにより、個々の大学における人間形成教育の具体策を得ることができる。

(2) ガイダンス教育の目標

ガイダンス教育は以下の目標を持つ。

①大学生としてのレディネス水準の維持

高等教育で学ぶために大学生としての意識、大学についての知識、ラーニングスキルが必要である(3. 1節参照)が、基本的なレベルに達していない者に教育し、水準を維持する。

②大学教育のプロトコル・ギャップの調整

a)プロトコル・ギャップの存在の認識

授業の場でのプロトコル(大学における学習)を認知させる。また授業中の私語、化粧、ウォークマンを聴く、ポケベルを鳴らす、討論への不参加などのカウンター・カルチャーに対して理由を説明し、禁止する。

b)プロトコル・ギャップをどうするべきか考える

大学という環境の存在、学習のためのプロトコルと、学生を取り巻く環境や経験からのプロトコルとのギャップをどうすべきか。

c)プロトコル・ギャップの調整

一方的にプロトコルを押しつけるのではなく、両者が歩み寄り妥協しながら、新プロトコルを形成する必要もある。(取り引き?)

③高等教育のデザインの提示と理解

大学教育にかかわる知的好奇心、創造性といった価値観や、研究がそれらの価値観に根ざしていること、また科学的真理といった手法の理解や、大学という枠組み(デザイン)の理解。

以上の目標は、「学ぶために」が第1目的であるが、「大学を卒業するために」や「社会の要請のために」⁽⁹⁾ といった大学で学ぶということすべてにかかわるガイダンスでもある。

(3) ガイダンス教育の特色

①高等教育を受けるためのレディネス教育である。

大学教育の目的を達成するための側面からの支援であり、土壌整備(準備教育)である。

②ガイダンス教育は従来経験的に行なわれていたものを、組織化し構造化した考え方であり、方法である。

③オリエンテーションやカウンセリングなど、大学の運営を補完するためのものでなく、教育である。したがって授業として行なわれる場合は単位認定が可能である。

④ガイダンス教育は高等教育の入口場面だけでなく、在学中や卒業期にも行なわれる。

(図2-3 ガイダンス教育の時期とウェイト)

(4) ガイダンス教育の手法

ガイダンス教育の展開にあたって以下のことを踏まえた手法を開発する。

①経験的なガイダンス教育(前段階)

学習能力や知的好奇心の有無、また所属する階層は、社会環境、入学試験などのフィルターにより選択された、学習レディネスのある者に限られ、入学後にガイダンス教育の目標についての経験的な教育がなされてきた。

②システムのガイダンス教育(必要性と可能性)

しかし、大学教育の付加価値に対する考え方も多様になり、(学力だけでない)レディネスを持つ入学者の選択が困難になった現在、新しい考え方と手法が必要になる。そこで図2-4のような手法を適用すれば、素材としての入学者の資質がバラついていても各々の段階からの教育のスタートが可能になり、また大学教育の付加価値についても、現在のように暗黙の了解としてでなく、顕在化させて議論できるであろう。(具体的な展開については3章以降で述べる。)

(図2-4 教育のシステム)

③ガイダンス教育の方法の確立

ガイダンス教育の一般化を行なうことにより普遍的なカリキュラムが提供でき、それ

と個々の具体的な実践例とのフィードバックが行なわれる。

このような手順と方法を踏まえることによって、ガイダンス教育は教育研究の対象として確立できると考えられる。

2. 4 ガイダンス教育の将来方向

ガイダンス教育の展開は表2-4の段階が考えられる。

(表2-4 ガイダンス教育の段階)

現在は前段階と考えられ、多くの事例が見られる(4章参照)。そして筆者らは、第1段階としての研究、提案を行ない、実践しようとしている。

その中で第2段階にも適用できる、標準的なカリキュラムの提案を行なおうとしている。ところで、対症的、育成的ないわば補習教育的な役割が終わればガイダンス教育の役目も終了するのではないかとの意見があるかもしれない。しかし大学教育がある種の価値観を前提にし一定の水準を保ち、ある程度のレディネスを必要とするなら、そして大学をとりまく環境からそのような者のみが入学して来るという前提が不可能なら、ガイダンス教育はますます重要性を持つであろう。

事実、大学を取り巻く環境は、エリート教育であった時代に戻ることは考えられない。まして18才人口減少による大学の冬の時代、生涯学習化による社会人入学などの動きを考えれば、大学自らが入学者に対して、前提条件を提示し、学習のためのレディネス教育を行なうというガイダンス教育の考え方が妥当になってくる。

参考文献

- (1) P・ブルデュー&J・クロード・パスロン著、宮島喬訳、『再生産』(1970)、藤原書店、1991年。
- (2) ピエール・ブルデュー著、石井洋二郎訳、『ディスタクシオンI・II』(1979)、藤原書店、1989年。
- (3) 桑田禮彰他、『大学改革とは何か』、藤原書店、1993年。
- (4) 中村・秋尾他、「学生が高等教育に適応するための準備教育」、日本教育社会学会第46回大会講演論文集、1994年。
- (5) 大学審議会、「大学教育の改善について」答申、1990年2月
- (6) 岩崎・石桁他、「学生のPI(パーソナル・アイデンティティ)確立のための研究(1)~(4)」、日本教育工学会第6~9回大会講演論文集、1990年~1993年など。
- (7) 神山陽子編、「リクルートムック94号大学選び新基準④~⑦」、リクルート、1994年
週刊朝日編、「大学ランキング'95」、朝日新聞社、1994年など。
- (8) 京都大学新聞社編、『京都大学サクセスブック93京都大学を知る本』、六甲出版、1992年。国立大学協会他編、『国立大学ガイドブック平成6年版』、大蔵省印刷局、1993年など。
- (9) 古川泰久、『変革の時代に求められる人材について』、大学と学生第346号、文部省
高等教育局学生課、1994年5月。

表 2 - 1 大学への認識と立場

立場	視 点	大学への認識
大学関係者 学生・家族 社会・企業	教育側 受益者側 卒業者の受け入れ側	研究・学習 モラトリアム・付加価値 準備期間

表 2 - 2 所属階層と大学進学目的

所属階層	大学に求めるもの
上位	エリート意識を持ちたい、教養（リベラル・アーツ）を身につけたい。
中位	高度技術、知識（テクノクラートになりたい）、実質資格を取りたい。
下位	名目的資格を取りたい、楽しい学生生活（モラトリアム）を送りたい。

表 2 - 3 大学進学率の増加（学校基本調査）

	男	女	全体
1993年度	38.5	43.4	40.9
1994年度	40.9	45.9	43.3

%(浪人生含む)

表 2 - 4 ガイダンス教育の段階

研究の段階	目的	内容	イニシャチブ	系統性
前段階 (現状)	対症療法的	基礎学力、 オリエンテーション	教員の個人的 実践として	相互交流なし
第1段階	治療的	基礎演習など	個別実践とし て	実践研究、研究組織化
第2段階	育成的	学習のカリキュラム の一環として	学科・専攻と して	実践組織、一般化
第3段階	普遍的な概念として・教育 課程に組み込まれる		専門機関で	大学教育として定着

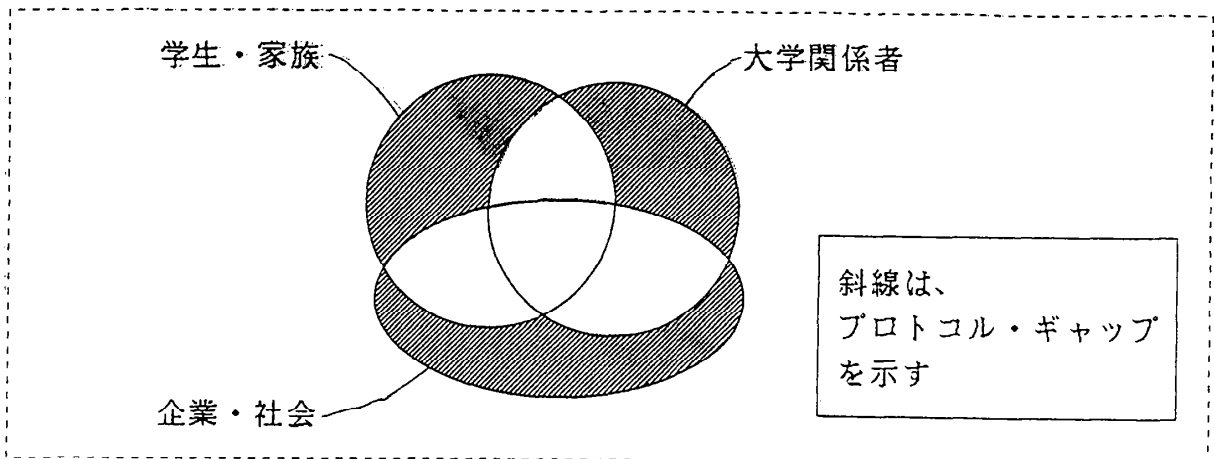


図 2 - 1 大学に対する立場とプロトコル

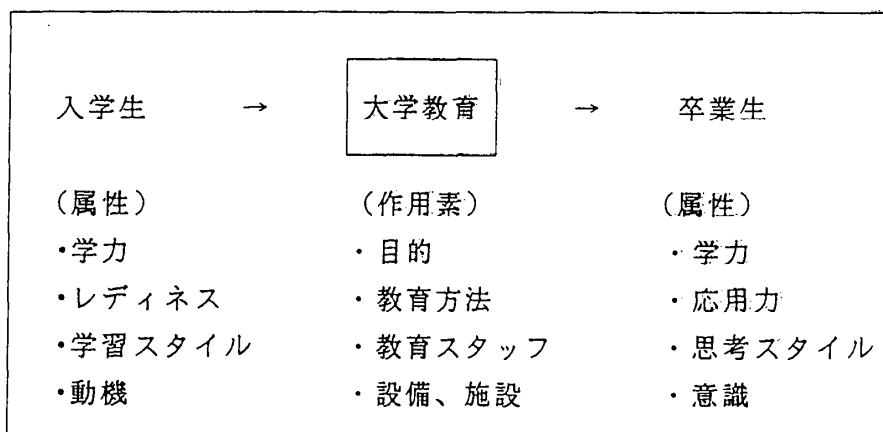


図 2 - 2 大学教育の入力と出力

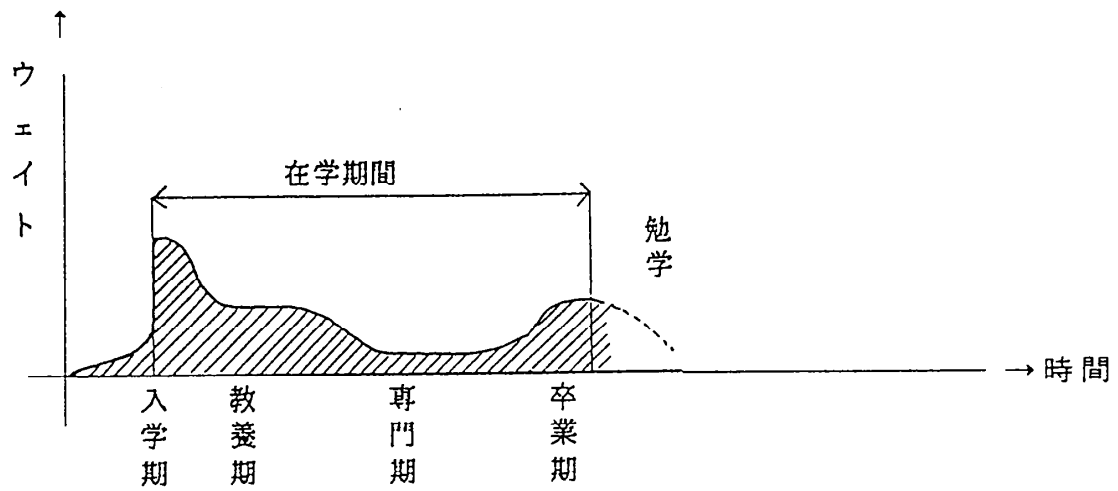


図 2 - 3 ガイダンス教育の時期とウェイト

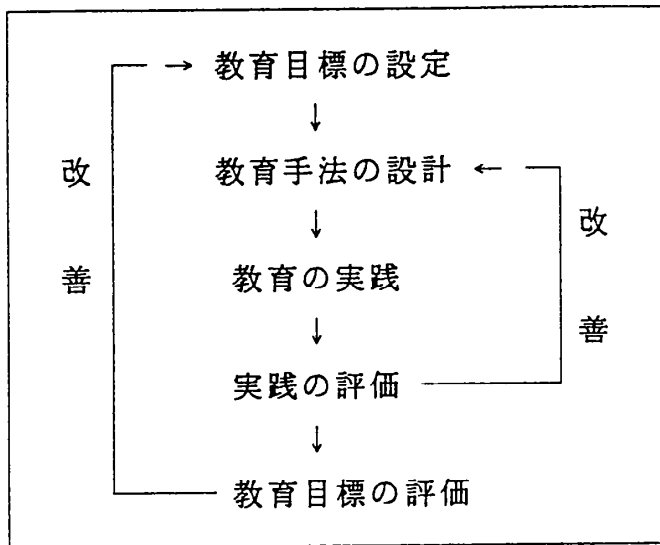


図 2 - 4 教育のシステム

3. ガイダンス教育のねらいとカリキュラムの設計

入学を許可された学生達は、大学の門をくぐったとたん高校生とは異なる教育環境に置かれることで、少なからず戸惑いを感じている。それは、学生達があまりにも急に教員からも一般社会人からも大人としての扱いを受けるからであろう。当然、学生は現在どんな立場にあるのか、大学で何を勉強したら良いのか、どのような学生生活を送ったら良いのか分かっていない。ましてや入学してからの大学生活や社会生活を通じて、どのように自分を成長させていけば良いのか、自分自身どのような理念を持てば良いのか分からないので、主体的意識を持ってそれらを明確にしている者はきわめて少ないのが現状である。そこで筆者らは、このような学生に対して、新たな教育が必要であると考えた。それがガイダンス教育である。

①それには、まず知的好奇心や専門分野の探求心など、大学生としての学習動機と意欲を持って学生生活を送れるように、大学生としての意識を持たせることである。

②次に円滑な学生生活が送れるように、大学のシステムや授業の形態などを理解させ、学生生活に適応させ、スムーズに教育が受けられるよう、大学の仕組みについての知識を身につけさせることである。

③さらに自分で学習できるラーニングスキルを身につけさせることである。

筆者らはこの新たな教育をガイダンス教育の3本柱と呼んで研究を進めている。本章ではガイダンス教育の3本柱について述べ、さらにガイダンス教育の標準的なカリキュラムについて述べる。なお、この標準的なカリキュラムの内容はすでに個々の大学・短期大学で実施されているところもあるので、いくつかの具体例を参考にして構成した。

3. 1 ガイダンス教育の3本柱（意識、知識、ラーニングスキル）

現行の大学入試制度では、高等学校卒業直後に入学する学生、社会生活後に入学してくる学生、帰国子女、海外からの留学生と多様な入学形態があるが、大学への適応性は入学前の経験に依存する可能性があって、それぞれの事情によって実際の大学生活の各場面で不適応を起こす学生が少なからず存在する。この現状を少しでも改善するために、特に入学時や入学当初のガイダンス教育が必要である。このような不適応やプロトコル・ギャップを緩和させ、解消することが重要である。以下に筆者らの考えているガイダンス教育の3つの柱についてさらに具体的に述べる。

（1）第1の柱は「大学生としての意識を持たせる教育」である。すなわち、大学生としてのアイデンティティを持ち、高等教育を受けているという自覚など、学習意欲や動機づけとなるものである。そして、入学時や入学間もない学生に対してガイダンス教育を実施する場合、手始めに学生としての意識を持たせる教育をする。成長過程の学生に自己分析・自己理解・自己管理の意識を学ばせ、人間性を高めることや広い教養を身につける意義を知ってもらう。

また、大学教育の目的を理解させる。すなわち、大学とは何かといった大学の設置の目的、そして個々の学生が学ぶ専攻分野の学問的意義などを理解させる。また社会の中で大

学という組織がどのように評価されているか、また学生に対する期待はどうなっているかなど、専門の知識や技能を身につけることの社会的意義を理解させる。

次に、大学における人的交流の場面に参加できること、例えば、サークルや学校行事などに積極的に参加できるのはもちろんであるが、研究室や指導教員とスムーズに対応できることや、演習・ゼミナールなどでルールに沿って授業を盛り上げていくことなども含まれる。さらに自分が所属する大学の学生であるという意識を持ち、その大学の特色や校風や文化などを理解する。また狭義には、所属する専攻や研究室の構成員である意識を持せることである。

(2) 第2の柱は「大学や大学教育についての知識を与える教育」である。すなわち、中等教育との違いをはっきりと認識させ、スムーズに大学生活を送れるようにする。そのためには大学側の提示するフォーマルな情報だけでなく、インフォーマルないわゆる隠れたカリキュラムとのバランスに気づかせることなど、大学のシステムの理解、大学における学生に必要な情報の流れなどを理解させるような教育である。具体的には以下の項目を挙げて学生に知ってもらおう。

①大学というシステムの理解

受講科目の登録から、単位取得までの一連の流れや、教務・図書館などのかかわり方を知る。特に大学では、個人の意志が尊重されることや学生が自主的に行動することが期待されるなどを理解させる。

②大学での教育システムの理解

授業の形態の違い（講義・演習・実験・ゼミナールなど）を理解する。また希望するゼミナールや研究室とのかかわりから、卒業論文の作成・卒業研究に至るまでの流れも理解し、積極的に参加できるようにする。

さらに、掲示や指示の重要さが理解できて、学生が大人として授業に参加し、責任を持たねばならないという態度の形成も必要である。

③その大学の設置目的の理解

その大学で何を学ぶことが可能かを、大学の歴史、大学独自の教育理念などを通じて理解する。また各々の専門内容についても、学問の世界における位置（基礎分野－応用分野、一般分野－特殊的分野）と、水準などが理解できるようにする。

(3) 第3の柱は「ラーニングスキルを身につける教育」である。すなわち、必要性の理解よりも、学生がテクニックを習得できることが重要である。実践的な内容は、個々の大学の実状に応じて作成される。そして、以下のような視点から学生に具体的に指導を行なう。

①理解能力（情報の収集・分析・整理など）

(1) 講義を受ける場合には、受講態度に注意し、板書・口頭したものをノートに取るスキル、テキストの読解や配布プリントの整理と活用をするスキル。

(2) 文献を捜す、読む、まとめるスキル。

(3) 文献リストを作るスキル。

(4) 専門書以外の図書を読んだり、新聞から必要な記事を探し出すスキル。

(5)研究テーマを見つけたり、テーマを発展させるスキル。

②論理的能力（判断）

(1)自分の勉学や研究に必要な情報かどうかの判断、またそのレベルの判断ができること。

(2)入手した情報の意味が読み取れること。

(3)他の情報について論理的な判断が下せること。

(4)議論をする必要性と議論のときのルールが理解できること。

(5)実験の手順を作り、実行できること。

(6)アンケートの手順が分かること。

(7)報告文が作成できること。

③表現能力（まとめとプレゼンテーション）。

(1)アイデアを出し、まとめられること（KJ法、ブレインストーミングなど）。

(2)意見交換し、その中から知的生産の方向にもっていけること。

(3)レポートが書けること（感想文との違いを理解していること。） 内容の情報を集められること。レポートの手順にまとめられること。レポートとして表現できること。

(4)発表ができること。原稿が作れること。図表にまとめられること。口頭発表のテクニックが使えること。

(5)発言ができること。質問、討論、意見の違いが明確にできること。

3. 2 ガイダンス教育の標準的カリキュラム

4年制大学や短期大学（以下大学と記す）のいくつかで行なわれているガイダンス教育としての内容は、以下のような教育の中で部分的に行なわれている。

a. 入学時教育

b. 一般基礎教育

c. 専門基礎教育

d. 専門教育

e. 教養教育

f. 卒業前教育、など

これらは教員が教材となる図書と講義を基にした一斉方式で、一方向的な情報伝達であり、学生には受身的なガイダンス教育である。

こうした中で、本研究で考えているガイダンス教育は、表3-1、表3-2に示すように、3段階すなわち「カリキュラムの中に組み込まれる体系的な学習」、「学習支援環境を利用した学習」、「自主的学習としての事前準備教育」に分け、さらに入学前と入学後のガイダンス教育に分けられる。

例えば、入学前における学生委員によるガイダンス教育の内容は、大学入学予定者に対して、入学式直前に「大学生活入門講座」開催する。これは入学後スムーズに大学生活に入って欲しいからである。5. 2節の「生協委員による入学前教育」の例を参照されたい。

（表3-1 と 表3-2 のカリキュラムの例）

参考文献

- (1) 中村博幸他、「大学におけるガイダンス教育とその研究」、京都文教短期大学研究紀要、第32集、1993年。
- (2) 梅棹忠夫、知的生産の技術、岩波新書、1994年。
- (3) 石桁正士他、「ガイダンス教育の展開(1) -コンピュータ支援による教育の試み-」、電子情報通信学会信学技報、ET93-129、1994年。

表 3-2 4年制大学におけるガイダンス教育の標準的カリキュラムの一例

	入学前	入学式 4 5 6 7 8 9 10 11 12 J 2 3	大学1年次 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	大学2年次 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	大学3年次 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	大学4年次 4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3	卒業式 1 2 3
カリキュラムの中に組み込まれる体系的な学習		▲ 進路のためのガイダンス ▲ ラーニングスキルの基礎演習	▲ 進路のためのガイダンス ▲ ラーニングスキルの基礎演習	▲ 進路のためのガイダンス ▲ ラーニングスキルの基礎演習	▲ プレゼミ ▲ 就職のためのガイダンス	▲ 就職のためのガイダンス ▲ 大学院進学のためのガイダンス ▲ 特論(社会人としてのガイダンス) ▲ 卒業論文に関するガイダンス	
学習支援環境を利用した学習		▲ アドバイザーシステムによる学習指導 ▲ 指導教員による学習相談 ▲ 学生相談室の利用	▲ アドバイザーシステムによる学習指導 ▲ 学生相談室の利用	▲ アドバイザーシステムによる学習指導 ▲ 学生相談室の利用	▲ 卒研支援システムによる学習指導 ▲ 卒研配属のためのガイダンス ▲ 学生相談室の利用	▲ 卒研支援システムによる学習指導 ▲ 就職情報検索システムによる学習 ▲ 学生相談室の利用	
自主的学習としての事前準備教育	学生委員によるガイダンス	▲ 図書利用講座 ▲ レディネス補習講座 ▲ 自己認識システムによる学習 ▲ 学力補習講座	▲ 教養基礎学習から専門学習への認識 ▲ 自己認識システムによる学習	▲ 教養基礎学習から専門学習への認識 ▲ 自己認識システムによる学習	▲ オープン卒研室 ▲ 自己認識システムによる学習	▲ 自己認識システムによる学習	

4. ガイダンス教育の内容把握

4. 1 ガイダンス教育の場面とねらい

大学において、実際にガイダンス教育を行なう場面は、学生のレディネス不足を補う教育の必要性を主張するだけでも、個別事例として実にさまざまな局面が存在する。場合によっては授業の科目の数だけの、あるいは授業時間の数だけのガイダンス教育の必要性が求められるかもしれない。しかし、本章ではガイダンス教育の具体的展開を、学生の在学期間の4年間あるいは2年間（2年制短期大学）を中心にした時系列的展開と授業場面やその他の生活場面などの個別場面の範囲で、それらのねらいを箇条的に整理する。次に、実際の各大学における授業科目の内容から、筆者らが提唱するガイダンス教育に相当すると判断した事例を整理し、紹介する。

（1）時系列的展開

大学生活の4年間あるいは短期大学の2年間という時間的な流れの中でガイダンス教育を考えると、まず、入学前の事前教育、次に入学当初の学生に求められるレディネス教育、その後、専門を学ぶために必要とされるレディネス教育、そして最後に、卒業間近かの大学教育を経た人材として社会に出る前に必要なレディネス教育の4つに大別できるであろう。

これら4つの時系列のもとで行なわれるガイダンス教育のねらいを要約すると、以下のようになる。

（a）入学前のガイダンス教育のねらい

一般的には入学前に大学とはどのようなところかを知り、大学で学ぶことと、学生自身が求めている付加価値が実現できるかどうか、そのためにはどのようにしたら良いかを理解し、学生生活を過ごせるようにする。

（b）入学当初のガイダンス教育のねらい

◇大学生としての意識を持つことに関して

- ①社会的理解 …大学で学ぶことの社会的意味を理解する。
- ②大学の目的理解…高等教育の目的、一般的な大卒の人間像を知る。
- ③成長過程として…大学で学ぶのに必要十分な個の確立、人格を準備し、これから教育を受けるのにふさわしい視野と人間性を持つ。
- ④コミュニティ構成員意識…学生という意識を持つ。大学文化を理解する。

◇大学についての知識を持つことに関して

- ①設置の目的 …その大学で何を学び、どんな付加価値が得られるかを知る。
- ②大学システム …教育理念からその大学の目的を知る。
- ③教育システム …その大学のカリキュラムの中で、基礎教育（あるいはそれに相当する教育）の目的を知る。
中等教育との違い（授業の成立、学習活動の仕方）を理解する。
- ④コミュニティ理解…大学側との接し方、教員と学生との関係を知る。

クラブ、サークル、課外活動、自主ゼミなどを知る。

⑤ 帰属に必要なこと…自分が所属する大学の学生、校風や文化を理解する。

◇ラーニングスキルを獲得することに関して

基礎教育に必要なラーニングスキルを身につける。

(c) 専門の学習のためのガイダンス教育

◇大学生としての意識を持つことに関して

① 社会的理解 …その専門をその大学で学ぶことが社会にとって、どういう意味を持つのかを理解する。社会的役割を理解する。

② 学科、専攻の目的理解…設置の目的、専攻後の人間像、社会人像を知る。

③ 成長過程として…専門知識を学ぶのに必要十分な個の確立、人格を準備し、専門的教育を受けるのにふさわしい視野と人間性を持つ。

④ コミュニティ構成員意識…～大学～専攻の学生という意識を持つ。

◇大学についての知識を持つことに関して

① 設置の目的 …その学科で何を学び、どんな付加価値が得られるかを知る。

② 大学システム …教育理念からその学科、専攻の目的を知る。

③ 教育システム …その学科のカリキュラムの専門の質、分野構成、特徴などの教育体制などを知る。

④ コミュニティ理解…指導教員との接し方、教員と学生との関係を知る。
(授業、ゼミナール、研究、研究室での人間関係)

⑤ 帰属に必要なこと…～大学～専攻の社会的価値、校風や文化の理解、学風、専門の伝統などを理解する。

◇ラーニングスキル

専門教育に必要なラーニングスキルを身につける。

(d) 卒業前のガイダンス教育

◇大学生としての意識を持つことに関して

① 社会的理解 …大卒者が社会にとって、どういう意味を持つのかを理解する。

② 大学の目的理解…一般的な大卒者の人間像を知る。

③ 成長過程として…大学卒業者に必要十分な個の確立、人格を準備し、社会的責任を果たすのにふさわしい視野と人間性を確立する。

④ コミュニティ構成員意識…大学卒業者という意識、大学文化あるいはコミュニティ文化の体験者という意識を持つ。

◇大学についての知識

① 設置の目的 …大学で何を学んだか、どんな付加価値が得られたかの知識。

② 大学システム …教育理念に基づくその大学の教育体験者としての知識。

③ 教育システム …その大学のカリキュラムの学習体験者としての知識。
(授業、専門教育、研究活動、教養教育の体験者)

④ コミュニティ理解…大学コミュニティの体験者としての知識。
(クラブ、サークル、研究室、ゼミナール、学科や課程などの所属、活動体験)

⑤帰属に必要なこと…～大学の学生、校風や伝統文化の体験者としての知識。

◇ラーニングスキル

社会人として必要な行動技術を持つ。

(2) 大学生活の個別場面における展開

①学習場面のガイダンス教育のねらい

学生が大学において様々な学習活動をするときに生じているプロトコル・ギャップを補完する手っ取り早い方法は、ラーニングスキルの養成をすることであろう。ラーニングスキルの習得は、対症療法的ではあるが、その際に学生の実態を正確に認識していれば、その運用如何で本質的改善にも資するものである。

筆者らが行なった大学システムの理解とラーニングスキルなどに関する調査⁽¹⁾によると、4年制大学学生、短期大学学生を問わず、また新入生であるなしにかかわらずプロトコル・ギャップの存在が示された。例えば、大学で行なわれるのが必要不可欠のことがらとして、学生は、授業(95.9%以下数字は複数解答)、大学祭(77.0%)、就職説明会(68.4%企業主催のものを含む)、研究(58.9%)の順に大学像を描いており、一般に大学関係者の描く大学像と異なっている。

さらに、ラーニングスキルに関して、ノートの取り方、レポートの書き方を適切に知っている学生は、わずか16.3%に過ぎない。

このような実態が原因になって現われる各学習場面や就業場面での学生のレディネス不足が、大学教育に実質的な成果を求める社会的要請の根拠となっていると言える。

このようなプロトコル・ギャップの改善のために行なわれるラーニングスキルの指導は、学習プログラムとして確立しており⁽²⁾、実際、最近は多くの大学のカリキュラムに取り入れられ始めている。

ラーニングスキルは、個別場面のレディネス不足を補うガイダンス教育の1つと考えることにより、以下のように要約される。

- I. 資料の集め方、図書の調べ方、問題点の見つけ方、など基礎的情報の処理技術などの情報収集能力に関係するもの。
- II. 講義の聴き方、テキスト、図書の読み方、板書の仕方、ノートの取り方、観察の仕方、など理解能力に関係するもの。
- III. 資料やデータのまとめ方、判断の仕方など思考能力に関係するもの。
- IV. 話し方、質問の仕方、意見の述べ方、アイデアの出し方、レポートの書き方、発表の仕方、など表現能力に関係するもの。

これらの能力を養うことが、具体的な学習場面のガイダンス教育のねらいである。

②その他の場面でのガイダンス教育のねらい

その他の学生生活の個々場面に応じたガイダンス教育の展開として、興味・関心から発展した「やる気、積極性、劣等感の克服、自己意識の養成など」のためのガイダンス教育、「専門家としての資質を養う」ための教育、「大卒社会人に求められる資質を養う」ための教育が必要である。

「やる気」については、入学当初、学年進行ごとのガイダンス時、ゼミナールあるいは研究室所属時などに、やる気のメカニズムの解説や、やる気の自己記録と自己確認などを行ない、やる気についての常識的な分析法と分析結果などを学生に紹介することが考えられる。

積極性や劣等感の克服は、きわめて長時間を要するので、大学へ来てからの新しい目的の創出、例えば資格の取得、大学学部への編入、大学院へのチャレンジなどを学生に促すことが考えられる。

専門家意識は、言い換えれば今日的なノーブレス・オブリージュ(Noblesse oblige)とでも言えるものである。一部の医学部学生に行なわれるスキルアナリシスなども専門家意識を持つためのガイダンス教育の1つと言えよう。

さらに、大学教育を経た学生は、実社会では、教養に基づいた常識的な行動、社会性、地域社会への適応力、使命感や責任感を持つことなどが求められる。これらの能力を養うこともガイダンス教育のねらいとなる。

筆者らの提唱する体系的ガイダンス教育は、以上の要請に応えようとするねらいがある。

4. 2 シラバスに見る内容の展開

(1) 調査資料について

大学・短期大学の講義要綱とシラバスを調査し、ガイダンス教育に相当すると考えられる事例を筆者らの視点で抽出し、分類した。前述のように個々の授業科目としては、単に必要に迫られて開講されたり、あるいは担当者が案出したものであっても、大学という教育場面全体で通暁して見ると、事例の収集は体系的なガイダンス教育を具体的に示唆する有効な資料になることが期待される。さらに各大学で個々に行なわれているガイダンス教育的な授業科目などを整理することは、筆者らが提案するガイダンス教育カリキュラムの実現可能性と実際の適応場面での具体性をもたらすであろう。

本報告で資料とした講義要綱とシラバスは、平成3年および平成4年にかけて、新設置基準(現行)に基づいたカリキュラム改正を行なった大学・短期大学を中心に資料送付の依頼を行ない、入手した87の大学・短期大学の講義要綱とシラバス、および、その後、平成5年度から平成6年度にかけて、同様の依頼によって入手した103の大学・短期大学のものが中心となっている。また、その他入手済みの資料、および筆者らが関係している大学・短期大学の数校の講義要綱などを加えた。

これらの中から、ガイダンス教育の3つの柱すなわち、大学生としての意識、大学に対する知識、ラーニングスキルのそれぞれの学習を目的(含む明確な副次的目的)としている授業の120余りの科目を参考事例として取り上げ、さらに前節に述べた教育場面の典型に沿って縮約し整理した。

ところで、以下に事例として紹介する資料は、筆者らの依頼に応じて平成6年6月末までに資料を送付頂いた大学・短期大学に限られているために、例えば、最近ベストセラーになった図書『知の技法』をテキストに用いる東京大学教養学部の1～2年次生対象科目「基礎演習」など、当該関係者から見て典型的なガイダンス教育と思われる科目が、必ず

しも含まれていないことがある点をお断りしておく。

さらに、いわゆる設置基準の大綱化にともない、平成4年度以来、現在もカリキュラム改革が各大学で進行中である。したがって、本節で以下に紹介する授業内容には、その後、各大学で行なわれたカリキュラムの変更や担当者の判断によって、内容が変わっていたり、制度や科目自体が変更されているものも若干含まれる可能性がある。

(2) ガイダンス教育の実施事例

①入学前の事例

大学の入学試験のあり方に関して、「最近の推薦入学の実態を見ると、一部の大学においては、推薦入学が一般選抜に先立って実施される点を利用して、非常に早い時期に（中略）行なわれるため高等学校教育への悪影響が憂慮されている」⁽³⁾などと、入学決定後の大学側の教育の責任が問われてきている。

この点は高等学校側からも問題とされており、高等学校校長会などが推薦入試決定時期の改善を大学側に求めたりしている。あるいは、「入学の準備段階として、推薦入学者が入学までに読んでおくべき必読書」の提示を求める高等学校（茨城県立F高等学校など）が少なからず見られる。他方、大学側からも、清泉女子大学などのように、高等学校に対して、必読書を提示して入学予定者の指導を依頼するケースが見られる。

しかし、大学側から発せられる要求は、ガイダンス教育という観点から中等教育と高等教育の連携を図ろうとするもの、例えばステップ・バイ・ステップ・リーディングというよりは、各大学の専攻学科の立場から関連した図書を単に読ませようとする場合が多い。

あるいは、夏休み期間に大学の授業を高校生に体験受講させることによって、実際の大学の授業をあらかじめ理解してもらおうとする試みが各所で行なわれている。さらに昭和女子大学では付属高校の3年次生に大学の授業を聴講することを制度的に許容して、中等教育と高等教育の連携を図ろうとしている。また、大阪電気通信大学では、5章で後述するように同一法人併設高校という特殊性を生かした入学前のガイダンス教育が実施されている。

学習院大学法学部法学科および政治学科では、『analysis 法学政治学 note』という小冊子を同学科を志願する受験生に配付している。もともと同冊子は新入生のガイダンス用に編集されたものである。「大学で学ぶことの意味、そのノウハウ」を教科担当教員がそれぞれ解説したものであり、前者にウェイトが置かれている。入学前の学生にとっては、ノウハウというより動機づけの効用があると思われる。

②入学当初に必要な大学生意識・大学理解など

慶応大学藤沢キャンパスでは、全学科の1年次生対象に必修科目として、「キックオフレクチャー」が行なわれている。これはオリエンテーションの一環として実施する導入教育で、新入生の激励という意味もあるという。また、羽衣学園短期大学では、全学科の1～2年次生対象に、女性と社会とのかかわりを各自で自覚してもらう目的で「教養演習I」が開講されている。京都橘女子大学では、全学科の1年次生対

象に、「哲学とは、幸福とは、自由とは、平等とは、愛とは」などから人生を見つめ、価値観教育を意図した「現代の人間」という科目が実施されている。これらは自覚と成熟を促そうとするものである。

その大学の成り立ちや建学の精神、教育方針を理解するための科目として、「建学のこころ」（名古屋女子大・短期大学、集中講義）、「聖徳教育Ⅰ」（聖徳大学・短期大学）、「現代文明論」（東海大学・短期大学）、「特別講座」（東洋大学短期大学、第1部）などがある。

演習によって、大学に馴染ませ、専門への関心を持たせるため、東洋英和女学院大学では「フレッシュマンセミナー」を実施している。また、効果的に大学システムへの帰属意識を持たせる科目として武庫川女子大学の「初期演習」がある。一方、学生の自主性を促しながら前述の目的を達成しようとする科目として、北里大学の「教養演習」と成城大学短期大学部の「教養実習」がある。前者は、各教員がテーマを設定し、学生に自主的な参加を呼びかけ、自主ゼミナールの効果から大学への帰属意識を高め、教員と学生とのコミュニケーションを増進しようとしている。後者は、音楽、美術、演劇の鑑賞や講演の他、各コースごとの発表会、実地見学を学生の企画および運営で行ない、同様の効果をねらっている。

③基礎教育としての一般的ラーニングスキル

1994年度から名古屋大学では必修科目として、「基礎セミナー」が実施されている。これは一般的なラーニングスキルすなわち読解力、思考力、表現力、討論能力などの基礎学力の習得を目的としている。文系・情報文化学部生は4単位、理系学生は2単位が与えられる。また、金城学院大学では、選択科目であるが全学科学生対象に、「アカデミック・スタディーズ入門(1)(2)(3)」があり、(1)は人文分野、(2)は社会科学分野、(3)は自然科学分野となっている。旧設置基準の一般教育分野に準じているものの、教育方法として、読み、討論や討議、書くなどの基礎的な知的トレーニングを演習形態で行なおうとしている。

さらに、このような一般的なラーニングスキルの習得を目的とした科目例としては、白梅学園短期大学保育科の「基礎ゼミナール」、青山学院女子短期大学教養学科の「教養演習」、目白学園女子短期大学の「読書と思索」（5章で詳細を解説）、羽衣学園短期大学の「教養演習Ⅱ」、「教養演習Ⅲ」、松蔭女子学院大学の「教養演習Ⅰ」、園田学園女子大学の「グリーンキャンパス・セミナー」（1年次生から4年次生までの選択）、夙川学院短期大学の「教養ゼミ」、跡見学園女子大学文化学科の「プロゼミ」などがある。これらの多くが新入学の学生全員を対象に行なわれていることから、学生に入学当初必要とされる一般的ラーニングスキルを習得させ、その後の学習活動を円滑にしようと意図されたものであろう。

ラーニングスキルを個別技術として科目を開講している例を表4-1に示した。表4-1では、論理的能力に関するラーニングスキル、特に資料の収集や情報処理（機器操作ではない）活動に関するもの、問題意識の持ち方などのスキル、文章表現、音声表現、複合的表現能力いわゆるプレゼンテーション能力のそれぞれの習得に関する科目事例という順になっている。

(表4-1 基礎教育としてのラーニングスキル)

④専門のためのガイダンス教育

専門のためのガイダンス教育は、専門科目の学習や卒業研究のための準備教育といった内容を持っているものが、事例として見られた。

多くの4年制大学では、卒業ゼミナールに先立ってプレゼミナールなどが実施されているが、東洋英和女学院大学の「基礎演習」は、全学科の2年次生対象に行なわれ、3～4年次生の専門ゼミナールでの勉学の訓練科目と明確化されている。

短期大学においては、2年という制約から専門のためのガイダンス教育と基礎教育としてのガイダンス教育の区別がつきにくい、学科に開講されている授業科目か、共通科目かによって判断することができる。以上の観点から、事例を挙げることにする。

産能短期大学第I部の全コースの「基礎ゼミ」は、各コースの専門性に求められる基礎的スキルを演習によって養成する。

京都文教短期大学家政学科生活科学専攻の「生活科学演習I」は、問題意識を持つ、課題テーマを見出す、討論や表現の仕方を習得、分析のテクニックを学ぶ、レポートのまとめ方、発表の仕方を体験的に習得することを目標としているが、「生活科学演習II」と有機的に連動している。同様の演習科目として、高田短期大学教養学科の「教養ゼミナールI」があり、「教養ゼミナールII」が完成演習となっている。また、卒業研究のためのガイダンス教育と考えることができる例として、白梅学園短期大学教養科の「教養演習I」、「教養演習II」があり、Iが自主的研究態度の涵養を目標とし、IIは「教養演習I」をさらに進展させたもので、卒業研究レポートにつなげることが望ましいとされる。同様に長崎ウエスレヤン短期大学教養科(社会福祉コース)の「基礎ゼミ」、同(情報ビジネスコース)の「基礎ゼミI・II(マーケティング理論)」は、「卒業研究ゼミ」の準備教育となっている。その他、京都橘女子大学歴史学科の1年次生必修科目の「基礎ゼミナールI」などがある。

スキル養成の要素の強い例として、目白学園女子短期大学生生活科学科環境情報コースの「情報検索実習」がある。これは、オンラインによるデータ収集の技術を習得するための科目であるが、課題研究的な卒業演習(論文作成や作品制作)に必要な資料収集を新聞検索などで行なうための予備的な授業科目である。また、英語による英米文学レポートの書き方、文学のレポート作成方法を学習する科目として、長崎外国語短期大学外国語学科の「特別演習」がある。

⑤卒業前、社会人になるためのガイダンス教育

社会人になる前に行なわれるガイダンス教育としては、現状では就職活動に連動したものに限られるようであり、「職業論」(桜美林短期大学全学科対象)や「就職講座」(群馬女子短期大学全学科対象)などが単位(前者が2単位、後者が1単位)を付与する例としてユニークである。

⑥やる気、積極性、劣等感の克服、自己意識の養成など

やる気、積極性、劣等感の克服などをねらいとした授業科目としては、京都女子大学短期大学部初等教育学科の「グループ・ワーク」がある。その内容は、「自分を見つめ、他人を理解し、自己成長のために、各種のグループ・ワークを展開する」であるが、多くの幼児教育系学科などに見られる内容を踏襲している。一層典型的な事例として、北陸学院短期大学保育科・食物栄養科・英語科・教養科の「自己の発見Ⅰ、Ⅱ」がある。「同Ⅰ」は、講義や映画、VTRなどをもとにした討論によって自分自身を考察し、学生の自己認識を促すことをねらいとしており、「同Ⅱ」は、「自己の発見Ⅰ」に続く体験学習となっている。内容は、1泊2日の宿泊セミナー、スポーツプログラムの他、ジャパンテント、フレンドシップ・キルト、大学祭チャリティー・バザー、自然と遊ぶ、環境浄化運動、兼六園再発見、福祉施設でのボランティアなどへの参加などで、さらに、所属学科の企画する学科プログラムに参加する。

また、講義であるが、常磐大学短期大学部の教養学科、経営情報学科、幼児教育学科、生活科学科生活科学専攻、生活科学科食物栄養専攻に開講されている「現代教養講座D・自主のすすめ」は自己認識を促す科目である。

⑦専門家意識、ノーブレス・オブリージュなど専門家としての資質を養う

医学部で行なわれるスキルアナリシス(テスト)は、高等教育を受けた専門家の社会的責任を意識するためのガイダンス教育の典型である。しかし、専門家としての資質を涵養するための教育としては、典型的な事例はなく、羽衣学園短期大学の「教養演習Ⅰ」(全学科対象)、相模女子大学の「一般教育ゼミナール(B)」(全学科対象)は、高等教育を受けた女性としての自覚を促す内容で、今日では女性固有のノーブレス・オブリージュが意識されつつあるのかもしれない。

現在の短期大学卒業者の社会的地位を認識させるものとして、「大学現代教養講座F・学ぶことと働くこと」(常磐大学短期大学部)がある。大学で学ぶ意味を現代社会の職業構造と職業意識そして現代学生の意識から考察し、大学で何を学び、仕事でプロになるとはということなのかを考え、女性労働の問題も扱うとされる。

⑧社会性、社会への適応など大卒者に求められる資質を養う

社会性を準備するための科目としては、「COMMUNICATIONの言動と心理」(群馬女子短期大学全学科)がある。その内容は、言動による人間関係を知る、言葉/表情/振舞いを日常生活、職場生活などの場面で実践的方法を学ぶ、となっている。また、地域社会における適応のための科目としては、「ホームステイ用講座」(敦賀女子短期大学全学科)があり、ホームステイに参加しない学生にも開放している。ただし、自由科目である。

高等教育を受けた人材にふさわしいとされるマナーを習得するための科目も現状の大学(特に女子大)では要求されているらしく、事例として表4-2にまとめた。ガイダンス教育に当たるかどうか、さらに検討を要するところである。

(表4-2 社会への適応としてのマナーの習得)

以上、各大学の科目事例を概観すると、平成3年度から4年度にかけて各大学・短期大学で実施されていたガイダンス教育に相当すると判断できる科目は、87校中50科目足らずであったのに対して、平成5年度から6年度にかけての事例数は103校中90科目以上と増加している。各大学・短期大学がカリキュラムの改定を期に、学生と大学とのプロトコル・ギャップを埋めるための効果的な科目の必要性を認識し、現実的解決を模索し始めたためであろう。今後さらに同様の性格を持った科目が増加していくことが予想される。

しかし、大学あるいは学科全体のカリキュラムにおいて、筆者らが提案するガイダンス教育を体系的に配置している例はほとんどなく、実態は対症療法として具体的科目をいくつか配置したり、個々の科目の中で担当者がラーニングスキルに相当する内容を取り入れて、以後の教育を円滑にしようとする場合が多いようである。なぜならシラバスを検討した範囲では、同じ大学の同一名称の科目であっても、内容が担当者により“まちまち”であることが多いことから、その様子が伺える。例えば専任教員が一斉に担当する「基礎演習」という科目であっても、科目設置の趣旨や内容のコーディネイトが十分に行なわれておらず、一大学内で、体系的カリキュラムを実施することの困難さが伺われる。

3章にあげた標準的カリキュラムに沿って、各大学で行なわれている科目をガイダンス教育として再配置してみたが、今後、本章でガイダンス教育として位置づけられた各科目の開講趣旨や内容について、さらにカリキュラムの体系から検討され、ゆくゆくは個々の大学がそれぞれの大学文化がめざすものと内容的な整合性を保ちつつ、具体的なカリキュラムの全体が提案されるべきであろう。

参考文献

- (1) 矢内秋生他、「短大におけるガイダンス教育(3)」、日本教育工学会第8回大会講演論文集、1992年。
- (2) M. J. ウォレス、『スタディ・スキルズ』、大修館書店、1991年。
- (3) 大学審議会、「大学入試の改善に関する審議のまとめ」、大学審議会報告、1993年。

謝 辞

本章をまとめるにあたって、講義内容の関係資料、シラバスあるいはカリキュラム一覧などを快くご送付下さった大学・短期大学関係諸氏にこの紙面を借りて心からお礼を申し上げると同時に本論文が関係諸大学・短期大学での教育充実の一助になれば幸いである。

また、資料収集は目白学園女子短期大学学務部教務課が中心になって行なったものである。特に送付依頼と受理などの煩雑な事務処理は、おもに同課主任山上良子氏によって行なわれ、本章の内容は同氏の業務に多くを助けられた。同課長田中芳明氏には筆者らの研究と資料活用にご理解を頂いた。さらに膨大なシラバス内容の分類作業は、同短期大学学生の藤沢知子、小久保弘子、内田有香子、富澤里美らにご協力頂いた。ここに謝意を表す。

表4-1 基礎教育としてのラーニングスキル

科目名	大学名	学科名	内容
基礎演習Ⅰ 一教養ゼミナール	鹿児島短期大学 北海道武蔵女子短期大学	教養学科 教養学科	資料の探し方 図書館の利用法
一般教育セミナー 基礎ゼミナールⅠ 総合科目Ⅰ 総合科目Ⅱ	立教女学院短期大学 京都橘女子大学 松阪大学女子短期大学 明治学院大学	英語科 幼児教育科 英語英文学科 全学科 全学科	問題意識の持ち方、 議論テーマの立て方、 議論の仕方
文章表現 文章表現法 国語表現法 日本語表現Ⅱ 国語表現法 日本語表現法 国語表現法Ⅰ 国語表現法Ⅱ 言語表現 日本語の基礎知識 文章表現法 国語表現法 国語表現法 日本語表現法(実践) 文章作法 文章力をつけるⅠ、Ⅱ 日本語表現Ⅰ	創価女子短期大学 大阪青山短期大学 実践女子短期大学 産能短期大学, 第Ⅰ部 北陸学院短期大学 北陸学院短期大学 北陸学院短期大学 北陸学院短期大学 東横学園女子短期大学 帝塚山学院短期大学 帝塚山学院短期大学 広島文化女子短期大学 文化女子大室蘭短大部 常磐大学短期大学部 玉川学園女子短期大学 九州女子短期大学 長崎外国語短期大学	経営科 英語科 生活科学科 国文科、 幼児教育科 英米語科 国文科 英文科 生活文化学科 全コース 食物栄養科 英語科 教養科 教養科 生活学科 英語英文科 文学科 家政学科 文学科 生活文化学科 生活科学科 音楽学科 幼児教育学科 専攻科 教養学科 教養学科 教養科 家政学科 養護教育 体育科 英語科 初等教育科 音楽科 全学科	文章表現の技術

表現法B, C, D, E 日本語表現Ⅰ 話し方研究 話し方演習Ⅰ 話し方演習Ⅱ 国語表現A, B, C, D 話し言葉の研究 話し言葉の研究-初級- 話し言葉の研究-上級-	学習院女子短期大学 産能短期大学 第Ⅰ部 金蘭短期大学 金蘭短期大学 金蘭短期大学 帝塚山短期大学 淑徳短期大学 淑徳短期大学 淑徳短期大学	人文学科 家庭生活科 全コース 国文科 国文科 国文科 全学科 全学科 全学科 全学科	話すを中心とした表現技術
教養ゼミ	夙川学院短期大学	家政科 生活芸術科	プレゼンテーション技術の習得、機器の利用技術

表4-2 社会への適応としてのマナーの習得

科目名	大学名	学科名	内容
現代礼法 現代女性礼法 現代マナー 礼法 現代礼法 現代マナー論	大阪城南女子短期大学 金蘭短期大学 帝塚山学院短期大学 聖徳大学短期大学 夙川学院短期大学 大阪青山短期大学	全学科 全学科 全学科 初等教育学科 英語英文科 生活科学科 幼児教育 英米語科 国文科 英文科 国文科 家政科	マナーの習得
現代女性礼法	金蘭短期大学	国文科 英文科 国文科 家政科	

2 部 実践編

5. ガイダンス教育の先行的試行

ガイダンス教育について、筆者らの基本的な考え方や調査結果はすでに述べた。この章では、筆者らの勤務する大学・短期大学での試行的実践について紹介する。ここで紹介する事例は、必ずしもすべての大学・短期大学に適用できるものではないかも知れないが、先行的な教育事例であることは確かであり、将来はこのような事例もどんどん実施されて当然であると思われる。筆者らの理想とするガイダンス教育では、これらの試行はすべてその大学・短期大学の教育システムに組み込まれていて、単位として認められることを望んでいる。

5. 1 大学受験生に対するガイダンス教育の例

これはOD学園でのガイダンス教育の実施例である。OD学園は、併設校として普通科と電子工業科からなるOD高等学校（大学の付属高校ではなく、独立した高校であって、以下OD高と記す）を持っている。当然のことながら、同じ学園内にあるOD大学（以下大学と記す）の工学部（電子系の7学科がある）や、OD大学短期大学部（以下短大と記す。短大は理工系の1学科で昼間の1部と夜間の2部とがある）への進学希望のOD高の生徒は多い。

大学および短大は、指定校制推薦入試制度、公募制推薦入試制度、一般入試制度、大学入試センター試験制度等多様化を図っている。しかし入試の公平性の上から、OD学園としてOD高への指定校推薦の枠は少数に絞っているので、一般の高校生と同じ条件で入学試験を勝ち抜かなければならない。

そこでOD学園内の協議によって、進学希望のOD高の生徒に対して、年末の12月～新年の1月にかけて、大学の主催のもとに、転換教育と称する一種の準備教育を行なっている。

転換教育の内容としては、受験に直接関係がないものも含めても良いという条件がつけられているが、主として理数系の内容の講義を考えており、筆者もその講師を引き受けている。講義の主たる内容は、理数系の受験科目の限定した分野について、ガイダンス教育を行なっている。その内容は、理科の中の主として物理分野、数学の中の主として理数数学の分野の2つである。

筆者は、1992年12月11日と1993年12月9日の2回、OD高の3年生約100名に、大学の図書館のホールに来てもらって、それぞれ90分間の講義を行なった。

会場として、大学の図書館を選んだのは、大学という雰囲気になれてもらうことと、90分間生徒の気が散らない所で、かつ日頃のOD高校より少し緊張した学習環境であれば、生徒達はより一生懸命勉強するに違いないと判断したからである。

講義のやり方としては、大学の雰囲気を伝えるために、高校の2校時に当たる90分の講義方式として、マイク、白板、OHPなどを使用して行なわれた。講義においては、あらかじめ作成しておいたTPシートを用いながら、1つ1つ項目をできるだけ易しく、かつゆっくりと解説した。

高校生向けの数学の話として、高等学校で扱う数学の中の関数の意味や、日常の世界と

数学の世界との関係や、2つの世界の間の対応のとり方や解釈の方法などを大学準備教育の意味を込めて解説した。

さて、ガイダンス教育であるが、講義の中で、もし大学へ進学できた場合、大学生としての「勉強の仕方」や、大学生としての「ものの考え方」や、「大学生活での心構え」などについて触れた。筆者が力を入れたのは、こうしたガイダンス教育であって、その内容を簡単に紹介すると、次のようなものであった。

○講義内容

大学生は、大学で行なわれる教育について行けるだけの基礎学力がまず要求される。それは、入学試験の科目として試される英語の学力、数学の学力、理科の学力であるが、意外に見落とされていて、実に大切な力は国語の力であることを強調した。

国語の力というのは、いわゆる「読み」・「書き」・「考え方」であって、日本語の力である。数学にしても、理科にしても、大学での教科書は日本語で書かれているものを用いるのであるから、読解力、表現力、論理的思考力が必要になる。さらに、表現力、会話力などが必要である。

大学の勉強でめざすべきことは、高校時代に知らなかったことを知るようにすること（知識の受け入れ）、知ったことを分かるようにすること（丸暗記を排除して、理解をめざす）、分かったことができるようになること（実践力を心がける）、できるようになったことを他人から言われずにいつでもやるようになること（態度形成と習慣づけ）である。

特に大学生は、次のいくつかの習慣ができていなければならない。読書の習慣（文字文化に慣れ親しむ）、自学自習の習慣（一人学習も友達との学習も）、新聞（スポーツ、漫画、テレビ欄は論外）を毎日読む習慣、報告・連絡・相談（「ほうれんそう」と言うが、教師・父母・関係者へのそれ）の習慣、法や学内ルールを守る習慣、時間や約束を守る習慣などである。

大学生は、次のいくつかの態度を形成していることも必要である。自分に関心・興味を持ち、自分がどういう人間であるかを知り、自分を理解するように努め、自分らしさを意識し、自分を確立していく態度、自律的な態度、自己管理をしていく態度、自主・自発・能動的に行動する態度などである。

さらに、1993年6月に明治学院大学で開催された一般教育学会でのプログラムの中にあつた同大学学長の福田歙一先生の特別講演「社会が大学生に期待していること」の内容を紹介した。その内容は次の5つである。

- ①大学生は、自分の意見を持つべきである。
- ②大学生は、自分で問題を見つけるべきである。
- ③大学生は、自分で必要な情報をリファーマーすべきである。
- ④大学生は、親離れをしているべきである。
- ⑤大学生は、自分が置かれている環境に対して責任を持つべきである。

以上のような内容のガイダンス教育を行なった。生徒達の反応はきわめて良く、90分もの長い時間に十分耐えることができた。このことについては、付添いで来ていたOD高の教師の口からも、生徒の反応が良かったと言われた。

このガイダンス教育の内容については、8ミリ・ビデオで撮影し、後でVHSに変換して必要な本数をコピーし、OD高の関係者、大学の入試広報課、ガイダンス教育研究会のメンバーに配布して種々検討してもらっている。

参考文献

- (1)一般教育学会、「一般教育学会第5回大会発表要旨集録」、1993年。
- (2)石桁正士、『情報処理的問題解決法』、情報科学シリーズ10、パワー社、1990年。

5. 2 生協委員による入学前教育の例

OD大学の生協では、数年前から、大学入学予定者に対して、入学式直前に「大学生生活入門講座」を実施している。これは、在学生在が入学予定者に対して、スムーズに大学生生活に適応して欲しいという願いから実施されているものである。これは、筆者らが考えているプレ・エデュケーションとしてのガイダンス教育の1つである。今回、筆者らの1人（横山）が、「先生のお話し」というプログラムに参加したので、その内容も加えて紹介する。

(1) 1994年の実施例

図5-1にオフィシャルパンフレットを示す。

- ・日 程 3月28日～31日の4日間、1グループにつき1日で実施（4日間で4グループ実施）
- ・対象者 新入学生の希望者（4グループに分ける）
- ・場 所 OD大学四條畷学舎、厚生棟（生協食堂）
- ・時 間 午前10時～午後4時30分
- ・参加者数 200人（4グループ）
- ・スタッフ 生協学生委員会の学生27人（2～3年生）

（図5-1 オフィシャルパンフレット）

(2) 大学生生活入門講座の目的

1. 自分達が新入生だったころを振り返り、次に入学してくる新入生が持っているであろう「不安」や「悩み」を、新入生と一緒に考え話し合うことで、少しでも解消してもらおう。
2. 大学生生活に対して「夢」や「期待」をふくらましてもらう。
3. 大学生生活を楽しんでいくには、まず友達が無くてはならないものであろう。この入門講座を通じて1人でも多くの友達を作ってもらおう。
4. これからの大学生生活をサポートしていく生協、そして生協学生委員会の日頃の活動を知らせてもらう。

(3) プログラム

1. オープニング
2. 学内4団体の挨拶（常任自治委員会、体育会、文化会、大学祭実行委員会）
3. 先生のお話し（生協学生委員会から依頼された教員4人による激励）
4. クイズ&ゲーム
- 昼食 -
5. 劇（「OD大学の1年生」）
6. オリエンテーリング（四條畷学舎内でのポイント探し）
7. 学科別アドバイス（先輩学生からの、学科の紹介）

8. エンディング

(4) 「先生のお話し」の内容(筆者、時間30分)

図5-2に筆者が講演した会場の様子を示す。

(図5-2 講演した会場の様子)

1. 「生徒」と「学生」の違いを意識しよう

いろいろな意味合いがあるが、1つの解釈として、高校生までは「指示待ち」をしていれば良かった。これは自主性が無くてもそれなりに勉強生活が送れるということで、「徒(したがう)」を使っていた。しかし、大学や短期大学では、勉強するにしてみないにしてもあらゆる場面で自らの判断で活動しなければならないとして「学(みずから学ぶ)」を使っている。したがって、諸君を「生徒」と呼ぶ教員は、大学教員としてふさわしくないかもしれないので注意して欲しい。

2. 入学金や授業料を取り返そう

一度支払ったお金は、「お金」としては返ってこない。しかし、「知識や技術」、あるいは「友人(教員や職員も含めて)」というように形を変えて返ってくると考えよう。毎日、大学へ来てトイレで「もの」を落としていくだけでは、もったいない。教室や図書館や研究室やグラウンドで「もの」を手に入れて身につけて欲しい。

3. 単位の取り方と成績をよく知ろう

単位は授業に毎回出席しているだけでは取れない。自分の力でもぎ取るものである。出席するしないは、単位をもぎ取ることとは別のことである。成績は自分の実力をアピールする1つの手だてであり、良い成績を取ることは最終目的ではない。実力をつけるためには、友達はもちろんのこと、教員(大学の設備も含む)を大いに利用する心構えが必要である。

- ・ 答案の採点には教員の特徴が出る。いろいろな方法がある。(実話紹介)
- ・ 教室での座り方にも注意が必要である。(実話紹介)

4. 友達を作ろう

味方も敵も友人である。意見をぶつけて、敵を作れば自ずと味方もできる。仲良しグループだけでは、生涯の友達はできないことも知って欲しい。

5. 資格を取ろう

大学の成績証明書は、卒業証明書に比べれば効力は薄い。それよりも、在学中に各種の資格を取得すべきである。これらは、履歴書の資格欄に燦然と輝き、あなたの実力を証明してくれる。情報処理技術者試験、ワープロ検定、秘書検定、英検等、比較的取得し易いものが多い。もちろん着実な努力は必要である。(実話紹介)

6. スケジュールを記録しよう（自己管理をしよう）

アルバイトのシフトがスケジュールの代表となっているようであるが、手帳に自分の足跡をしっかりと記録することが、自己反省につながり、自分という人間を理解するきっかけになる。これは就職戦線に勝ち残る上で重要なことである。自分の生活習慣や生活態度は、分かっているようで案外分っていない。一度、手帳に記録をとって確認するとよい。丁寧な記録は、何かのトラブルに巻き込まれたときに自分の行動を説明するのに使えることを知って欲しい。

7. 先生と友達になろう

大学教員は「教育」と「研究」が仕事であるが、両立させることは難しい。そんなところに付け込めば、教員と友達になれる。友達になってしまえば、いろいろと情報が入り、学生生活も楽しくなるのは確実である。（実話紹介）

以上のような内容で激励した。後日、主催者スタッフより「一番面白く、好評だった」とのコメントを頂いた。

5. 3 担当科目のガイダンス教育の例

【事例1】OD大学でのガイダンス教育の実施例

これから紹介する6つの事例は、すべて「科目ガイダンス」と称しているもので、その内容は、プリントを配布して、講義の第1時間目に出席している学生（ほとんどは受講予定の学生）に、この科目の受講上の情報を与えるために行なっているものである。

一般に学生は履修しようと思う科目について、大学の教務課の説明や友人からの情報やクラブの先輩からの情報や生協委員からの情報などに基づいて決めるのが普通である。そして履修科目の決定や履修申請手続きのとき役に立つのは、時間割とシラバスである。この2つは、履修申請が行なわれる前に学生に配布されている。

シラバスを見ることによって、学生はその科目の期間中の大まかな内容とスケジュールは分かるが、学生にとってこのような公的情報はあまり有用でない。むしろ、単位が取り易いか、先輩からのノートがあるか、過去問（過去の年度に出題された定期試験の問題）のコピーがあるか、担当教員はネアカか、講義が上手か下手かなどの私的情報の方が有用である。

一方、教員側からすると、シラバスだけでは受講に際しての心構えや講義の特徴など、学生側に十分伝わらないと考えているので、このような科目ガイダンスと称して、プリントを配布して、担当している科目の情報を受講を予定している学生に与えるのである。

さらに、担当教員は自分の顔を見せて、対面（顔合せ）をする。それは担当教員がどんな考え方をベースにして講義をするのか、講義の中でどんなことを大切にするのかを紹介する目的も持っている。

それでは、筆者である石桁が担当している科目のガイダンスについて述べることにする。

（1）工学部「計測情報論Ⅰ、計測情報論Ⅱ」

計測情報論Ⅰ、Ⅱは、工学部経営工学科1年次配当の選択必修科目である。この科目の単位がないと卒業できないというのではない。講義担当者である石桁は、この科目ではどのようなことに注意して受講して欲しいか、教員側からの希望を説明するために、1994年度は付録1、付録2に示すプリントを第1時間目に配布して説明した。

配布したプリントの内容で大体的ことは分かってもえるが、一番力を入れるのはこの科目が設定された目的である。また、私語のない授業の実現である。そのための協力の要請である。（付録1計測情報論Ⅰの配布プリント、付録2計測情報論Ⅱの配布プリントを参照）

（2）工学部「産業心理学」

産業心理学は、工学部経営工学科2年次後期配当の選択必修科目である。2年生ともなれば、学生の方も開講科目の事情や教員の癖などもある程度つかみ、科目の履修もうまくやれるようになってくる。この場合の科目ガイダンスは、科目の紹介よりも、教員側のこの科目に対する思い入れや教育的重点などを理解してもらいたいので行なう。

1993年度は、付録3のプリントを配布して、この科目は基本的な心の問題を取り上

げること伝えた。経営工学科では、どうしてもコンピュータや情報技術ばかりが主流に見えるので、人間についてもっと関心を持って欲しいことを訴えることにしている。（付録3 産業心理学の配布プリントを参照）

（3）工学部「情報科学特論」

情報科学特論は、工学部経営工学科4年次配当の必修科目である。4年生の必修科目であるので出席は義務づけられている。経営工学科の専任の4人の教授のリレー式の講義であるので、1人の教授の担当は1/4年で大体6～7回の講義で完結するようになっている。

この科目のガイダンスは、単位取得のミスなどないように、親心をもって注意を喚起するために行なっている。1994年度は、付録4のプリントを配布して説明した。

4年生は全員1年間、必修の卒業研究に全時間をあてることになっているので、日頃配属先の研究室にこもりきりになっている。当然、情報交換は研究室所属の卒研生だけで行なわれる。せめてこの情報科学特論の時間だけでも、研究室を越えて情報交換ができるように配慮している。（付録4 情報科学特論の配布プリントを参照）

（4）大学院「教育情報システム構成論」

OD大学大学院には工学研究科のみ設置されている。そして3つの専攻がある。筆者である石桁はその中の情報工学専攻に属している。情報工学専攻の中の教育工学講座の科目として、教育情報システム構成論が開講されている。1993年度までは隔年開講であったが、1994年度からは毎年開講となった。受講する院生数は約10名である。1994年度は、付録5のプリントを配布してガイダンスを行なった。（付録5 教育情報システム構成論の配布プリントを参照）

（5）大学院「教育支援データベース特論」

これも大学院工学研究科情報工学専攻での科目である。付録6は、1994年度用に配布したプリントである。（付録6 教育支援データベース特論の配布プリントを参照）

（6）教職課程「教育工学」

これは工学部共通の教職課程のための科目で、全7学科に向けて開講している。毎年夏期休暇中に4日間の集中講義の形で行なうことになっており、受講生は約70～80名で、2年生～4年生が対象である。この他に、教員免許を取得したい希望の社会人の科目履修生が毎年数名いる。

教職免許は、数学（中学と高校）と工業（高校）の2種類である。付録7に1994年度の配布プリントを示す。この科目の場合は、4日間の集中講義であるので、第1時間目の科目ガイダンスは、この授業の1コマとして位置づけられる。

毎年、数名の受講生が途中放棄をするが、1年後にもう一度チャレンジしている。それは科目ガイダンスからいきなり講義へ入るという集中講義のためかも知れない。（付録7 教育工学の配布プリントを参照）

【事例 2】KB 短期大学での事例

講義の相互コミュニケーションの改善－コメントカードによる授業－

これは、カードに記入させたコメントを用いた学生の意見や質問のフィードバックの例である。したがって、特定の大学や特定の内容の科目に対して実施されるものではなく、レクチャー形式のすべての講義（数十名から数百名）に対して実施可能である。このことによって学生の授業に対する関心を深めるばかりでなく、学生の考え方が授業やそれ以外についても把握できた。

（1）目的と経過

授業を行なう教員から見ると、「学生の考えていることが分からない」、「反応が皆無に近い」、「ノートは取るが質問が出ない」という意見があがる。一方学生側からも「授業が分からない」、「授業が面白くない」などの声があがる。また一方、授業の進行に対する無関心さは私語の増加や居眠りなどの現象として現れる。そして私語の増加が授業環境の悪化として現れ、より一層の授業のシラケ現象となり悪循環を繰り返すのである。

そこで、私語禁止による授業環境の向上と、コメントによる学生意見の授業への反映を行なうことを考えた。当初は試行錯誤的に他の方法と併用していたが、研究⁽¹⁾改善を進め、今の方式に落ち着いた。この方式では、以下のようなオリエンテーションを講義の 1 回目に行なう。

（2）オリエンテーションの内容

①私語禁止

授業中の私語は一切禁止する。私語の定義と禁止の理由は次の通りである。

a. 学校格差と私語の多少（階層と学校文化）

社会階層の問題に軽く触れ、学校のレベルと学校文化の相似性を説明する。最近では学校全体に私語は多いが、それでも伝統校には相対的に少ないことなどを説明する。

b. 人間にとって、人の声はうるさい（動物行動学的に）

音の大きさや音色に関係なく、人間にとって音声の周波数域と波形は気になることを、動物にとって同種の動物の声が種の保存から注意を引くことを例にとって説明する。

c. 特にコミュニケーションのない人間相互の声は気になる。（心理的に）

心理的にコミュニケーションがない人の信号は、声に限らずしぐさなども気がかりである。これを私語と定義する。

したがって、授業は授業者の教員がコーディネートする以上、教員とコミュニケーションのない声やしぐさは、音量に関係なく私語と見なす。また、教室全体に発するものは私語ではないが、友人と授業内容や黒板の字について話しているのも、当事者には私語でなくても第 3 者には私語である。

②コメントカードによる授業参加

私語は一切禁止するが、授業への意見は大歓迎である。本来はアメリカの大学のよう

に遠慮なく質問をし（そのための授業の中断は構わない）、意見を述べるのが理想であるが、日本の風土習慣からは難しい。そこでカードを使って、意見質問などを述べる方法を採用する。配布したカードに、授業に関する質問や意見、好きなことを記入してもらい、次の授業時間にその返事をする（90分中約20～30分）。そのときには次のルールを設ける。

（図5-3 使用しているコメントカード）

- a. 記入する内容は自由であるが、次回の返事には優先順位を設ける。（講義内容への質問、意見、講義の進行に関すること、学生生活、教養、その他）
- b. 次回の返事は、記入者については匿名である。
これは学生が他の受講生に対して、目立つのを嫌がるためと、かなり突っ込んだ内容を書いてもらうためもあるが、ラジオ番組のリクエスト葉書が、匿名希望が多くなる傾向を利用したのもでもある。その結果、かなりプライベートな悩みや社会問題（差別など）、学生間の対立など多くの意見を知ることができた。また、他の学生からも、同じ受講生でも様々な考えがあることを知って驚いたというコメントも多く見られた。
- c. コメントは小テスト、小レポートではない。
書く書かないは、まったくの自由である。また記入の時間も特別に設定していないので、講義を聞きながら考えたことを記入すること。したがって成績には反映しない。授業への参加が目的であること。最初は戸惑う様子であるが、次第にコメントの量が増えてくる。
- d. その他
 - ・講義者に対する批判、意見は構わないが、個人的侮辱は減点する。ルールとマナーを尊重すること。
 - ・直接成績には反映しないが、テストのときにもう少しで合格点に近いような者や再試験の対象者にその学生を含めるかどうかなどのときに、コメントの内容を見てその学生のイメージをつかみ、再度答案を見るときに参考にする。
 - ・コメントも授業であること。したがってテストの範囲に含まれること。
コメントと私語禁止のルールの説明を講義の1回目に費やして行なうのであるが、ここでしっかりと理由を含めて説明しておくことにより、残りの14回の講義を円滑に行なうことができる。

（3）コメント形式による授業の成果

1987年より始めた今の方式は、筆者の担当するすべての講義で行なってきた（本務校である短期大学及び非常勤校4大学）。その結果を簡単にまとめておく。

① 講義のフィードバック

講義内容を受講生がどうとらえているか、また理解不足の部分や錯覚して理解している部分、興味を感じている部分の把握が容易になり、講義の方向性や内容、レベルを決めるのに役立った。

② 学生の受講意欲の改善

自分の考えに返事がもらえることは、講義への親近感が増す（特に短期大学で）。また友人の考えていることが分かるなど、授業に積極的な態度を示すようになった。

（図 5 - 4 学生コメントの例）

③ 学生指導のために

学生の生活上や勉学についての意見を知ることができ、学内で起きている問題や個人的な悩み（ノイローゼ、家庭的事情）に対処できた。

④ 応用的な方法

この方法を採用する他の教員も出てきたが、コメント記入を講義のまとめに利用する場合は（毎回の授業や単元ごとに）、次回に返事をするという重要なポイントは生かしていない。

（4）おわりに

一部の学生には、講義の後半部分との切り替えに戸惑ったり、集中して講義を聞くので疲れたというコメントもあった。また、大人数の講義（200名程度）では、重要なコメントだけでもフィードバックできないし、読むためにもかなりの時間を費やすなど改善すべき点は多い。しかしこの方式は、それぞれの教員が自分の持ち味で実施するところに特色があると考えられる。各大学、各授業の実状に応じた展開が望まれる。

参考文献

- (1) 中村・秋尾、「講義におけるコミュニケーション改善の研究(1)~(3)」、日本教育工学会第3回、4回、7回大会講演論文集、1987年、1988年、1991年。

生活環境論	19	年	月	日
専攻	学生番号	氏名		
コメント				

このカードを 出席カードとします。

図5-3 使用しているコメントカード

生活環境論	1999	年	10	月	12	日
専攻	学生番号	氏名				
生物科学専攻	93-					
コメント						
先生の講義に最初はこのコメントに対してコメントを してくれるから他の講義と違って楽しい 他の人がすごくしっかり考えてるんだなとか面白いな 事があるんだなとか毎日を変化なくすごしている 私にとって刺激になる時間で私語が99パー だんだん腹がたてくるから今日は静かで 嬉しかった。						

このカードを 出席カードとします。

図5-4 学生コメントの例

5. 4 ラーニングスキル指導の例

【事例1】KB短期大学基礎演習の取り組み

ガイダンス教育の3つの柱の1つに、ラーニングスキルを身につけることがある。これを一般教育の中の基礎演習として行なう大学・短期大学が増加してきた。(4章参照)しかし短期大学ではカリキュラム編成にゆとりがないので、専門教育の基礎演習の中で取り込んでラーニングスキルを習得させると良い。そこでKB短期大学生活科学専攻では、一般教育的スキルと生活科学的スキルをオーバーラップさせた基礎演習を行なっている。

(1) KB短期大学生活科学専攻の基礎演習

①生活科学演習について

基礎の演習として生活科学演習Ⅰ、Ⅱがあり、その構成は表5-1の通りである。

(表5-1 生活科学専攻の基本的演習・実験)

生活科学演習Ⅰ(以後、生演Ⅰと記す)が本論で述べる基礎演習である。この科目は通年4単位で、約20名ずつ学生番号によりグループを作って、専攻の専任教員が分担(前期と後期で担当者が交替)して担当する。ちなみに生活科学演習Ⅱは卒業研究で、自由なメンバーのグループがテーマを決めて、1年間同一の教員に指導を受ける。(2単位)

②生活科学演習Ⅰの改善

生演Ⅰの学習目標は、(1). 専攻内容の理解、(2). 専攻で学ぶためのラーニングスキルの習得、(3). 学習動機と意欲の形成と持続である。(1). 専攻内容の理解は、生活科学を知り、また良い事例を知るということで見学や講演を行なっていた。従来はこれにウェイトをかけすぎて、全員で見学したり時間を割いて講演を行なっていたが、基礎演習としての位置づけを教員間で確認してからは、(2).(3). に重点を置いた内容にし、専攻で学ぶことや卒業研究に向けての準備を中心に行なうことになった。したがって、ラーニングスキルの習得のためには、演習テーマが多少消化不良になっても構わないという確認も行なわれた。生演Ⅰの流れを表5-2に示す。

(表5-2 KB短期大学 基礎演習の流れ図(生活科学演習Ⅰ))

(2) ラーニングスキルの指導

生演Ⅰでのラーニングスキルの指導の具体的な内容は以下の通りである。

①学習目標の設定とオリエンテーション

a. 担当教員の打ち合せ

- ・演習の開始前に、前回の反省と目標(ラーニングスキルの項目)について確認を行なう。同時にサブテーマ(生活科学的目標)についても話し合う。

- ・全体で指導することと、各ゼミグループで指導することをその都度打ち合わせる。
- b. 学生に対するオリエンテーション（前期と後期の始めに行なう）

- 前期
- ・生演とは何か
 - ・生演の持ち方
 - ・ラーニングスキルの例
- 後期
- ・テーマを持つとは何か
 - ・テーマのかみくだきの方法と必要性
 - ・後期のラーニングスキル
 - ・最後に発表会があること

②ラーニングスキルとしての研究方法

研究や学習方法の中にも、定式化されたテクニックがあることを理解させる。その例を以下に挙げる。

◇研究を「実行する」のに必要な手法の例

- ・アイデアを出す方法を知る、慣れる、うまくまとめる。
- ・「計画や手順を作る」方法を知る、慣れる、それに沿って実行できる。
- ・文献を探す、調べる、まとめる。
- ・資料ノート、メモを作る、記入する、引用する。
- ・「グループで議論をする」ためのルールを知る、実行できる、自分の研究の肥しにする。
- ・アンケートの項目を作ることができる、ルールを知る、（集計ができる）分析ができる。
- ・「調査に行く」ために場所を知る、連絡が取れる、質問ができる、後始末ができる
- ・実験の場所を使う手順を踏める、準備ができる、うまく実行できる、後始末ができる、結果を記録してまとめられるなど。

◇研究を「まとめる」のに必要な手法の例

- ・集めた「資料」の整理ができる、発表のことばにまとめられる。
- ・まとめの概略の流れを作れる、必要な項目を考える、それに沿ってことば（文章）にできる。
- ・表現のためのグラフや表にできる、見やすく書ける。
- ・「レポートの文章」にする、その手順を知る、内容の順序に並べる、分かり易い文章にできる。
- ・口頭発表のためのあらすじができる、楽しく聞かせる、分かり易い図表を作れる、見やすい絵（OHP、プリント）が描けるなど。

③具体的なラーニングスキルの指導

前期には個々のラーニングスキルの習得に重点を置く。そこでのラーニングスキルは、各担当者が各自の方法で指導するので、時期や順序や詳細は統一されていない。その一例を挙げておく。

a. アイデアを拡散する

ブレインストーミングの手法と解説をしてから、担当教員が司会をして行なう。

ただし、人数が多いので不十分な状況である。

b. アイデアをまとめる

KJ法について説明し、グループに分かれて作業を行なう。まとめられたカード群は一覧表に書き写して（学生の係が行なう）、全員に配布し、実例として保存させる。

c. 本の調べ方、探し方

テーマに沿った本のリストの作成のため、カードのひな型を渡して、10冊ずつ記入させる。それをKJカード的に分類して一覧表にして配布する。（約150冊のリスト）

d. レポート指導

(i) レポートを書くためのレディネスの柱

- ・ 仮説→検証の手順が考えられる。
- ・ 実際に行なう段取りができる。
- ・ それを文章化する流れができる。

(ii) レポートを書く手順

- ・ レポートには「はじめに～おわりに」の間に定型的な項目がある。
- ・ レポートは感性でなく論理的な表現を用いる。
- ・ レポートのための概略メモとページ割の準備をする。
- ・ レポートを書く作業。

(iii) レポート評価

- ・ レポートをなるべく早く返却して、内容や書き方についてのコメントを行なう。（約1時間）
- ・ レポート評価の訓練は書く訓練につながる。その考えで相互評価をさせる。（無記名、評価項目のひな型を配布）--詳細については省略する。

e. プレゼンテーションの技術

発表をする内容、発表のテクニックなど。

f. ゼミ討論の方法

指名されて発言するという経験しかない学生に、自発的に発言することの重要性を理解させる（「沈黙は金でなく悪である」ことの意味をさせる）。討論するとはどのようなことかを理解させる（対立と議論は違う）。

④ テーマのかみくだき

後期の生演Ⅰは、生演Ⅱに向けて問題意識を持ち、仮説を研究の実行にまで高めていく訓練を行なう。

（図5-5 テーマのかみくだき）

例えば図5-5のような流れを提示し、次のような説明を行なう。

- ・ 拡散--なるべく広く、多く、変わった考え方はないか。
- ・ 収束--それぞれに理由をつける。（良い、悪い、私にとって・・・。）
- ・ 統合--上の材料を使って、自分の考え方や方針を立てる。（文章にする、実際

に動ける、計画が作れる。)

そして、テーマのかみくだきの例をいくつか配布して、学生自身が実習を行なう。その後過程も含めまとめて提出させる。テーマのかみくだきの目的は、生演Ⅱの各自の研究テーマを作成するための方法の訓練と、問題意識を持つよう揺さぶりをかけることである。

(3) まとめ

現在は、基礎演習的なラーニングスキルの訓練を中心に行なっており、卒業研究のためのラーニングスキルはできていない。それでも他専攻と比較して、学生の学習態度や意欲に差がではじめており、担当教員は自画自賛している。

しかし時間不足(演習時間、教員の打ち合せ時間)や教員の力量不足もあって、もっと有効な方法はないかと模索中である。その意味でもガイダンス教育の研究の必要性があると言える。

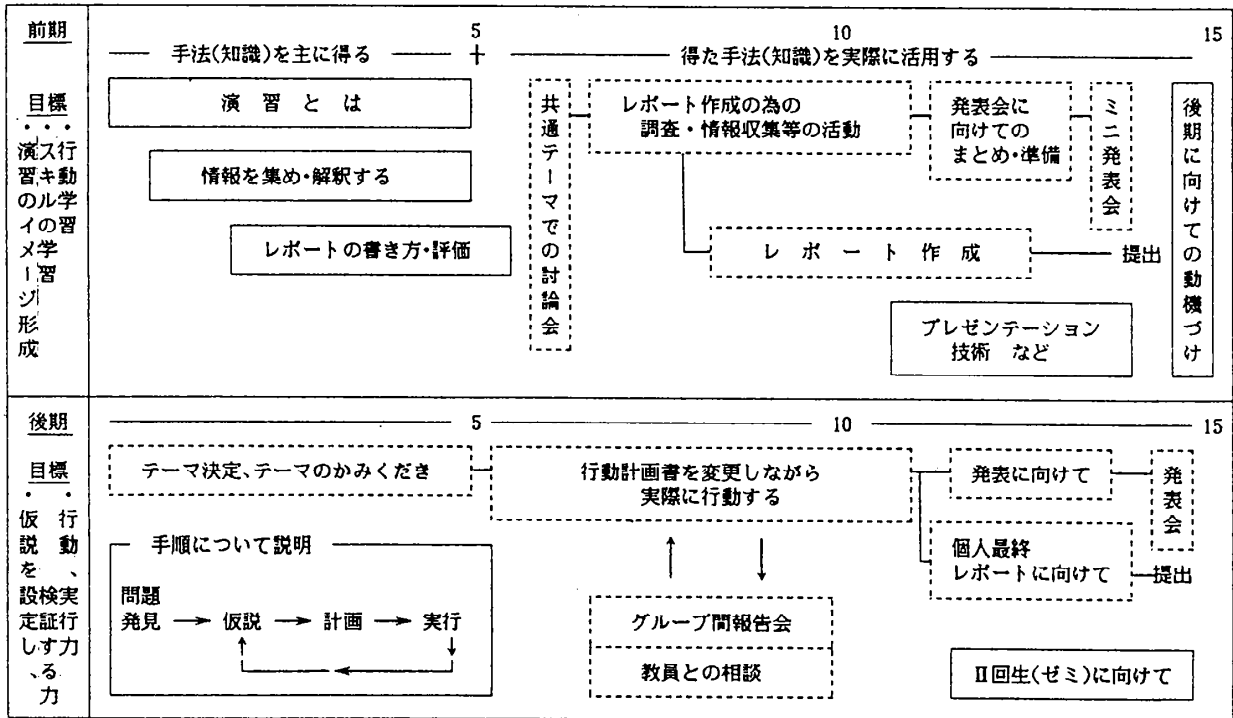
参考文献

(1)中村博幸他、「ガイダンス教育の展開」、日本教育工学会研究会、JET94-7、1994年。

表 5 - 1 生活科学専攻の基本的演習・実験

1 回生	2 回生
生活科学演習 I (基礎演習)	生活科学演習 II (卒業研究)
生活の科学実験 I (基礎実験)	生活の科学実験 II (課題実験)

表 5 - 2 KB 短期大学 基礎演習の流れ図 (生活科学演習 I)



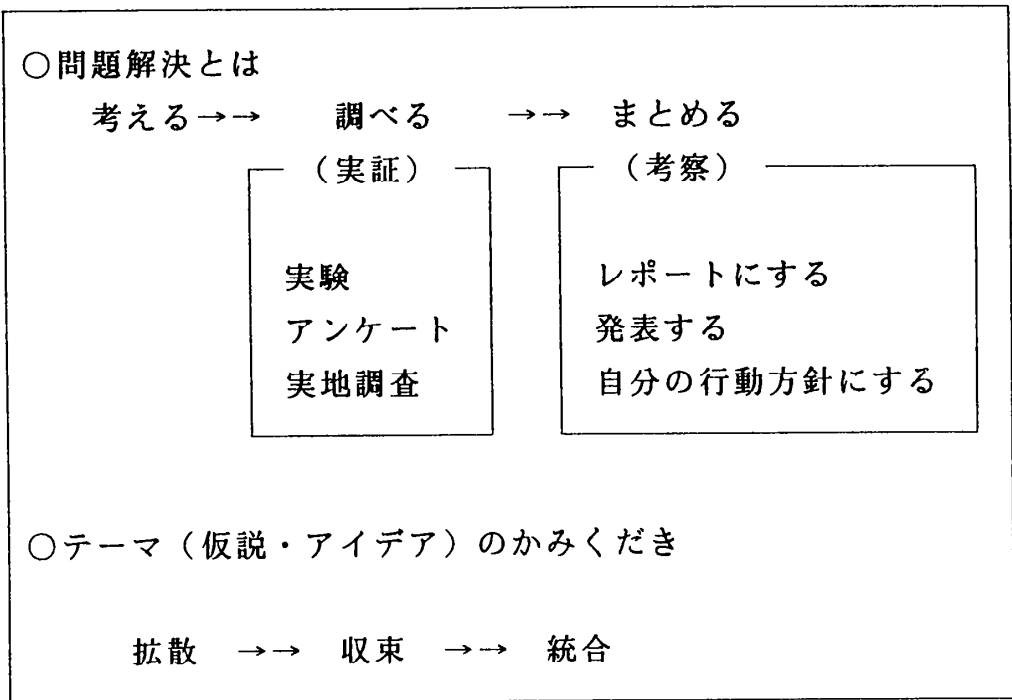


図5-5 テーマのかみくだき

【事例2】MG短期大学での教養演習の趣旨と実施について

MG短期大学は英語英文科、国語国文科、生活科学科の3学科を擁し、1学年の学則定員は760人である。

このMG短期大学では、平成5年度のカリキュラムの改正にあたって、教育課程を基礎教育と専門教育に区分した。その際の教育課程の編成方針として、10項目の基本方針が立てられた。その中から本事例に関係する4項目を要約する。

- ①第1に、学生が学問的な関心と問題意識を持って自主的かつ積極的に学習できるような授業科目を配すること。
- ②第2に、科目の設定は、「ねらい」を明確にし、課題性に富んだものとする。
- ③第3に、1年次生の基礎教育として、学問への眼を開かせる学習方法、図書資料の収集と活用方法、レポートの書き方、発表・討論の仕方など、基礎的訓練を重視した授業科目を設定すること。（以下略）
- ④第4に、各授業科目ごとに、授業の概要、内容の計画、実施形態・方法などをあらかじめ学生に明示し、資料の収集方法、発表、討論などの実施方法についても学生に周知を図るようにすること。

この基本方針に基づいて、基礎教育科目が編成され、科目群として教養演習、課題研究、総合科目、言語・情報に関する科目、芸術に関する科目、外国語に関する科目、スポーツ・健康に関する科目を設置することが定められた。

この内、前述の基本方針の①から③の方針を具体化した科目が教養演習である。つまり教養演習は、基礎教育の最も重要な基本方針に基づいて考え出された科目であったと言える。この教養演習は、さらに具体的な科目像として、次のような取り決めがされた。

すなわち「教養演習は、1年次生に配当し、半期2単位、通年で2科目4単位を必修とする。授業は、演習形態で行なわれ、約30人規模とする。授業で扱う題材は、担当者の研究領域に関する教養的「名著」とする。また、ラーニングスキルのねらいとして、要点をまとめる、発表する、討論する、レポートを書く、などの学習活動を含む。

本授業は基礎教育の根幹をなす科目であるから、設置方針を徹底するために専任教員が担当する。また、授業の題材、分野が偏らないようにするために、担当者は事前にシラバスを提出し、基礎教育委員会（基礎教育を運営するために各学科などの委員で構成）が内容、担当分野、クラスの調整を行なう」という内容である。

さらに、議論を重ねて、教養演習の科目名は、「読書と思索」ということになり、学生数の関係から「読書と思索1」から「読書と思索33」までの33科目が開講された。

ちなみに、平成6年度の内容は、読書と思索1「明治日本の面影（小泉八雲）」、同4「沈黙の言葉（E. ホール）」、同8「タテ社会の人間関係（中根千枝）」などである。

また、基本方針の④を受けてシラバスが作成された。特に「読書と思索」のシラバスでは、その冒頭にこの科目の趣旨が掲載され、学生と教員に周知を図るようにしている。

その趣旨の抜粋は、以下のような内容となっている。

1年生に配当される「読書と思索」は、本学基礎教育の根幹をなす科目で、科目の内容は、学生各自の所属する学科以外の専任教員が担当する授業を受講することが原則です。半期2単位の必修科目ですが、学生は開講授業の中から2科目を履修しなければなりません。

受講生は以下のことに留意しながら履修して下さい。

「読書と思索」は、幅広く深い教養を身につけることを目的として各担当教員の研究領域に関する教養的名著を題材とし、「演習」形式で実施される授業です。

この授業を通して、大学と大学における授業システムを理解し、学習方法すなわち「発表の仕方」、「討論の仕方」、「文献の調べ方」、「レポートのまとめ方」などを主体的に学びとるという副次的な目的も課されます。そのためこの授業では、“参加する”という能動的な姿勢が学生に要求されます。

さらに、授業を通して大いにコミュニケーションを図って下さい。年代や価値観、知的関心分野の異なる人から啓発を受けたり、意見交換をしたり、連体感を持つことも重要です。

以上の目的のもとで開講されているのが本学の「読書と思索」です。

学生は、このように1年次の始めに演習科目を体験し、さらに特定の学問分野固有の学習方法、調査方法、表現方法などを体験的に学び、一般的なラーニングスキルを獲得する。同時に、各自の専門分野以外の学問分野に対する知的関心を持ち、幅広い教養を涵養することもできる。そのような学習欲求を持った学生にとっては、基礎教育科目群の「課題研究」（2年次生を原則的に対象とした科目）を履修することによってさらに、関心の幅を広げられるようになっている。

異分野の教員つまり自分の学科以外の専任教員から、しかも前期と後期に2人の教員からラーニングスキルを学ぶことは、興味深い体験となるはずである。例えば、国語国文科の学生が前期に「大陸と海洋の起源（A. ウェゲナー）」を履修し、後期に「まざあ・ぐーす（北原白秋訳）」を履修するというように異なった題材、分野となるため、授業の個別の場面では、異なったラーニングスキルを体験する可能性もある。そこから、逆に、自分の専門分野固有のラーニングスキルや学習スタイルを見出すことも期待される。

以上のように、入学直後の学生に基礎教育としてのガイダンス教育を行なうことを意図して配置されたのが、MG短期大学の共通必修科目「読書と思索」である。

なお、平成6年度には、本科目実施後2年目であることから、担当者に対して、科目設置の趣旨がどの程度達成できたかについて、アンケート調査を実施し、結果を次年度以降の本科目の改善に役立てることになっている。

同一法人のMG大学における教育課程も基礎教育と専門教育とに区分され、基礎教育の教養演習として「世界の古典を読む」があり、発展的な科目として「課題研究」がある。カリキュラムの構造は短期大学と類似しているが、短期大学における「読書と思索」の方がガイダンス教育として、より一層明確な主旨を掲げている。

5. 5 就職活動におけるガイダンスの例

新聞紙上では、平成7年春の新卒者の就職は厳しく、就職希望者にとってまさに「極寒厳冬」の様子を伝えている。これは、バブル崩壊に加えそれまでの産業界全体の構造的欠陥に起因する不景気により、企業の新卒者採用の抑制や中止が主な理由と言われている。そして、企業のこの姿勢は、行政の景気回復基調の判断の声にも、中々動きを崩さない様子である。

このような今年就職戦線を就職関係者は「空前の買い手市場」と称して、就職希望の学生に注意を喚起している。まさしく今までは、成績優秀な学生なら概ね希望の企業や職種に内定を受けたものだが、今年に限っては、一向に決まる気配がない。それでも4年制大学の学生にはまだ求人もあり、活動が可能である。しかしながら、筆者らの2人（岩崎、横山）が勤めるOD大学短期大学部の学生にとっては、求人数は激減し、学生曰く「巡り合った時代が悪かった」としか言いようがない状況である。

このような学生に筆者ら（就職対策委員の岩崎と協力者の横山）は、例年よりも内容の濃い就職ガイダンスを企画した。これは、所属する短大としても正式に承認され、平成6年4月16日（土）に午前と午後の2クラスに分けて「就職対策特別講座」として実施した。

（1）OD大学短期大学部での就職支援活動とその時期

本学は4年生大学と併設しているが、就職課は共通である。これは、学生に対しても企業に対しても窓口サービスが1本化されているというメリットがある。もちろん、就職指導室も1つで求人ファイルも共通である。

例年の就職支援活動は、就職課と教員から選出された就職対策委員および卒業研究指導教員らが情報交換をしつつ、適宜、就職斡旋・指導を行なっている。これはすべてカリキュラム外のものである。

就職課が開催する就職ガイダンスは、11月（就職の手引き配付）、2月（就職適正検査）、4月（求職登録説明）、5月（活動情報の提供）、7月（活動情報の提供）と定期的に授業時間外に5～6回実施されている。この他にも、企業等から招いた人事担当者の講演が昼休みの休憩時間に実施されており学生達の集まりも多い。

また、学内に事務局を置くOD大学同窓会「友電会」が主催する「OB交流会」があり、短期大学部の学生も参加している。これは、社会で活躍している卒業生に学内で講演をしてもらうことで、就職活動への臨場感を高めるのに役立っている。7月までに3回ほど放課後に自主的に実施され、学生達にも人気が高い。さらに、同窓会編集による「活躍するOD大学OB」という求人雑誌が発行され、希望者には全員自由に持ち帰れるようになっている（短期大学部の学生の掲載もある）。これも、的の得た求人雑誌となっている。

（2）「特別講座」企画の意義

このように、従来からの就職支援活動に加えて、今回「特別講座」を企画したのは、通常の就職ガイダンスに加えて、タイミングを考えたより細かな指導が必要と感じたからである。それは、学生達の日頃の言動から、また企業の人事担当者から漏れてくる「今年の

欲しい人材像」等の情報に筆者らが敏感に反応したからである。すなわち、学生達は思ったほどまだ今年の厳しい就職戦線の状況を把握していないこと。特に、危機感を感じおらず、そのうち景気が回復してすぐに何とかなるように思っていること。企業は景気の回復の見通しのきっかけがつかめず、回復基調は夏以降に持ち越すであろうと感じていること。それまで新春向けに新卒の求人活動を行なっていくが、じっくり構えて本当に「欲しいと思う」人材を時間をかけてゆっくりと探し、あわてる必要はないと思っているということなどである。

これらのことから、最初に指導するポイントは、学生達の重い腰を上げさせ、まず、準備させることだと考えて「特別講座」を企画した。したがって、実施時期も通常の就職課によるガイダンスの第3回目（4月12日、事務手続きを中心としたもの）の実施後の1週間以内に設定した。これは、せっかく「重い腰」が上がりかけた時期に連続的に彼らの意識に刺激を与え、一気にその気にさせてしまうことをねらったものである。いわば「ワンツーパーチ効果」とでもいうものをねらったものである。

講座の内容は、前年度の就職結果の状況説明、就職情報の収集方法（就職課の活用も含む）、会社に対するアポイントの取り方（ビデオと解説）、履歴書・自己紹介書の書き方、面接の受け方（ビデオと解説）、自己分析の仕方（卒業研究活動の利用方法も含む）、その他（多目的室のパソコンによる求人情報検索システムの利用等）である。これらの内容について以下に説明する。なお、図5-6に講座案内の資料を示した。

（図5-6 講座の案内掲示）

（3）講座の内容

1. 前年度の就職結果の状況説明

メディア OHP

時間 約10分

内容 前年度の求人状況（希望者数、求人数、倍率）
内定状況（内定率等）
進路先分布、就職先企業の規模・職種など
就職活動スケジュール（活動開始時期の説明）

2. 就職情報の収集方法（就職課の活用も含む）

メディア 書画カメラによる大型スクリーンへの投影

時間 約10分

内容 就職課で配付されている資料の紹介と読み方
同窓会発行の求人雑誌の使用法
資料請求ハガキの使い方（単なる請求ハガキではない。自己アピールのチャンスに使う）

3. 会社に対するアポイントの取り方（ビデオと解説）

メディア ビデオ映像

時 間 約 20 分

内 容 人の振りを見てわが身を反省する方法にビデオが役立つ
家族の人の電話応対への注意（企業は家族も見ている）

4. 履歴書・自己紹介書の書き方

メディア 先輩の履歴書の事例、見本

時 間 約 15 分

内 容 履歴書の提出の意味（自分の身代わり）
なぜ、文字は丁寧な方がいいのか
自己紹介書のサイズと使い方

5. 面接の受け方（ビデオと解説）

メディア ビデオ映像

時 間 約 20 分

内 容 人の振りを見てわが身を反省する方法にビデオが役立つ

6. 自己分析の仕方（卒業研究活動の利用方法も含む）

やる気の研究、P I（パーソナル・アイデンティティ）の確立の研究を行なって来た成果を学生に還元したものである。

メディア パソコン（実演）、記録用紙（配付）、OHP

時 間 約 20 分

内 容

① 自己管理が重要

活動の記録をつける。自己を冷静に見つめるために記録は役立つ。また、相談のときにできるだけ正確な状況を相手に伝えるために重要な資料となる。

「就職活動の記録」用紙の記入（Plan-Do-Check-Actionで自己管理）

- ・『日記』（A4判用紙横型）―――記入例を図5-7に示す。
- ・『特定企業』（B4判用紙横型）―――記入例を図5-8に示す。

（図5-7 就職活動の記録（日記：A4判用紙横型）の記入例）

（図5-8 就職活動の記録（特定企業：B4判用紙横型）の記入例）

② 自己分析が重要

パソコンを利用した5つの調査（YG性格検査研究用、VPI職業興味度検査研究用、やる気のタイプ調査、気質調査、価値観調査）による自己のための情報が簡単に手に入る。

7. その他（多目的室の就職情報検索パソコンシステムの利用等）

メディア パソコン（実演）、OHP

時 間 約15分

内 容 本学の多目的室に、パソコンによる求人情報検索システムを稼働させている。利用は随時可能である。情報を入手したら、就職課もしくは就職担当の教員まで相談に行くこと。

以上の特別講座には、就職希望者の90%に当たる学生が参加した。今後は「就職活動の調査用紙」の記入奨励と回収とその分析の必要がある。

平成6年4月5日

短大2年次生各位

短大就職対策委員

就職対策特別講座（1）

平成7年度の就職活動は非常に厳しいものがあります。ついては、短大生諸君のために本年度第1回の就職特別講座を開催しますので、全員必ず出席して下さい。

記

日時 平成6年4月16日（土） 午前の部 10:00～12:00 (B93001～160、その他)
(C93001～080、その他)

午後の部 13:00～15:00 (B93161～324、その他)
(C93081～163、その他)

場所 E号館3階 352教室 (称AVC教室)

内容

	講師	午前の部	午後の部
0. 平成5年度の就職結果の状況説明……………	林内	10:00-10:10	13:00-13:10
1. 就職情報の収集（就職課の活用も含む）方法……………	横山	10:10-10:20	13:10-13:20
2. 会社に対するアポイントの取り方(ビデオ)……………	横山	10:20-10:40	13:20-13:40
3. 履歴書・自己紹介書の書き方……………	横山	10:40-10:55	13:40-13:55
4. 面接の受け方(ビデオ)……………	横山	10:55-11:15	13:55-14:15
5. 自己分析の仕方（卒業研究活動の利用方法も含む）……………	岩崎	11:15-11:35	14:15-14:35
6. その他「E号館1階153教室（多目的室）のパソコン活用・他」……………	林内	11:35-11:50	14:35-14:50

以上

図5-6 講座の案内掲示

最終提出先：岩崎研究室 (B204室)
最終提出締切日：就職活動終了時

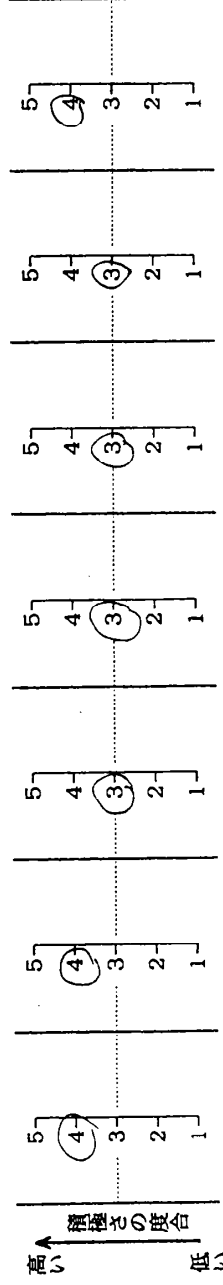
就職活動の記録

企業名

学生番号 B1 氏名 山崎 研 研究室 模心研究室

- この調査は、あなたの就職活動の自己管理と指導のアドバイザーに利用するものです。真実に、しかし丁寧に記入して下さい。先生や就職課との相談に利用して下さい。
- 就職活動の出来事について、下の表(月・日・欄)に書いて下さい。例えば就職活動の(何をしようとしたのか)、どのように(行動したのか)、その結果(どうだったのか)、それでは(次に何をやるのか)といった内容を出来事・日記風に記入して下さい。
- 就職活動の出来事(月～日)に対応して「積極性の度合」を5段階で記入して下さい。(下の表の数字に○印を付けること)

4月20日水曜	4月21日木曜	4月22日金曜	5月10日土曜	5月20日金曜	5月末日曜	6月2日木曜	6月3日金曜
就職活動の出来事について丁寧に書きなさい	初めてのセミナーに出席大阪球技場の各 のミニオにバイトの募集にふいふももらった。 2つ3つ社話は聞いたが、気に入らなかつた。 ほかの所で特定の会社とアポイント分す。	20社ほとに資料請求の(かきを送り。 学校から持ち帰るに「企業年鑑」を見て	梅田スカイビルでのセミナーに出席。(合同 奨励ともた企業家はびらたので、こも 話で聞かされた。	OMMビルでのセミナーに出席。(合同 数社で話を聞え。(物アスコの話も聞いた後 後台向かいる会社説明会に出席する	前に資料請求した会社から「採用なし」 返送されてくるが「女子不採用」か「採用なし」 の通知ばかり。おぼい女子会社に請求したにか 自分でわからないうようひとさびた。	昨日の一覽表の中から20社ほとに資料請求。 もて帰る。 また会社女子不採用。参加企業の一覽表を 望む巻には「三時会場」と。時間やと便がよあて 一時から四時までで。は時本に打たときすすに おしこすマルでらセミナーに出席。(合同)	



大阪電気通信大学短期大学部就職対策委員会作成

図5-7 就職活動の記録(日記 : A4判用紙横型)の記入例

この調査は、あなたの就職活動の自己管理と指導のアドバイスに利用するものです。気軽に、しかし丁寧に記入して下さい。先生や就職課との相談に利用して下さい。
 2) 就職活動の具体的な行動一つ一つについて、下の表の PLAN(何をしようとしたのか) DO(行動した内容) CHECK(その結果どうだったのか) ACTION(次に何をやるのか)の項目を記入して下さい。
 3) 就職活動の PLAN, DO, CHECK, ACTION の項目に対して「積極性の度合」を5段階で記入して下さい。(下の表の数字に○印を付けること)

【日 平成6年6月7日】 (第1工程)

PLAN (何しようとしたのか)	DO (何したのか)	CHECK (結果どうだったのか)	ACTION (次に何をやるのか)
たははくせんとう 説明会(出願 あり)とあわせて 和歌山にのりかき 準備もあつた。	筆記試験(作文 直性有様)が あつたこと 何もしないで か、昔年作文も 書いてはま、どう 身持ちだつた。	常識問題など け、どうも、 てをよくと 思つた。	筆記試験 いこうも 行つた 思つた。
5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1

積極性の度合
↑ 高い
↓ 低い

【日 平成6年7月19日】 (第3工程)

PLAN (何しようとしたのか)	DO (何したのか)	CHECK (結果どうだったのか)	ACTION (次に何をやるのか)
役員面接は さあ、 15日とあつた。 ハットの先輩と とあつた。準備 か、あつた。	とあつた。 全館関係(あ ハットの先輩と 会社の趣所と あつた。	ハットの先輩と 内川はよいと 認識がよいと あつた。準備 か、あつた。	内川定まり 15日とあつた。 内川はよいと 認識がよいと あつた。準備 か、あつた。
5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1

積極性の度合
↑ 高い
↓ 低い

【日 平成6年7月27日】 (第4工程)

PLAN (何しようとしたのか)	DO (何したのか)	CHECK (結果どうだったのか)	ACTION (次に何をやるのか)
面接見直し 準備あつた あつた。 け、準備あつた。	「入社して か、あつた。 とあつた。 内川定まり もあつた。		
5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1

積極性の度合
↑ 高い
↓ 低い

枚目です

大阪電気通信大学短期大学部就職対策委員会作成

図5-8 就職活動の記録(特定企業 : B4判用紙横型)の記入例

5. 6 入学時の動機づけガイダンス教育の例

OD大学短期大学部には1部（昼間）と2部（夜間）とがある。2部の講義時間は午後6時～9時10分までである。

2部学生は1部学生と比べると、生活環境や学習者の状況がかなり異なる。例えば、年齢構成が20歳代から60歳代とバラエティであり、有職者の比率やアルバイトの比率が高いなどが挙げられ、どうしても勉強にかなりのハンディがある。

そこで、入学後の2部学生に対して、90分間のオリエンテーションの時間内に、ガイダンス教育の1つとして、就学の困難さ、自己管理の重要性、目的作り、めざす資格取得、時間の上手な活用、生活習慣のつけ方、忍耐力、やる気の持ち方のような当たり前の話しと、図書館の活用法、生協の利用法等を約20分間ほど講義している。そして、その後に勉学に対する意識・意欲の調査を実施している。

特に2部学生を調査するのは、前述したように1部学生とは学習環境が大きく異なり、毎日出席しにくい立場に置かれており、ある意味では卒業証書の取得が1部学生に比べて困難であると思われる。しかし、学生は目的意識や努力目標を掲げて、自己実現のためにやる気を持って自己管理をし、目標達成に向かっていこうとしていることも感じているので、その実態を知ることが必要と考えているからである。

調査用紙は2年間用のものを用い、学生は過去1年間の勉学のやる気と入学後の未来の勉学のやる気を記入する。特に未来のやる気を調査しようとしているのは、本人の目的に沿った計画・努力目標・目標の設定等をはっきりさせるように指導しているからである。

調査に必要なものは、①図5-9のやる気調査にあたっての注意点の事例、②図5-10のマークカード4枚の事例、③図5-11のやる気の調査用紙の事例（「共1（改）2年間記入できる用紙」）の3つである。

なお、調査結果の分析は主として被験者自身がこれを行なうことと指導している。まず自分で自己のやる気がどのように推移しているかを把握し、次にこれまでの自分のやる気がどのような状態であったか、さらにいろいろ理由を掌握して自分のやる気に関する要因を知り、自己管理や自己改革の一助となるように利用して欲しいと特に指導している。

（図5-9 やる気調査にあたっての注意点の事例）

（図5-10 マークカード4枚の事例）

（図5-11 やる気の調査用紙の事例）

やる気調査にあたっての注意点

◎ 調査用紙へ記入する時の注意点 ■ 新1年生用 ■

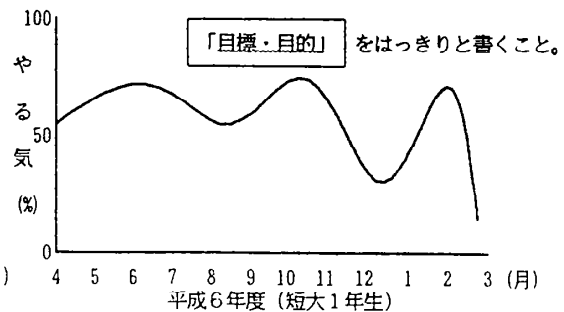
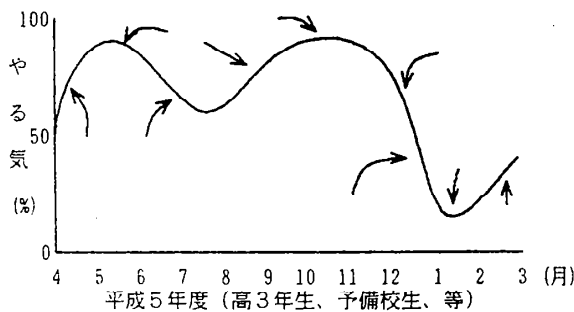
1. 学校名、学科名、男女の別、学生番号、名前は必ず記入して下さい。卒研室名、クラブ名は、もし記入可能であれば記入して下さい。
2. これまでの自分の人生の中で、一番やる気を起こした時のことをいつ: 理由: の中へ記入して下さい。この時のことがあなたのやる気最高の状態と考えて下さい。
3. これまでの自分の人生の中で、一番やる気をなくした時のことをいつ: 理由: の中へ記入して下さい。この時のことがあなたのやる気最低の状態と考えて下さい。
4. ここで言うやる気とは勉強のやる気のことです。アルバイトやクラブのやる気ではありません。1年間のやる気を思い起こして書いて下さい。過去のやる気は「やろうと思った過去の気持ち」です。未来のやる気は「やってやろうという今の段階の気持ち」です。
5. やる気カーブに大きな変化があったところには、やる気を起こした理由あるいはやる気をなくした理由を具体的に書いて下さい。そして理由の後にはやる気の状態を記入して下さい。
理由の例、高校3年大学入試直前のころ(やる気)、とか大学1年前期試験の時(やらされ気)と言うように記入します。
理由の例、大学受験に失敗のころ(やらん気)とか、講義が面白くないので(やれん気)と言うように記入します。
6. 理由の後には、やる気の状態「やる気」、「やらされ気」、「やらん気」、「やれん気」を必ず記入して下さい。

● 左側のグラフには過去のやる気を記入します。

● 右側のグラフには未来のやる気を記入します。

◎ 過去のやる気は平成5年度のやる気(高3年生あるいは予備校生あるいは社会人等)のやる気を思い起こして、やる気のカートと理由と四状態を書いて下さい。

◎ 未来のやる気は、平成6年度のやる気(短大1年籍在生)の「目標・目的」挙げて「やるぞという気持ち、希望等」を予測した、やる気のカートと「目標・目的」を書いて下さい。



◆ここに描いているカーブは一つの例です。真似る必要はありません。→印のところには理由とやる気の状態を記入して下さい。

◇ 調査のご協力ありがとうございました。次にマークカードの記入にご協力をお願いします。

教育情報研究室 岩崎研

図5-9 やる気調査にあたっての注意点の事例

5. 7 実験・演習ガイダンス教育の例

【事例1】OD大学短期大学部での実験における例

OD大学短期大学部の平成5年度電子情報実験Ⅰを担当した教員から、学生の実験態度の非常識のアンケート（無記名）を、専任6名とTA（ティーチング・アシスタント）3名から回答を集めた。次にそのアンケート文を示す。

最近、学生が実験に対する取り組みの姿勢・行動・態度・実験報告書等に関して常識的に見てどうもおかしい、何か欠けている。このようなことが多々見受けられると思います。

実験担当者は学生の実験に対する取り組みに対して何等かの指導を必要とする時期が来たと思われます。常識的に見ておかしいと気づいた点をどしどし下記の空欄に記入して下さい。

なお、この資料の活用はOD大学短期大学部電子情報実験Ⅰに対する非常識集にして、4月当初のガイダンスのときに学生に配布して実験に対する認識を新たにしてもらおうものです。

このような用紙を担当者に配布して、学生達に記入してもらったアンケートの内容を下記にまとめた。

項目は全部で48個あり、一部重複した内容が記入されている。

1. 自発性がない（積極的に取り組む姿勢に欠ける）。
2. 予習していないので、実験内容の理解不足が目立つ。
3. 必要な文具を持参していないので、当日の実験結果の整理がその場でできない。
4. ノートを作っていない（ルーズリーフが良く使われている）。
5. レポートを自分の力で作成していないので、表の作成方法まで指導しないとまとまらない。
6. レポートの書き方のルールを科目全課題終了後まで学んでいないので、図表の番号の付け方を知らない。
7. テキストを持って来ない学生が多い。
8. 1テーマを2週間でこなす方式である。2回目のとき前回のデータも持って来ない。実験ノートの作成が必要である。
9. テキストをあらかじめ読んでおくことをしない。
10. 実験では結果を図にして書くことが多いにもかかわらず、セクションペーパーを持って来ない学生が多い。（学生の中には自動販売機の設置を望むものもいる。）
11. 実験中だらだらする者がかなりいる。実験時間あるいは開始終了時刻をもっと厳密にすべきである。時間が来たら電源を落としたりどうか。
12. レポート提出期限の厳守をすること。レポートが遅れたものは減点してはどうか。

13. 実験開始が日々遅くなる。
14. 服、荷物を実験台の上に放置している。ひどい者は測定器の上に置いている。
15. レポートの提出が遅い。
16. 実験内容を理解していない。
17. 4人中、1人はボーとして何もしていない。
18. 実験中に雑誌やマンガを読んでいる。
19. 実験中に無断外出する。
20. 他人のレポートを丸写ししている。
21. 実験が終わっても報告しないで帰る。
22. グラフ用紙を持参しない。教科書を持参しない。
23. 実験前の説明を聞かないでボーとしている。
24. 実験器具の扱いが乱暴である。
25. 実験結果に対する考察がほとんどない。
26. 実験中に帽子をかぶった者がいる。
27. 他の班の所に行ってしゃべっている者がいる。
28. 実験テーブルの上に座っている者がいる。
29. 紙屑を放置したまま帰る。
30. 実験当日欠席していたにもかかわらずレポートを提出している。
31. 実験中に他の実験レポートを書いている。また他の授業のレポートを書いている者もいる。
32. 時間通りに来ない。特に後期は15分～20分の遅刻は当たり前で、ゆっくり来るように思われる。(遅れた理由があるなら申し出て欲しい。)
33. 出席していても席についていない。
34. 遅れてきても何の申し出もない。実験の終わりに、「来ていました」と言われても困る。
35. 出席カードにまだ来ていない者の名前を書く。(但し、出席欄に)
36. 座っていても実験のテキスト、ノート、筆記用具を机の上に出していない。
37. 実験中マンガを読む。
38. 実験室で飲んだり食べたりしている。注意してもその場だけでまた食べている。
39. 実験中、テキストを開いていない。
40. 実験の役割分担ができていない。1人が計測、計算、データのグラフ化をしている。
41. 座っていても実験中ずっと話をしている。
42. 注意しても実験しようとするのは、その場だけである。
43. 実験を手伝わずに平然としている。
44. 実験の途中で室外で喫煙する。
45. 実験の始めと終わりだけ実験室にいる。
46. 実験の説明を聞かない。
47. 検討課題を1つもせずにレポートを提出する。
48. データを取ると帰ってしまう。実験が早く終わったらレポートを書いて欲しい。
(注意すると一時的にやめる。良くないという意識はあるようだ。)

上記の項目を分析してまとめてみると、表5-3のようになった。

表5-3 非常識アンケート結果のまとめ

項 目	件数	%
1. 教科書・実験に対する予習をしていない。	3	6.3
2. 教材を持参しない。ノート、方眼紙、諸器具（テンプレート等）	6	12.5
3. レポートの作成能力が不足している。	6	12.5
4. 実験に取り組む態度が悪い。	27	56.3
5. 実験開始・終了時の時間厳守。	2	4.2
6. その他。	4	8.2
合 計	48	100.0

その他を含めて6つの項目にまとまった。該当する件数を見ると、「4. 実験に取り組む態度が悪い」が最も多く、実験担当者の目につくことが分かった。今後の指導の題材として、実験を開始する年度始めの4月のガイダンスに活用することにした。

【事例 2】OD 大学における演習での例

OD 大学では、全学共通の施設として情報処理教育センタがあり、情報処理の演習科目はすべてこの施設を利用することになっている。センタには専任の技術職員がおり、科目担当の教員の演習をサポートしている。入学してきた学生は、この施設を利用する最初の時間（各科目の 1 回目の授業）に技術職員からセンタ利用でのガイダンスを受けることになっている。そこでは、センタ利用手引き（プリント）が配付され、センタ利用での諸注意と機器利用の手ほどきがある。さらに、違反する学生にはセンタ利用を拒否する旨が説明されている。センタは、授業で利用していない時間帯に一般学生に自由開放されているが、この諸注意を守らない者は、当然ながら利用を拒否される。筆者ら（横山、岩崎）も電子計算機基礎演習等の科目を担当しており、この技術職員によるガイダンス教育の恩恵を受けている。特に筆者の場合は、これらの基本的な注意の他に、椅子の座り方やキーボードとテキストの置く位置などの科目特有の注意事項を追加している。このような注意も実際に学生達に守らせていくには、担当教員と技術職員の連携プレーによる学生の行動の点検と注意の繰り返しが必要である。この繰り返しによって、半期の科目が終了する頃には、学生達にも利用上の注意が習慣づいてきていると言える。

情報処理教育センタ利用のためのガイダンスの内容

①時間：約 30 分

②方法：配付資料による説明と学生各自の機器操作

③説明内容

(7)諸注意

1. 室内は土足厳禁。演習室入口でスリッパと履き替える。
2. 室内は喫煙・飲食禁止である。
3. 演習以外のソフトウェアの持ち込みは禁止である。
4. センタ常備のソフトウェアは持ち出し禁止である。持ち出した者は賠償責任が問われる。
5. パソコンの環境設定（ディップスイッチ等）を変更しないこと。
6. 利用後はパソコンの電源を切ること。
7. 出力用紙は丸めずに回収箱に入れること。
8. ゴミ、椅子、スリッパをかたづけること、など。

(1)機器操作

1. パソコンの起動と終了について。
2. 提示用モニタ（OD 大方式）の電源 ON/OFF について。
3. プリンタによる印刷（特に紙づまりの対処方法）について。
4. 学生各自所有のフロッピィのフォーマットについて。
5. 演習ソフトウェア（システム）の起動と終了について。
6. エディタの使い方について。
7. 漢字の入力方法（漢字モードの設定と解除）について、など。

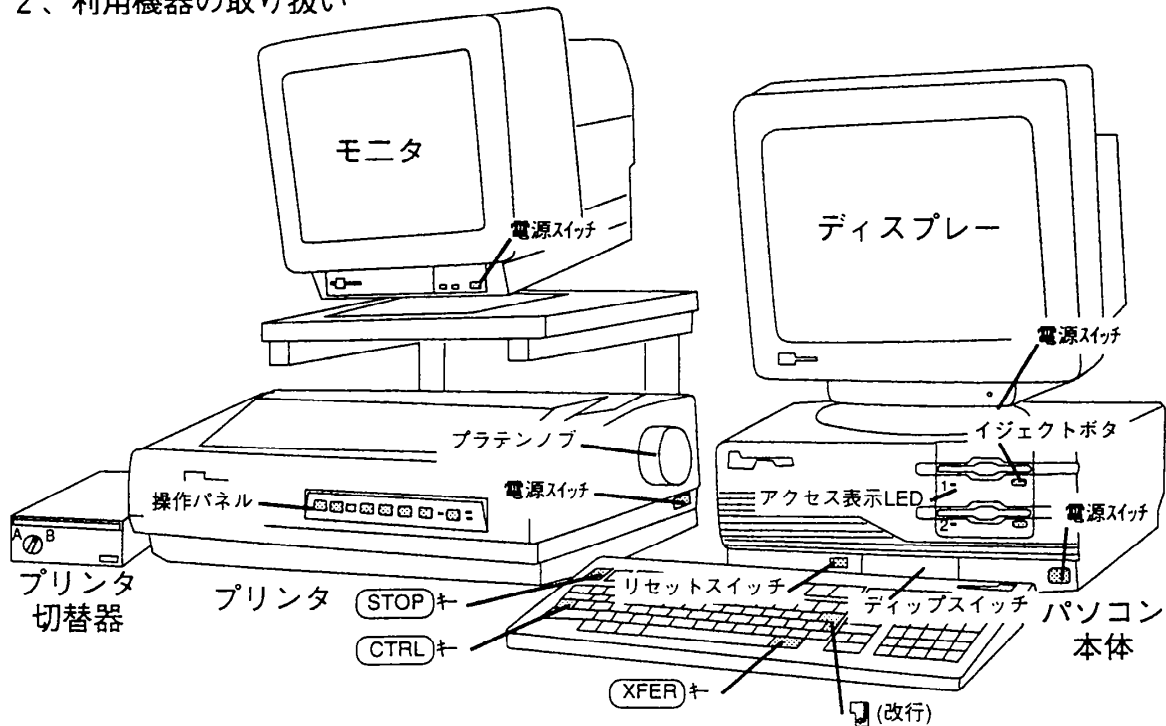
図 5 - 1 2 に配付資料を示す。

情報処理教育センター第4 演習室利用手引

1、注意事項

- ①演習室内は土足厳禁です。演習室入口でスリッパに履き替えてください。
- ②演習室内で喫煙・飲食を禁止します。
- ③演習用ディスク以外ディスク、
演習に必要なソフトウェアの持ち込みは禁止します。
- ④ソフトウェアを持ち出さない事。その行為に及んだ者は、賠償責任に問われます。
- ⑤パソコンの環境設定（ディップスイッチ等）を変更しない事。
- ⑥利用後は、パソコン（本体、プリンタ）の電源を切り、
出力用紙（丸めずに箱に入れる）、ゴミ、椅子、スリッパをかたずけてください。

2、利用機器の取り扱い



利用時

- ①モニタの電源スイッチを入れる。
- ②パソコン本体の電源スイッチを入れる。
- ③プリンタの電源スイッチを入れる。
- ④ドライブ1にディスクを入れる。

終了時

- ①アクセス表示LEDが消えているのを確認し、
イジェクトボタンを押す。
- ②ディスクを抜き取る。
- ③STOPキーを押す。
- ④パソコン本体の電源スイッチを切る。
- ⑤プリンタの電源スイッチを切る。
- ⑥モニタの電源スイッチを切る。

3、プリンタの取り扱い

●印刷準備

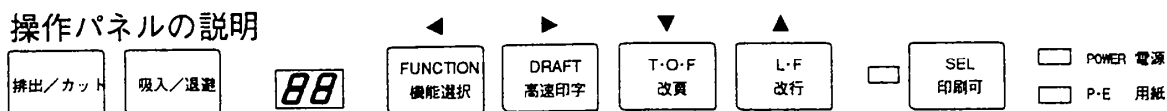
- ①プリンタ切替器を使用するパソコン（左側はA，右側B）に切り替える。
- ②用紙を吸入位置に合わせる（吸入／退避スイッチ）。
- ③SEL印刷可ランプを点灯させる（SEL印刷可スイッチを押す）。

●パソコンでプリント命令を実行する。

●用紙の排出

- ①SEL印刷可ランプを消灯させる（SEL印刷可スイッチを押す）。
- ②T・O・F改頁スイッチを押す。
- ③排出／カットスイッチを押す。
- ④ミシン目で用紙を切り取る。

操作パネルの説明



ランプ

- POWER電源 電源がONのとき緑色に点灯
- P-E用紙 用紙切れや誤操作のとき赤色に点灯
- SEL印刷可 パソコンから印字可能のとき緑色に点灯

スイッチ

- SEL印刷可 パソコンに接続（SEL印刷可ランプ点灯）、切離し（SEL印刷可ランプ消灯）と交互に切り替わる

以下のスイッチはSEL印刷可ランプ消灯のとき使用する

- L・F改行 1行分紙を送る
- T・O・F改頁 1頁分紙を送る
- DRAFT高速印字 ドラフトモード（速度は速いが印刷品質は悪い）
- FUNCTION機能選択 使用しないように
- 吸入/退避 用紙を吸入位置に復帰、または退避位置に復帰
- 排出/カット 用紙をカット位置まで送り出し、または吸入位置に復帰

4、漢字の入力方法

漢字モード

半角英数モードのとき **CTRL** を押したまま **XFER** を押すと漢字モードになります。

●入力モード（これから入力する方法を設定）

f・10 を押す度に連ローマ字漢字，連カナ漢字，半角英数カナ，コードJIS，記号に変わります。

●変換モード（変換する方法を指示）

- | | |
|------------------------------------|---------------|
| f・6 を押すとひらがなに変換します。 | OOSAKA→おおさか |
| f・7 を押すとカタカナに変換します。 | OOSAKA→オオサカ |
| f・8 を押すと半角に変換します。 | OOSAKA→オオサカ |
| f・9 を押すと変換されません。 | OOSAKA→OOSAKA |
| ス^h・ス を押すと変換されます。 | OOSAKA→大阪 |

半角英数モード

漢字モードのとき **CTRL** を押したまま **XFER** を押すと半角英数モードに戻ります。

図 5 - 1 2 配付資料

5、演習用ディスクの初期化

ディスクは初期化しないと使用することができません。

D>_

D>B: _____ ①

D>FORMAT _____ ②

ドライブ2にディスクを挿入してください。 _____ ③

ドライブ2をフォーマットします。

準備ができたらどれかキーを押してください。 _____ ④

...

ボリュームラベルを入力してください

ボリュームラベル=A 1 2 3 4 5 _____ ⑤

ドライブ2のディスクをドライブ1に移してください。 _____ ⑥

D>_

6、第4演習室で使用できるソフトウェア

B A S N88BASIC (MS-DOS版)

C C TurboCコンパイラ

J X W 一太郎Ver4 (日本語ワープロ)

J X W 3 一太郎Ver3 (日本語ワープロ)

K B チャレンジ・ザ・ブラインドタッチ (キーボード練習)

M A S M マクロアセンブラ

M I MIFES-98 (テキストエディタ)

MIFESより下記のコンパイラが使用できます

C LEVEL II COBOL (コンパイラ)

F PC-FORTRAN (コンパイラ)

L Lattice C (コンパイラ)

O C ORCHID C (インタプリタ版C言語)

R U N C RUN C (インタプリタ版C言語)

T C TurboC (環境版C言語、漢字使用不可)

1 2 3 Louts123 (表計算)

5. 8 進路決定のための自己診断を中心としたガイダンス教育の例

今年度の大学生の就職の状況はきわめて厳しいものがある。このようなことは、大学の長い歴史から見れば、きわめて希なことかもしれない。学生達を指導する筆者ら教員にとって、かかる事態に対処して何かをしたいと考えるが、なかなか良いアイデアが浮かんで来ない。

このような異常な状態における学生の指導上の対処の方法はさておき、毎年繰り返す学生達の進路の決定には、これから社会へ出るためのガイダンス教育がぜひとも必要である。

そこでOD大学工学部経営工学科では、3年次前期配当科目の「経営情報処理演習」(1単位)の時間の一部に、進路決定について考えさせるため、「自己関心を持たせること」、「自己調査を行なうこと」、「自己理解に努めること」を促すための演習テーマを用意して、一種のガイダンス教育を行なっている。

この演習は、3人の専任の教員が約60名の学生を担当しており、3つの班に分かれた学生は、4週間ずつ3人の教員のところを回ることになっている。筆者の石桁は4週間1クルの演習の内容を次のように設定している。

第1週目

1回に約20名の学生が来るので、全員をパソコンのある演習室に入れ、筆者担当のテーマの目的を説明する。続いて4週間のスケジュールを説明し、演習の手引書を与え、演習内容について大まかな説明を行なう。さらに4週目に提出するレポートの用紙を渡す。レポートはワープロで仕上げるため、ワープロの易しい手引書も与える。

なお、この演習に来る3年生の学生達は、1年生のときにパソコンの演習を、2年生のときに情報処理の演習を経験し、MS-DOS、BASIC、ワープロ、LAN、データベース、パソコン通信、図形ソフトなどを使用している。

第1回目の演習の残りの時間で、学生達は市販の調査用紙を用いて自己調査を行ない、自己採点をする。その結果を自分で読み取り、調査説明書に沿って解釈する。ミスが無いかどうかを指導者(担当教員と大学院のティーチング・アシスタント)にチェックをしてもらい、第1週目の演習を終わる。

第2週目

パソコンを使って、5つの自己調査を画面上で行なう。このとき用いるソフトは、あらかじめ指導者側で用意していて、各自に専用のフロッピィを配布する。調査の結果をプリンタに打ち出し、よく確認してから持って帰る。次の時間までに、プリンタの出力部分を切り取り、レポート用紙の所定の欄に張りつけ、その出力された内容に対する自己判断をして来ることになっている。

さらに自分が将来就きたい職業を最低3つ考え、職種名を挙げて来る。またなぜそのような職種を希望したのか、レポートに書く文章を考えて来ることにもなっている。

第3週目

考えてきたレポートの文章を、ワープロに入力し、プリンタを用いて清書する。プリン

トアウトしたら、それをレポート用紙に張りつけ、指導者に提出して内容のチェックを受ける。不十分なら何回でもやり直させる。

ワープロに打ち込んだ文章は、必ず自分のフロッピィに保存しておく。それは修正のときに役に立つばかりでなく、第4週目の演習のときにも有効である。

第4週目

レポートを何とかこの時間の中に完成させ、提出させるように学生を指導する。一番大切なことは、自分は何の職種に一番興味を感じているのか、5つの調査を受けて自分にはどんな特徴があるのか、それをどのように評価するのか等々を自分の力で考えさせ、納得が行くまで突き止めるように指導することである。

この演習の目的は、学生達が4年生になったとき、自分の考えで、自分の意志で、自分の将来を決める力（意志決定力）を持つように導くことである。

今年度の4年生達は、4月早々から会社訪問や企業セミナーに出席して、就職活動を行なわざるを得ない状況に立たされている。このようなときは、学生一人一人の意志決定力が問われることになるので、この演習のような就職ガイダンス教育はきわめて大切であると筆者らは考えている。

5. 9 短期大学におけるプレ卒業研究教育の例

短期大学2年間の中に卒業研究の形を成功させるのは多くの困難な点がある。しかも事前指導も4年制大学のように3回生のゼミナールを通じてというようなこともできない。そこで2回生の卒業研究をスムーズに展開させるための事前指導と、学生を各ゼミナールに配当する手だてを考えた。

(1) KB短期大学家政学科生活科学専攻の卒業研究

①卒業研究の概要

KB短期大学では専攻ごとに卒業研究があり、「食生活研究」、「幼児教育演習」、「初等教育研究」などと呼ばれている。生活科学専攻では「生活科学演習Ⅰ」を基礎演習として、「生活科学演習Ⅱ」を卒業研究と位置づけている。

「生活科学演習Ⅱ」は、通年2単位で、各人が生活科学に即したテーマを選択し、1年間をかけて研究する。そして最後に発表会と原稿用紙30枚のレポート提出がある。この科目は、生活科学専攻所属の専任教員が担当し（現在8名）、学生をほぼ均等に割り当てる（現在学生数約100名）。シラバスからの抜粋は表5-4の通りであり、応用演習的な性格を持っている。

(表5-4 生活科学演習Ⅱの概要)

②指導上の問題

a. 活動上の問題

なかなかやる気がでない、積極的に活動しない。これは2回生前期が就職活動と重なり、就職が決定すると残りの学生生活をアルバイトなどを中心にして過ごすためもあるが、所属ゼミナールを学生番号により、機械的に割り当てていたため、友人が少なく共同作業がやりにくいためも考えられる。

b. 内容について

- ・生活科学に即した各自の研究テーマができない。

これは日頃から問題意識を持って物事を見る習慣がないためであろう。

- ・テーマを深く掘り下げることができない。

どのように仮説を立て、研究計画や活動計画を立てるかの訓練ができていない。

したがってテーマを考えさせるとタイトルだけを提出し、仮説や問題点は本からの引用という状態で研究へと発展しない。

(2) 卒業研究への準備の指導

そこで、いくつかの改善策を考えた。卒業研究の具体的な指導法は、その性格上、担当教員にまかされるので、プレ卒業研究指導として所属ゼミナール決定までの指導に重点を置くことにした。

①配属の決定

学生番号による配分をなくして、なるべく学生の希望する仲間と同一のゼミナールに

所属できるようにし、一方、孤立する学生をなくすために、複数者によるグループを作らせ、グループごとに統一テーマを設けさせる。そのテーマと人数を考慮して担当教員を決定する。このことにより、気のあった仲間と卒業研究ができ、教員側からもあまり担当学生数の差ができなくて済んでいる。現在のところ、いくつかの理由により生活科学専攻では、学生がテーマにより指導教官を選ぶまでには至っていないことが今後の課題である。

② 研究テーマの設定

研究テーマの選択については、現在まで次の3段階を経ている。

I. テーマのみ事前決定

2回生になってから、各人のテーマ決定がスムーズにいかず、5月中旬ぐらいにやっとタイトルのみ決定という状態が続いたので、事前（春期休暇中）に考えさせることにしたが、タイトルのみしか考えなかった。

II. テーマ決定のための作業プリント

仮説や研究計画を書かせるためのレイアウトを作成して事前に記入させ、4月に提出させることにしたが記入できていない者が多かった。怠けのためもあるが、どのように記入してよいか分からないという理由も見られた。

III. テーマの解釈や深めるための指導

そこで、基礎演習（生活科学演習Ⅰ）でテーマの解釈を指導目標に入れると共に、テーマ決定までの指導をシステム化して全教員があたることになった。

③ 現在の指導の状況

卒業研究開始までに学生が行なうことの流れを図5-13に示す。

（図5-13 プレ卒業研究指導の流れ図）

学生はまず共通の関心を持つ仲間を決定し、テーマ調査用紙を（表5-5）をアドバイザー（指導教官）に提出する。ここでアドバイザーのチェックを受けるので、一応紙面が埋まる。

（表5-5 テーマ調査用紙の項目（B5判））

次にテーマ指導教官が決定すると、2月中までに研究計画書（表5-6）を作成するための指導を受ける。

（表5-6 研究計画書（B4判2枚半））

このことにより、もしテーマとして適当でない場合は、卒業研究が始まる前に変更可能であり、4月からすぐに卒業研究がスタートできることとなった。

（3）まとめ

プレ卒業研究としてのテーマの解釈指導を行なって、少しは学生の取り組み状況は改善

できたが、依然として所属ゼミナール内のグループはいくつかに分かれている。また、授業以外での内容や手法の指導は、時間的にもシステムのにも限界があるので、特に内容的な面は、徐々に基礎演習に移行する予定である。

さらに、卒業研究全体を再考して、表5-7のようなコースを選択できればと考えている。

(表5-7 卒業研究の各コース)

表5-4 生活科学演習Ⅱの概要

【授業内容】

生活科学演習Ⅰが考え方や手法の習得が中心であったのに対して、本演習では、テーマの選び方と何が証明されたかなどの、あなたの研究過程や研究成果も問われる。

したがって、自分でテーマを見つけ解釈して研究を実行し、まとめるといった総合的な学習が中心となる。

【授業計画】

① テーマ

演習が開始されるまでに、学生諸姉が具体的なテーマを見つけ、問題意識を持っていること。

② 研究のプロセス

仮説→解釈→手順・日程→実行・検証→考察→まとめ→表現（レポート、発表等）

③ 研究の方法

- ・ テーマはあくまでも自分達で考える。
- ・ 担当教員は研究の指針を与えたり、相談にのるといった助言者としての指導の要素が強い。指示を待つのではなく、積極的に指導を受けて欲しい。

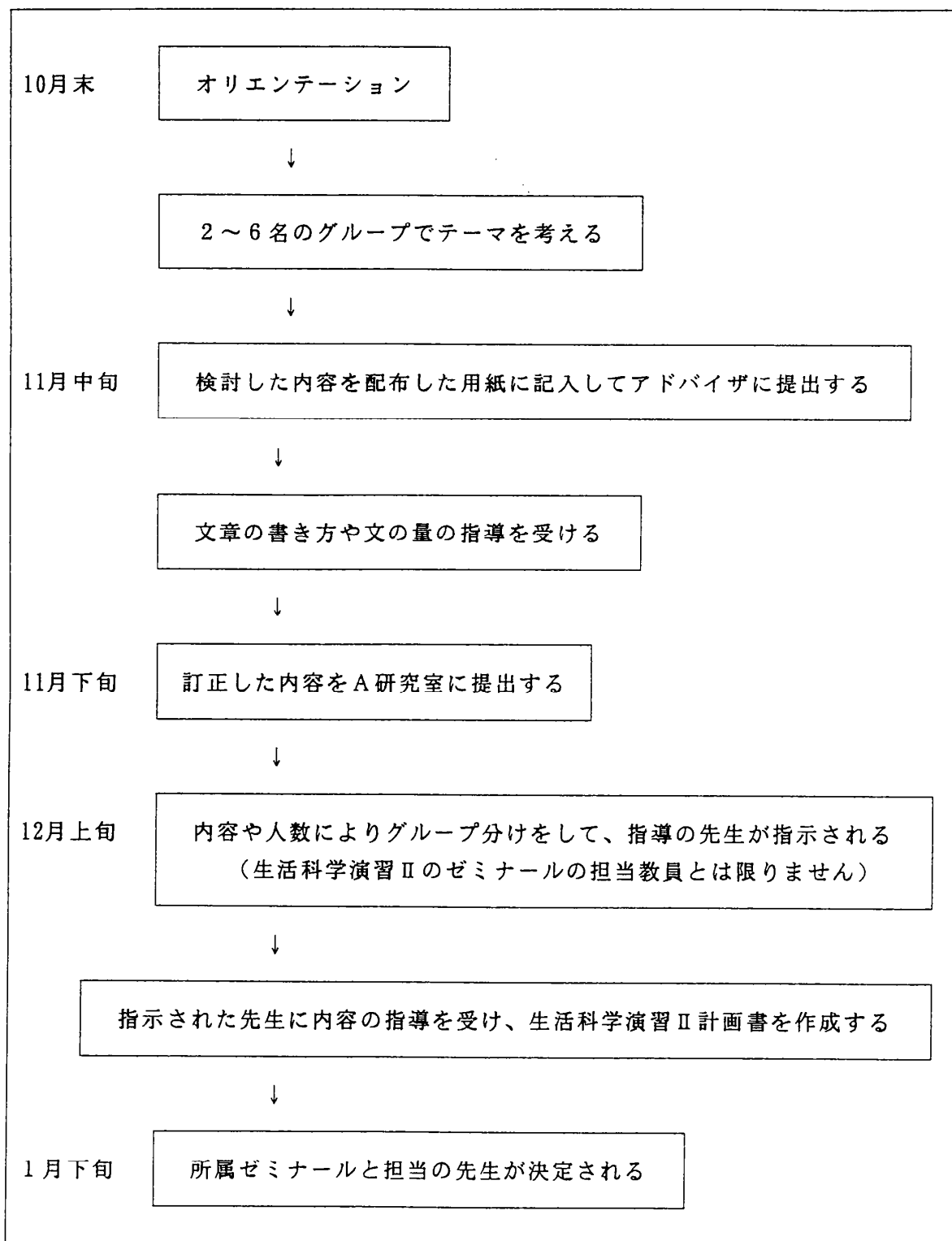


図 5 - 1 3 プレ卒業研究指導の流れ図

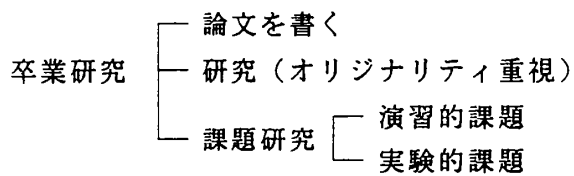
表 5 - 5 テーマ調査用紙の項目 (B 5 判)

- ・ テーマ
- ・ テーマの説明
- ・ テーマを選んだ理由
- ・ メンバー氏名

表 5 - 6 研究計画書 (B 4 判 2 枚半)

- ・ テーマ
- ・ テーマの説明
- ・ そのテーマに関心を持った理由
- ・ 結果の予測
- ・ 研究の組み立て
- ・ 研究日程
- ・ 参考書リスト (内 3 冊は概要)
- ・ ミーティング記録

表 5 - 7 卒業研究の各コース



5. 10 大学におけるプレ卒業研究教育の例

これはOD大学における卒業研究についてのガイダンス教育の実施例である。工学部経営工学科では、3年生の5月に約80%の学生が卒業研究室を決める。残りの約20%の学生も、12月頃までにはほぼ研究室を決める。もちろん卒業研究の予約であって、受け入れ側である教員と3年生の希望者側との合意が前提である。

卒業研究の指導を引き受ける教員の研究室は、経営工学科に12研究室、工学部共通のセンタ（総合教育を担当する教員が所属する2つのセンタ）の研究室が約10研究室あって、どの研究テーマを選ぶかという選択にはかなりの自由度がある。受け入れ人数は5～6名から20名位の幅がある。

3年生の受け入れを決めた研究室では、4年生（現役の卒業研究生）が3年生（卒業研究予約学生）に卒業研究の手ほどきをする。筆者の研究室（以下、石桁研と記す）でも、大学院生が全体の指揮をとり、4年生が中心となって、3年生の卒業研究予約学生の訓練を早ければ6月頃より行なう。訓練の内容は、きわめて多岐・多彩である。

次に石桁研の3年生に対する卒業研究のガイダンス教育について説明する。なお、この教育に「プレ卒業研究」と名付けているが、内容はすべて訓練である。

（1）心構えについての説明と理解

3年生は、大学入学以来ずっと同じ学年の者同士で、場所もほとんど教室という環境で、講義や実験や演習ばかりをやっているため、大学の研究室という環境での生活については、ほとんど何も知らないし、経験もない。そこでまず教えることは、卒業研究とは何かということであり、卒業研究の意義となぜ卒業研究をしなければならないかを分かり易く説明することである。さらに、どうしたら卒業を成し遂げられるかについても説明する。

OD大学工学部経営工学科では、卒業研究の合格条件として、次の3つが課せられている。

- ① 研究内容（研究のレベルや目標達成度や努力度などの総合）で、指導教員の合格（OK）を得ていること。
- ② 学科の決めた卒業研究発表会（毎年4年生の2月下旬）で発表していること。
- ③ 期日（毎年2月末日）までに卒業論文を指導教員のところに提出していること。

この3つの条件をよく説明し、逆算的に卒業研究のスケジュールを考えて、卒業研究活動は3年生の2月にある後期の定期試験の終了日（2月中旬）からスタートし、4年生の12月の下旬で終了することとしている。しかし、たいていは4年生の2月までかかっている。

次に研究室のメンバーの紹介である。3年生は講義などで指導教員のことはよく知っているが、研究室の大学院生や4年生のことは少ししか知らない。また共同研究をするために石桁研に来る大学内外の研究者や、客員研究員についてはほとんど知らない。それゆえ互いに紹介をし合う。

研究室には、コンピュータやパソコン通信やデータベースやLANなどの情報機器のハードウェアがある。また、プログラムやデータや歴代の卒業論文や専門書や学会の雑誌や研究資料などのソフトウェアもある。さらにこれらのハードウェアやソフトウェアを使い

こなすための知恵としてのユースウェアもある。

そこで4年生は、3年生にそれらの所在を示し、各自に確認させたり、使用上の注意を与えたり、研究室でのしきたりを教えたりして、研究室での自主的な学習活動に適応できるように指導する。

中でも大切なことは、「ほうれんそう」の実行である。「ほう」は報告の略で、何事につけてもまず報告をすることを徹底する。「れん」は連絡の略で、連絡することの大切さを教える。「そう」は相談の略で、研究室の教授、大学院生、4年生、共同研究者に相談するくせをつけるようにする。

さらに、「研究室内のルールを守ること」、「約束を守ること」を徹底する。こうして信頼関係を確立するように指導する。

(2) 自己管理の態度を養う

研究室には、「やる気レコーダ」というパソコンを主体とした、自己管理用の一種のタイムレコーダが設置されていて、研究室に来るたびに、やる気、体調、気分、今日の研究の計画を5段階（最もよい=5、最も悪い=1）で入力できるようになっている。

また、研究室から帰るときにも同様に、やる気、体調、気分、今日の研究の計画達成度を入力できるようになっている。

このデータは、決して他人が見るのではない。自分が自分のデータを見て、自分の研究生活の反省をしながら、自己管理をするためのものである。やる気、体調、気分、その日の目標の把握度、その日の研究の達成度は、いずれも5段階で主観的に評価する方法を採っている。

自己管理は大学生が絶対的に学ぶべきことで、自主的に、自発的に、自由な発想で、能動的に卒業研究を行なうベースである。

(3) 取り組むテーマの設定のために先輩の研究の状況を把握する

石桁研では、卒業研究のテーマは継続的に設定している。すなわち前年度の卒業研究生が行なった研究テーマを、次年度の卒業研究生が引き継いで、前年度よりより深くテーマを探求する方式を採用している。これは卒業研究のレベルアップにつながる。

テーマを理解するには、今までに行なわれていた卒業研究の全テーマと、関連の研究資料に目を通すことである。さらに、4年生に研究の現状を聞き、解説してもらうことである。

(4) 自主学習

石桁研は、教育工学を研究している研究グループであるので、研究室の中に教育工学を取り入れた自己学習環境を整えつつある。次に研究室に準備してある自己学習用の教材や教具の紹介をする。

○録音テープのライブラリ

いろいろな講演を直接録音したもの、ラジオ放送の講演を録音したもの、テレビ放送の音声部分を録音したもの、筆者が学外で行ってきた講演を録音したものなどのカセットテープを、自由に貸し出し、学習できるようにしたライブラリである。

○ 8ミリ・ビデオテープのライブラリ

8ミリ・ビデオカメラで、講義や演習やセミナーなどを撮影してきたテープを、自由に貸し出せるようにし、学習できるようにしたライブラリである。

○ VHSテープのライブラリ

テレビ放送を直接録画したもの、上記の8ミリ・ビデオテープを変換したもの、企業などから寄贈を受けたものなどのVHSテープを自由に貸し出せるようにし、学習できるようにしたライブラリである。

○ CALとコースウェアのライブラリ

CAL (Computer Assisted Learning) は、パソコン本体とCAIのコースウェアと呼ばれるソフトで構成される。ソフトはフロッピィで管理し、いつでも研究室のパソコンを使用して勉強できる。コースウェアには、企業から寄贈を受けたもの、学外の研究者からテスト用にと頂いたもの、研究室のOBが自作したもの、他の研究室からコピーをもらったものなど、いろいろある。

○ データベース

研究室にあるいろいろな卒業研究に関するデータや資料などを、パソコンのデータベースに入力し、いつでも検索して利用できるようになっている。その他、契約して利用できる有料のもの、共同利用のセンタのものなど、必要に応じて利用している。

○ パソコン通信

研究室には、パソコン通信を可能にしている。これを利用することによって、研究上の情報を入手することができるので、使用方法を4年生から指導を受ける。

○ 卒業研究支援システム

研究室にあるパソコンには、卒業研究の仕方を支援するシステムが作られ、提供されている。おおよそ100のコースウェアがあって、研究報告書の書き方、関係のある研究会の紹介、電話のかけ方、FAXの使い方、ゼロックスの経済的使用法、静止画ビデオカメラの使い方、情報の読み方、3年生の指導の仕方などいろいろである。これらはすべてApple社のパソコンMacのハイパーカードで作られている。

(5) 自主勉強会

卒業研究では、パソコンをはじめとしていろいろな情報機器を利用しなければならない。特に石桁研では、Apple社のパソコンMacを使用して、教材の開発やシステムの開発や卒業研究の発表会でのDTPR (Desk Top Presentation) を行なう。

このMacの勉強会を4年生が主催して行なうことになっており、これに3年生は強制的に参加し、4年生が出題する課題を期限内に仕上げ報告書にして提出し、チェックを受けてパスしなければならない。

(6) プレ卒業研究発表会

上述のように本学では、毎年2月に4年生は卒業論文を提出し、その内容を発表しなければならないことになっている。当然3年生は全員この卒業研究発表会に出て、先輩達の研究状況をよく聞かねばならない。

また、3年生は毎年2月から卒業研究に取り組むので、4月始めまでにほぼ2回のプレ

卒業研究発表会で次のことを報告しなければならない。

- 4年生から引き継いだこと。
- 自分の研究テーマで把握した研究目的と研究目標
- 4年生から引き継いだ研究室の係の仕事内容
- 関係するテーマの研究資料とその所在
- 関係するテーマに必要なソフトウェアやコースウェアとその所在
- 研究室の鍵

(7) 研究会への出席と報告書作成

石研研は、学内外の研究者との交流がきわめて盛んである。そのいくつかを紹介すると、教育心理学研究会（本学で毎月1回、第4日曜日に開催され、主として大学の教員が参加し、教育の事実学を研究する会）、やる気研究会（本学で毎月1回、第3土曜日に開催され、産学協同で、企業人も教育者も参加し、社会人のやる気について研究する会）、情報処理教育研究会（「上級SE育成の研究会」であり、学外で毎月1回、第2火曜日に開催され、産学協同で、情報産業界と大学関係者が参加し、SEを育成する教育方法を研究する会）などがある。

学生達は、これらの研究会のいくつかに参加し、研究の様子を見聞きし、卒業研究の参考にする。参加した学生は当番で研究会の報告書を作成し、教員に提出する。

これらの研究会に参加されている関係者（学内外の研究者、企業人、OB、客員研究者など）は、毎年2月の卒業論文発表会に出席して、いろいろ批評や意見を述べてくれる。

(8) 研究室の仕事の分担

研究室を維持管理して行くためには、卒業研究生に多くの仕事を分担してもらわなければならない。そこで係を設けているので、それを紹介する。

- 会計と消耗品調達係
- ソフトウェア（プログラム）管理係
- パソコン通信係
- 研究室のOB（石研会）との連絡係
- 備品管理係
- 図書管理係
- データベース（商業用のものも含む）利用係
- 経営情報処理演習担当係
- 経営工学実験担当係
- 3年生指導係
- 渉外・連絡のマネージャ

この中の係で、特に教育と深く関係する係を具体的に説明し、ガイダンス教育との関係を説明しておきたい。

経営工学実験担当係とは、経営工学科の3年生の一部のコースの学生が受講する「経営工学実験」という科目を、指導教員と大学院生のTA（Teaching Assistant という大学院生の公的な指導補助者）について指導するという教育訓練を担当する者である。実験は

実験室で行なわれるが、そのときの実験の指導の補助、レポートのチェック、実験結果の報告を撮影した8ミリ・ビデオの評価などを受け持つ。これは将来、社会に出たとき部下を指導するガイダンス教育の一種であると考えられる。

経営情報処理演習担当係とは、経営工学科の3年生の一部のコースの学生が受講する「経営情報処理演習」という科目を担当するための係であって、経営工学実験とほぼ同じである。演習は、パソコンのある情報演習室で行なわれる。そこでパソコンの使い方や自作ソフトの使い方などを指導する。レポートのチェックも受け持つ。

(9) 自己学習の記録ノートと4年生によるチェック

上述の学習環境は、石術研に所属する学生なら誰でも使用できるようにしてあるが、3年生の卒業研究予定者が使用してくれなければ何にもならないので、4年生が3年生の利用ノートを定期的にチェックして、ガイダンス教育の実行を確実なものにしている。

5. 1.1 卒業前のガイダンス教育の例

これはOD大学のガイダンス教育の実施例である。工学部経営工学科の4年生に、卒業前のガイダンス教育として、前期配当の必修科目「経営工学特論」（2単位）を開講している。この科目の特徴は、前期の12～13週の間、産業界の第一線で活躍されている方々を、毎週人を変えてお迎えし、学生達に社会に出たときに役に立つ心構えや社会での仕事の仕方や今問題になっていることなどについての情報を、赤裸々に話してもらうという毎週読み切りの講演が中心である。

このような科目を設定したのは、社会経験の浅い学生達が大学を卒業して実社会に出たとき、少しでも社会に適応性をもってスタートしてもらいたいからであって、産業界の方々の話を聞くだけでもためになると考えたからである。

付録8にこの科目のガイダンスのときに配布したプリントの例を示す。プリントの内容から分かるように、この科目の評価は100%出席点であり、義務としては研究室単位で作成するレポートの提出のみであり、単位が認められないという学生は1人もいない。

（付録8 経営工学特論の配布プリントを参照）

出席・欠席の管理が面倒であるが、学生には毎回欠席届を提出させるように指導している。また、教員の側も事務幹事を決めて、その管理を徹底するようにしている。

授業を行なう教室は、AVC教室という視聴覚機器が完備した部屋を使用している。この教室での使用可能な機器としては、マイク、レーザー式ポインタ、8ミリ・ビデオ、VHSビデオ、スライド・プロジェクタ、OHP、静止画ビデオ、書写テレビ、パソコン、ワークステーションなどであって、これらの機器の出力が100インチの画面に投影される。また、4台のモニタ・ディスプレイが設置されている。

学生達の私語を禁じるために、座席指定とし、さらに1人おきに座らせるようにしている。学生にとっては、きわめて窮屈な授業の形態になっているので、講演の内容を魅力あるものにするよう、講師の方々には特にお願している。

産業界からみえる講演者は、経営工学科の教員が個別にお願いした方々で、講演当日は紹介者の教員も必ず陪席するようにしている。教員は学生達が講演者に失礼のないように、時間中はずっと目を配ることになる。

講演者は、筆者らの意向を十分くみ取ってくれて、その時々就職の状況や仕事上の問題解決事例や会社の裏情報などを赤裸々に話してくれるので、学生達は決して退屈しない。

講演が終わると、1週間以内に卒業研究で所属している研究室ごとに、講演に対する感想文を提出することになっている。これらの感想文は、まとめて講演者にプレゼントすることになっている。

この科目は、まさに卒業前の学生の社会に出るための心構えのガイダンス教育として最適なものになっていると思われる。

5. 1 2 指導教員制度によるガイダンス教育の例

これはK B短期大学における指導教員制度と専攻教員会議の併用による学生指導の例である。

(1) K B短期大学のシステム

① K B短期大学のアドバイザー制度

K B短期大学にはアドバイザーと呼ぶ指導教員制度がある。その概略は以下の通りである。

a. アドバイザ制度の流れ

一般教育所属の者を除いた専任教員が学生を数十名ずつ担当する。過去には専攻ごとにアドバイザー教員集団が指名され、学生はどの教員に対応しても良かったのであるが、現在は1回生は学生番号により均等割りして担当教員(アドバイザー)を決め、また2回生は卒業研究ゼミナール担当者がアドバイザーである。

b. アドバイザの役目

・ 欠席届

講義や行事を欠席すると欠席届を提出しなければならないが、それにはアドバイザーの印が必要である。この主旨は、欠席届用紙(アドバイザーの手元にある)をもらうときや捺印されたものを渡すときに、アドバイザーと会話をするることである。したがって、助手に印を押させることや事務的に印を押すことを避けるように言われている。

・ 個々の学生の受講時間割作成の相談

必修科目が登録できているか、その時点で単位数にゆとりがあるか、またシラバスに書かれている講義内容についての相談に応じる。

・ 担当学生との懇談(主に1回生対象に)

4月のオリエンテーションのときにアドバイザー単位で学生との懇談がある。

・ 退学者や休学者への対応

学生が退学や休学を正式に決める前に、アドバイザーが相談にのり指導する。

② K B短期大学の専攻教員会議

K B短期大学では、教員は各専攻単位に所属が決まっている。そして、全体の教員会議とは別に、月1回の専攻教員会議の時間が設けられている。(現在は第1水曜日)そこでは、事務連絡や専攻にかかわる審議や決定が行なわれる。他に臨時の会議も行なわれる。

(2) 家政学科生活科学専攻における取り組み

生活科学専攻では、アドバイザー制度と専攻会議を利用した学生指導を行なっている。

① 学生指導の特色

本学の学生指導に対する考え方も、他の短期大学と同様に自由放任主義と過保護主義に分かれている。すなわち大学生は大人であるから、各人の責任において自由にさせるべきであり干渉すべきでないという考えと、短期大学生はまだしっかりした考えを持

つ者も少なく、若い女性はまだまだあまり行動や時間を気ままにするべきでないという家庭が多いから、全員に対し模範的な規律を示すべきであるという考えである。しかし、生活科学専攻では、そのような一律指導の方針をやめて、自立できる学生には自由を与え、その分の労力を問題を抱えているやや未熟な学生に費やすという、きめ細かい指導方針をとっている。そのために専攻教員会議をベースに、学生についての情報交換を頻繁に行なっている。

② 学生指導の方法

a. オリエンテーション

入学時のオリエンテーションは、諸手続きを円滑に行なう事務行為でなく、学習のためのレディネス教育と位置づけ、「大学で学ぶとはどのような事か」、「生活科学専攻のカリキュラムの構成」などを話す。また随時、基礎演習の時間（詳細は5.4節、5.7節、5.9節参照）などを通じて同様の経過指導を行なう。

b. 対象学生のピックアップ

必修科目において試験の受験資格なしの可能性が生じた学生や、事務諸手続きの無断遅滞学生が出ると、専攻会議で他の場面ではどうか情報を収集する。他の場面でも重複して問題が生じている学生については、指導対処の方法とそのケースに適した担当者を決める。そして、指導結果について逐次情報交換を行なう。

③ 学生指導の事例

a. 学生としての自覚不足の例

必修科目、選択科目の軽重や資格科目との兼ね合いが分からない、諸手続きや試験などの手続きに期限のあることの自覚がない、また2回生時の卒業研究ゼミナールの希望票も出さないなどの行動をしている学生がいた。この学生については、専攻の全教員が常に尻をたたくことになり、また事務との連絡を密にしてどの場面でも常に目を行き届かせることにした。

b. 学校不適応の例

不本意入学による変なプライドを持っているために、短期大学での勉強を軽んじていたが、それが重なって必修科目が要注意になった。この学生については、専攻の主任が強く叱る役目、アドバイザーの年輩教員が優しくケアをしていく役目と分担して指導した結果、学生間では少し孤立しながらでも勉学を続けている。

④ 学生指導の結果

このような学生指導を行なった結果、過去の学生や他専攻に比較して、次のような改善点が見られた。

- ・退学者が少なくなった。（ゼロに近い）
- ・勉学意欲が生じて、演習など真剣に取り組むようになった。
- ・授業中の私語の減少など、学生としての規律が守れるようになった。
- ・諸手続きなどの際の事故が少なくなった。

5. 1.3 入学決定者に対するガイダンス教育の例

入学決定後から入学式までの期間に、学生（正確には入学予定者）指導を効果的に行なうことができれば、入学後に始まる正課の授業の展開にとっても有効である。また、最近では推薦入試が早期化しており、本来2月1日以降の入学試験時期に若干先駆けて実施されるべきものが、11月半ばに試験が実施されて、11月末には入学が決定してしまうケースが少なくない。この点は、現役受験生を送り出す高校側からも問題とされ、本来の高校の授業の支障となったり、生徒同志の勉学意欲に乱れを生じさせることになっている。そのため、高校側から入学が確定した生徒に対しての学習指導を大学側に求めたり、大学側が当該生徒に課題を出したり、スクーリングを企画したりと、外部からの批判を緩和するのに苦慮している。

筆者らが大学在学学生を対象に行なった「大学システムやラーニングスキルに関する理解度の調査」⁽¹⁾から推察すると、高校生は意外なほど大学システムやラーニングスキルを理解していないと思われる。例えば、ホームルームがないということ、選択科目と必修科目という区分、履修登録という行為、大学における授業の成り立ち、講義と演習・実習の違い、大学教員と事務職員の違い、ノートの取り方、試験の受け方、レポートの書き方と位置づけ、など大学関係者にとっては自明のことながら、実は高校生にとっては知らないことであったりするのである。

もちろんこのようなことがらは、入学後には感覚的、体験的に理解できて、その後、あまり不都合なく学生生活を過ごせるものであるとされるが、実際は自己流の解釈や風聞に基づいた学習方法であったりするために、途中で勉学意欲を喪失してしまったり、十分な勉学成果が上がらずに卒業してしまうのが実状であろう。大学で勉学した人材が付加価値を得ずに卒業してしまうという社会的な批判の根の一端は、入学前あるいは入学時のガイダンス教育の不備にあると考えるべきであろう。

MG短期大学では、入学前のガイダンス教育の1つの試みとして、大学システムの理解のために、入学が決定している学生に3月の時点で、パンフレットを送付している。そのパンフレットは「Forget me not」（キャンパスライフガイド）といい、入学式とオリエンテーションの案内、大学構内の説明、大学システムとしての授業の成り立ち、学生生活と厚生施設、その他事務的な情報からなっている。

特に、ガイダンス教育として、入学前に理解しておいて欲しい「授業の成り立ちと履修の心構え、学習活動と大学教員とのかかわり」をパンフレットに盛り込んだ。

その内容を以下に紹介する。

授業・単位・履修・教授

—大学にもクラスがある—

（本学）各学科にはA、B、C、…などのクラスがあります。各クラスでは担任と副担任が学生生活全般のアドバイスをしてくれます。でも、中学校や高等学校のように毎朝学生と担任がホームルームで顔を合わせるといったことはありません。そもそも本学にはホームルーム制度がありません。さらに、2年次になったらゼミナールや卒

業論文と卒業研究を指導してくれる先生が専門的な分野のアドバイザーとして加わります。

－授業を受けるのには決断が必要－

高校までは教室に座ってさえいれば先生がやってきて、必要な授業が次々に受けられました。でも大学では学生が授業が行なわれる場所に行かなければなりません。大学では学生が能動的にならないと授業が受けられないということです。大学は知識を得たいと思う人たちが自発的に集うところだからです。でも、授業を受けたいという意志表示はしなければなりません。授業を受けたいという意志を大学と担当の先生に表明する行為を履修登録と言います。

－単位をもらうのは難しい？－

大学の各授業には単位という数字があてられています。この数字はその授業内容を習得するのに要する学習時間などに応じて定められています。単位はその授業の試験に合格すると認定されます。試験はペーパーテスト、レポート、論文、口頭試問、発表、実技など、その授業内容にとって最も効果的な方法で行なわれます。授業中の質問や授業への貢献度を加味する先生もいます。試験がすべてではありません。

担当教員は、その授業の始めにその授業の受講要領、勉学の仕方、試験の方法などについて説明するはずですが、欠席は原則として認めないなどという教員もいますからその授業のやり方を知ることは重要です。

学生諸君は担当教員の教授スタイルごとに学び方を理解して適応しなければならないのですから単位を取得するのは大変ですね。

－大学の先生ってどんな人？－

大学の先生の仕事は主に3つあります。1つ目は、学生の教育と指導、つまり授業をすること、クラブ活動の援助、オフィスアワーを持つなどです。2つ目は、大学の運営をすることです。大学の学習環境や将来像の検討、カリキュラムの検討などを行っています。ほとんどの先生が～係、～主任、～委員といった仕事を複数こなしています。3つ目の仕事は研究です。大学の先生は研究者と言われます。それぞれ固有の専門研究分野を持っていて、学生諸君が休み期間でも研究活動をしています。大学の先生は深く専門を研究しながら専門分野の視点で人生や社会を見ている人と言えます。大学とはそのような人と邂逅して自分を磨く場所と思って下さい。

これが、入学決定者に送られる授業などの案内である。入学直後、新入生が授業に臨むときに知っておいて欲しい基本的事項の要点が述べられている。

このような時期に大学が学生に情報を流す理由は、入学前の大学からの書類には、かなりの関心と注意を寄せるであろうという期待からである。

参考文献

- (1) 矢内・中村他、「短大におけるガイダンス教育（１）～（３）」、日本教育工学会第 8 回大会講演論文集、1992年。

5. 1 4 職員によるガイダンス教育の例－教務・学生部など事務窓口を通じて－

これはK B 短期大学において、教務・学生部などで学生と直接に対応する事務部門が、学生の質問に答えながら、ガイダンス教育を行なった例である。

(1) 短期大学であること

短期大学に進学してくる学生は、将来研究者をめざすほど学問的な関心を持っていない。さらに、出身高校や身の回りの環境もあまり大学についての話題がないと言える。

そこで、大学における勉学や学習は高校の延長的なイメージで大学に入学してくる。しかも短期大学では、時間割の選択の余地が少なく、開講の都合上、クラス（学生番号により分けられたグループ）単位で行動しなければならないことが多く、ますます高校のイメージとオーバーラップする。（高校と違うのは、ホームルームがなく、講義の空き時間が少しあるくらい。）つまり研究室は準備室や職員室的なイメージであり、指導教員は、高校で言うもう少し放任主義的な担任といった感じである。⁽¹⁾

したがって、学生というより生徒といった感覚を持っており、そのような学生に大学についての知識を伝達するのは、直接学生と接触しなければならない事務職員の役目となる。

(2) K B 短期大学の事務の特色

K B 短期大学の事務局組織は図5-14の通りであり、図中の※印が学生と対応する部門である。

(図5-14 K B 短期大学の事務局)

K B 短期大学の事務室は、教務部、学生部、総務部が1つのフロアにまとまっている。このため学生との接触が壁を隔てた窓口という形ではなく、各事務員の机の横(カウンタ)に座って話すことができるなどの構造的な理由からか、研究室などへの適応の少ない、特に入学時期の学生が、高校時代の職員室に入る感覚で、学生生活での疑問点などを自由に入室して質問している。

そして事務窓口や係長・課長も一体となってそれらの質問に対応し、内容によっては学生相談室において面談を行なっている。

(図5-15 K B 短期大学事務室の配置図)

(3) ガイダンス教育の内容

①履修登録時

K B 短期大学の履修登録は、1～2回生の前期後期ともに各専攻の各学年単位に場所（教室）と時間を指定して行ない、その後、一定の期間内に数回の変更と確認を学生各自で行なう。学生はオリエンテーションを行なった事務担当者や、登録変更のために訪れた窓口での担当者に次のような質問を行なうことが多く、職員は教育指導的相談にもものることがある。

a. 履修のための知識について（1回生が多い）

- ・単位認定のしくみ
- ・各専攻のカリキュラムの意味
- ・講義、演習、実験（実習）の違い
- ・卒業単位、資格単位の違い
- ・登録変更の意味と必要性など

相談されることについては、学生との接触などから考えると、教員の説明よりも影響力があり、職員の助言で資格取得を決めることもあったりしてその責任は重大である。

b. 授業を受けること

- ・教科書、参考書などの位置づけ
- ・成績評価の方法がいろいろあること

c. 教員との接触について

- ・研究室の存在と意味
- ・大学教員の仕事（教育と研究）

教員は常に学内にいるものではないなど

②試験について

- ・試験欠席（病欠、事故など）の場合の対処方法と追試験について
- ・試験の形態、特に論述形式の試験に対して、教員の中には「論述形式」と言うだけで詳しく説明しない者もあり不安が多い。そこで、具体的形態や論述の展開の仕方など答案の書き方も事務窓口にご相談に来る。（中には、教員が自分に質問に来るようになっていても、その教員に対しての自分の印象が悪くなるのではという不安を持つ学生もいる。）

③人生相談的

アルバイトや下宿についての相談に訪れた学生が、そこから発展してボーイフレンドの悩みや、家庭の問題（両親の離婚）などを打ち明け相談することもある。

（４）まとめ

事務室が1つのフロアにまとまっている利点を生かして、教務・学生部と仕事を割り切らずに、他の窓口の用件で訪れた学生を近くの席の職員が一体となって対応しており、学生と職員が非常に親密である。このことは、学生と職員のコンパが行なわれたり、男性職員にはファン（？）がいるなどからも言えるのではないだろうか。むしろ一部の教員と学生の間よりは親密であるかもしれない。

参考文献

- (1) 池田勝枝他、「短大におけるガイダンス教育（3）－カレッジ・インフォメーション調査の結果－」、日本教育工学会第8回大会講演論文集、1992年。

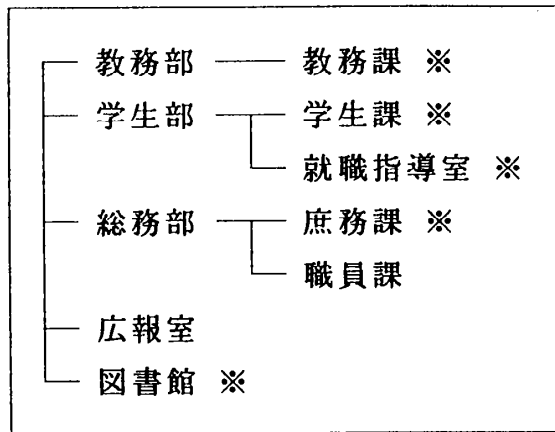


図 5 - 1 4 K B 短期大学の事務局

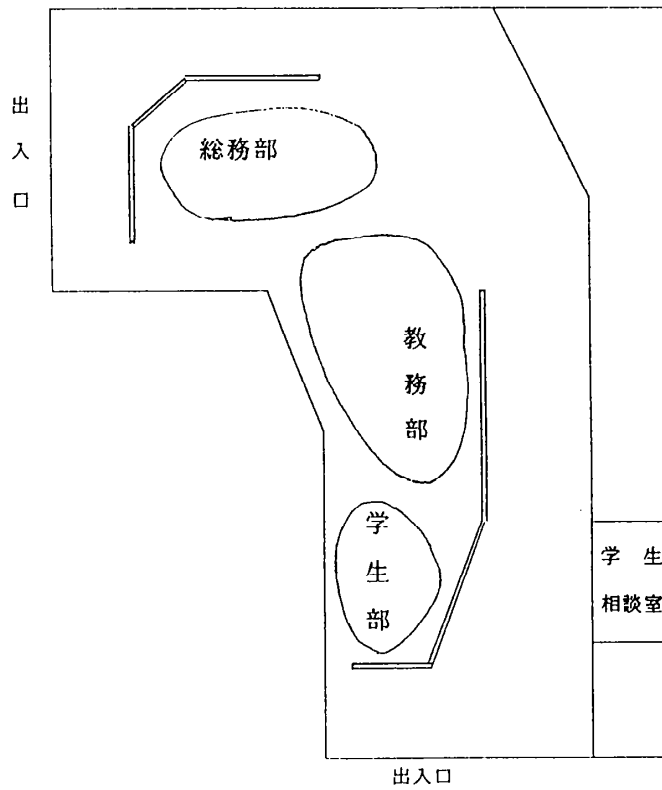


図 5 - 1 5 K B 短期大学事務室の配置図

6. ガイダンス教育の研究的展開

6. 1 概念構築のためのグループ研究

(1) 研究経過

筆者らの研究会では、学生の勉強などの意欲向上のために、高等教育機関での教育について会員個々に研究や実践を行なってきた。

OD大学・OD大学短期大学部のグループでは、1979年頃から学生の勉学のやる気の問題を扱い、その研究成果を踏まえて、学生自身が自分のPI（パーソナル・アイデンティティ）を確立するための方法等の提案を行なってきた。これらは、コンピュータ支援によるガイダンス教育の情報収集（ツールの開発や環境の整備も含む）とその効果についての研究と位置づけられる。まず「大学生の自己管理のためのガイダンス」としては、自己の学習意欲（やる気）の調査、やる気レコーダによる自己管理のための体調や気分や目標などの記録入力とそのデータの分析がある。「卒業研生活のためのガイダンス」としては、卒業研究支援情報の提供とそれを利用した卒業研究がある。そして、「学生の自己理解としてのPIの確立のためのガイダンス」では、5つの調査（価値観調査、やる気タイプ調査、気質調査、YG性格検査、VPI職業興味検査）がある。これらの結果からガイダンス情報を収集し、コンピュータに移植して、コンピュータを活用したガイダンス教育の実現に努めている。

また1985年頃から大学教員に教授法の改善を求める立場と、学生の学習態度を指摘する立場からの論争が起こって、授業中の私語や授業の面白さなどの問題として話題になった。そこで、MG短期大学とKB短期大学の共同研究で、大学における行動規範（プロトコル）の欠如（教育側と学習者側のギャップ）を明らかにする目的で、1992年に学生の実態調査を行なった。その結果、これまでの教授法の工夫により改善しようとするだけではプロトコル・ギャップは広がるばかりであり、学習方法の観点を導入すると、学習者側にも原因があることが明らかになった。特に学習技術（ラーニングスキル）が学生に欠如していることが分かったのである。

これに基づき、MG短期大学では1991年に出された大学設置基準の改正による一般教育の改組に伴って、新設の「読書と思索」という科目の中でガイダンス教育を行なっている。また、KB短期大学では既存科目の「生活科学演習I」で実行している。

以上のようなグループが、「学生が学生であるための準備」すなわち「ガイダンス教育」を構築する目的で、研究組織として、1993年より活動を開始した。その研究報告の経緯を表6-1に示す。

（表6-1 ガイダンス教育にかかわる研究発表の経緯）

筆者らがめざす高等教育（大学教育）におけるガイダンス教育の内容は、学生としての意識を持たせる、大学についての知識を与える、ラーニングスキルを身につけさせるの3つの柱である（3章参照）。これからも分かるように、ガイダンス教育の実践は、知識形成を主目的にしてきた大学カリキュラムに対して、人間形成と知識形成の両面に配慮した

複線型カリキュラムの提案でもある。

また研究の方向として筆者らは、理論化の中でガイダンス教育の概念構築とガイダンス教育の大学教育における位置づけなどの目的論などを扱うとともに、教育としての実践の方法などのデザインを構築することが必要であるという認識に至った。

そして研究を帰納的実践的研究から、演繹的体系的な研究へ進める上で、ガイダンス教育の概念構築が必要になった。そこで概念のネットワークを表現する方法として「概念チャート図」を用いることにした。

(2) ガイダンス教育の概念チャート図

① 概念チャート図とは

概念チャート図は、概念と概念の関係を矢印で結び、概念間の関連性を表す図である。すなわち概念ネットワークを表す図である。その図では必要概念や十分概念などの構造が一目で理解できる。概念チャート図を用いる利点としては、概念の整理ができること、概念を分類できること、視点のチェックができること、概念形成の流れを示すなどがあるため、特定の概念の内部状態を客観的に解析できる便利な手段であると言える。つまり、概念チャート図を作成することによって、現在、自身がどの場面のどの場所に位置しているか明確になり、さらにこれから何をなすべきかが理解できるのである。

概念チャート図を作成する準備段階として、特定概念から他の概念を見た視点図、また、他から特定概念を見た視座図を作成し、あらゆる場面を想定して、特定概念に対して概念の関係を網羅して行く。

そこで、ガイダンス教育の概念チャート図を描き、現在までの研究実践などについての全体的な構想を再確認し、現状を整理した。

② ガイダンス教育の全体像

一般的に、ガイダンス教育の概念は初等・中等・高等教育、社会人教育、生涯教育など、様々な場面が考えられるが、現在、筆者らの研究グループは、大学におけるガイダンス教育を対象としている。図6-1はガイダンス教育の全体像である。大学におけるガイダンス教育の下位概念としてガイダンス教育の枠組み、研究、実行が考えられる。

(図 6 - 1 ガイダンス教育の全体像)

研究を始めた頃は、プロトコル・ギャップとPI (パーソナル・アイデンティティ) に関するものであった。研究を進めていくうちに、だんだんと上位概念の研究を行なうようになってきた。そして、概念整理を行なうと同時に、また下位概念についての研究にも取り組んでいる。

③ ガイダンス教育の枠組み

図6-2にガイダンス教育の枠組みの概念チャート図を示す。この下位概念には、

ガイダンス教育の成立条件の枠組みおよびガイダンス教育の理論的枠組みが考えられる。ガイダンス教育の成立条件は社会的背景が大きな要因となっている。また、筆者らの研究の中心であるガイダンス教育の内容（意識、知識、ラーニングスキルの訓練の3つの柱）は、理論的枠組みの下位概念である内容論に位置している。

実際に、表6-1に示した「短大におけるガイダンス教育の研究(1)～(3)」の研究は、概念チャート図の成立条件の枠組みの下位概念の学校社会的背景に位置づけられる。

(図6-2 ガイダンス教育の枠組み)

④ガイダンス教育の研究

図6-3にガイダンス教育の研究の概念チャート図を示す。この下位概念には、ガイダンス教育の分野、目標、体制、活動、成果、将来像が考えられる。表6-1に示した筆者らのこれまでの研究成果についてその位置づけを整理すると、「大学におけるガイダンス教育(4)」(基礎演習の内容・目的による分類の報告: 87大学・短期大学の講義要覧、シラバスをもとに分析)の研究は、下位概念の分野-実践的-実践例に位置づけられる。「ガイダンス教育の展開(1)」(コンピュータ支援による教育の試み)の研究は、下位概念の体制-支援-システムに位置づけられる。「ガイダンス教育の展開(2)」(ガイダンス教育のためのビデオ映像の効果)の研究は、下位概念の分野-理論的-方法論と、体制-支援-システムと、成果-アピール-ソフト提供に位置づけられる。また一連の「学生のPIの確立のための研究」は、下位概念の分野-実践的、体制-支援-環境、体制-組織-協同研究などに位置づけられる。

(図6-3 ガイダンス教育の研究)

⑤ガイダンス教育の実行

図6-4にガイダンス教育の実行の概念チャート図を示す。この下位概念には、目標、評価、対象、時期、方法、場面、技術、主体などが考えられる。この概念チャート図は、ガイダンス教育を実行する上で必ず検討しておかなければならない視点を整理したものである。

例えば就職ガイダンスの実行を計画する場合、目標が意識の喚起にあるのか、知識の授与にあるのかでは、実施方法や内容が異なる。また、授業として出席をとるのか、任意参加なのかによっても実施する側の準備や参加者の心構えも異なってくる。さらに、実施時期や対象者を明確にしておかなければ、期待する効果は得られない。3.2節で示したガイダンス教育の標準的カリキュラムは、これらの視点の内、時期と場面を考慮して構成したものである。

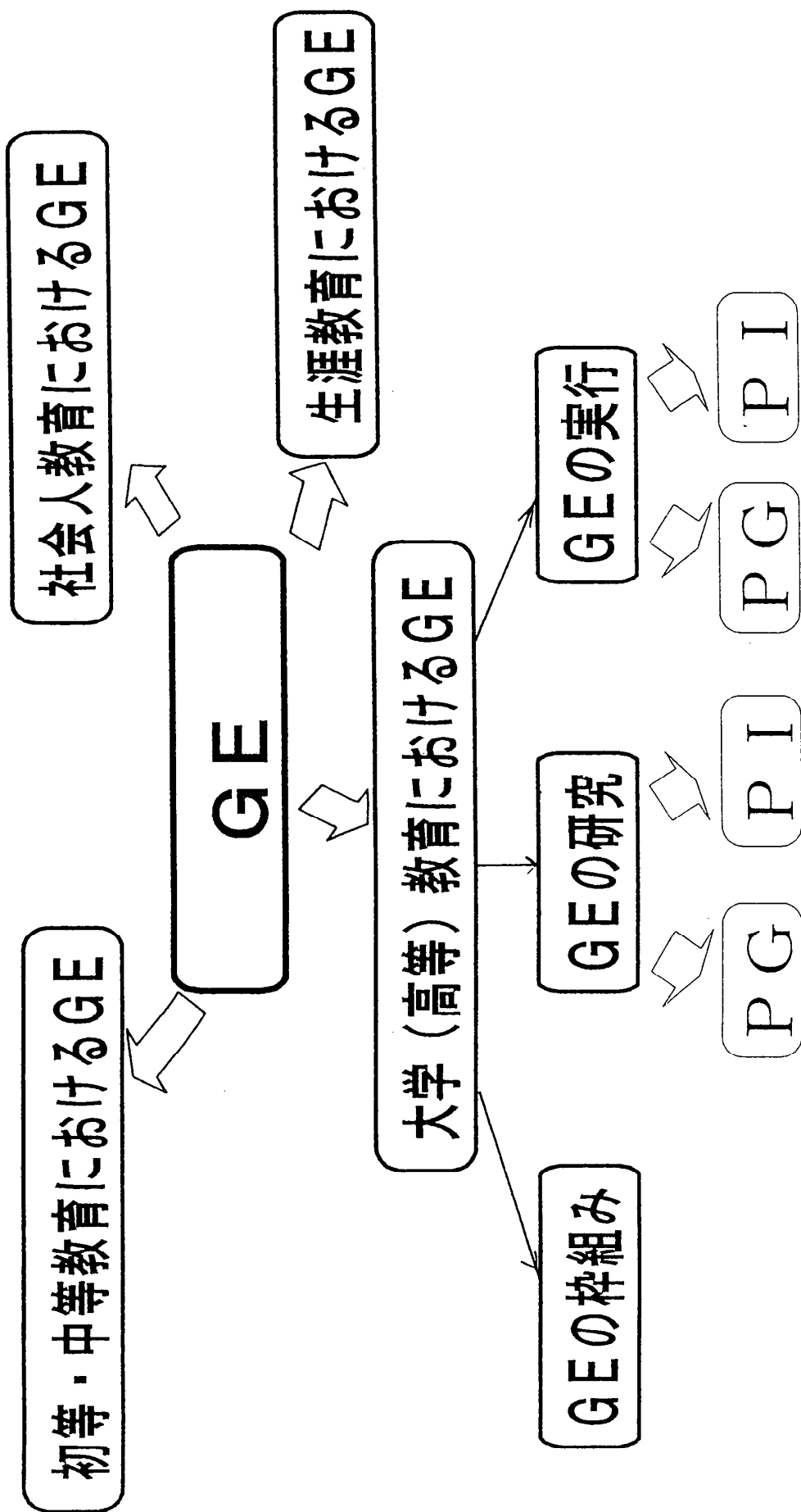
この標準カリキュラムを具体的に実施するには、さらに他の視点から検討を加えるのは言うまでもない。

(図6-4 ガイダンス教育の実行)

表 6 - 1 ガイダンス教育にかかわる研究発表の経緯

1992	教育社会学会第44回大会	「学習者としての大学生に必要なプロトコル」中村他 内容：レディネス調査から明らかになったプロトコル・ギャップの報告
	教育工学会第8回大会	「短大におけるガイダンス教育(1)」矢内他 内容：レディネスとしてのガイダンス教育の必要性とその内容の報告
		「短大におけるガイダンス教育(2)」秋尾他 内容：現状（レディネス）調査方法の報告
		「短大におけるガイダンス教育(3)」池田他 内容：レディネス調査結果の報告
		「学生の P I (パーソナル・アイデンティティ) 確立のための研究(3)」岩崎他 内容：自己調査による学生自身の自己認識の報告
1993	教育社会学会第45回大会	「学習ガイダンス教育としての基礎演習のあり方」中村他 内容：学習の態度を身につけてプロトコル・ギャップを埋めることの報告
	教育工学会第9回大会	「大学におけるガイダンス教育(4)」矢内他 内容：基礎演習の内容・目的による分類の報告 (87大学・短大の講義要覧、シラバスをもとに分析)
		「大学におけるガイダンス教育(5)」秋尾他 内容：短大における基礎演習のカリキュラムの報告
		「学生の P I (パーソナル・アイデンティティ) 確立のための研究(4)」岩崎他 内容：P I 確立に重要な自己認識の報告
	京都文教短期大学研究紀要	「大学におけるガイダンス教育とその研究」中村他 内容：ガイダンス教育の概略の整理と文教短大での実践の関係の報告

- 大阪電気通信大学研究論集 「学生のP I (パーソナル・アイデンティティ)確立のための研究(1)」石桁他
内容：P I 確立の過程の実態報告
- 1994 教育社会学会第46回大会 「学生が高等教育に適応するための準備教育」中村他
内容：ガイダンス教育の理念と展開の枠組みの報告
- 電子情報通信学会教育工学研究会 「ガイダンス教育の展開(1)」石桁他
内容：コンピュータ支援による教育の試みの報告
- 「ガイダンス教育の展開(2)」中村他
内容：ガイダンス教育のためのビデオ映像の効果の報告
- 教育工学会研究会 「ガイダンス教育の展開(3)」中村他
内容：ガイダンス教育の考え方と実践の方法の報告
- 文部省科学研究費補助金報告書 「コンピュータを利用した学生のパーソナル・アイデンティティ確立指導法の研究」(03680253)石桁他
内容：高等教育機関の学生が自己のパーソナル・アイデンティティを確立する場合、コンピュータの支援を受けて自分の力でやりぬく指導法についての研究成果の報告
- 教育工学関連学協会連合第4回大会 「ガイダンス教育の展開(4)」池田他
内容：概念チャート図による総観的解釈の報告
- 「ガイダンス教育の展開(5)」秋尾他
内容：ビデオによるガイダンス教育のアピール実践の報告
- 大阪電気通信大学研究論集 「学生のP I (パーソナル・アイデンティティ)確立のための研究(2)」石桁他
内容：P I 確立のための自分史調査の報告



GE：ガイダンス教育
 PG：プロトコル・ギャップ
 PI：パーソナル・アイデンティティ

図6-1 ガイダンス教育の全体像

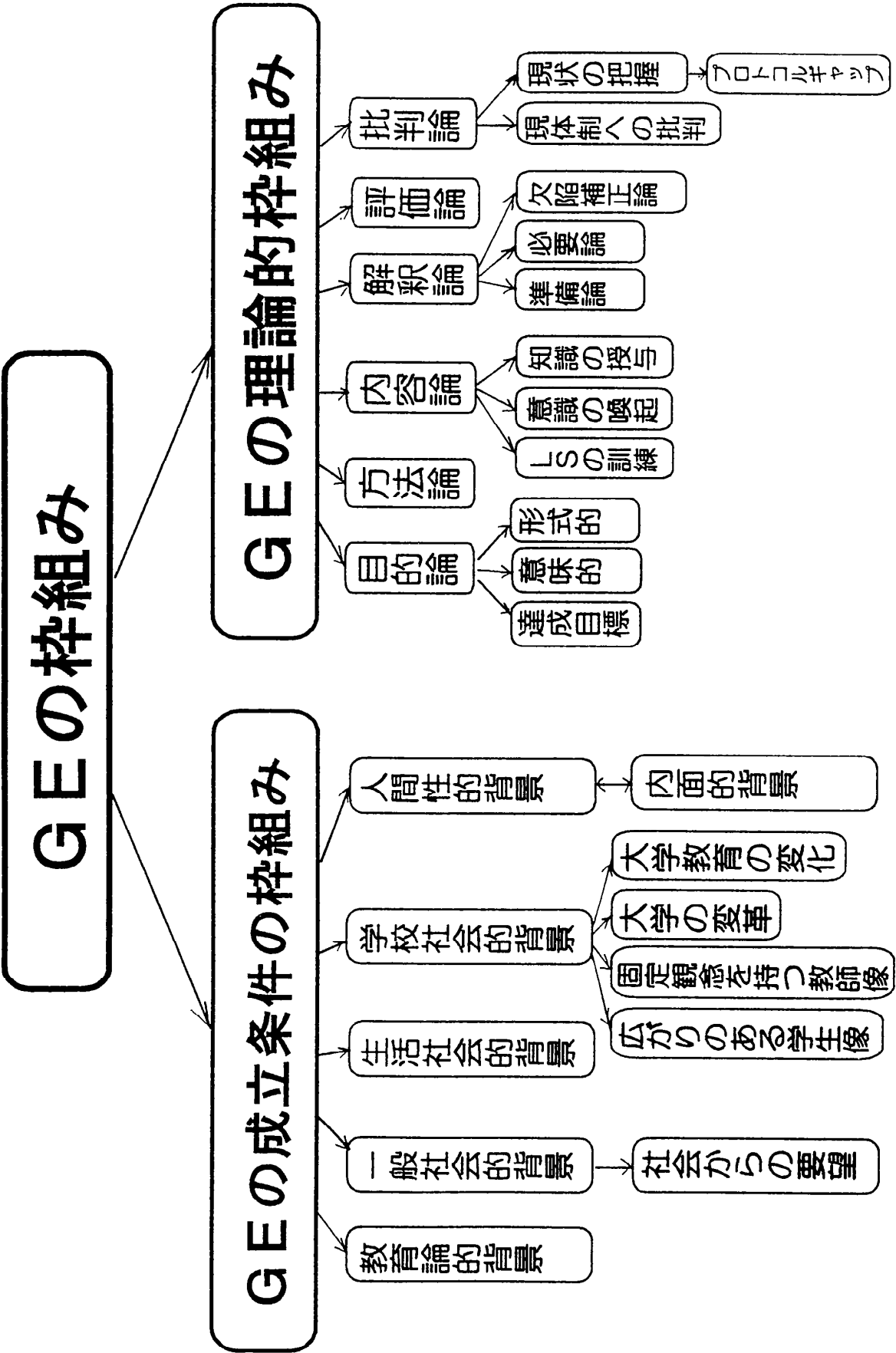
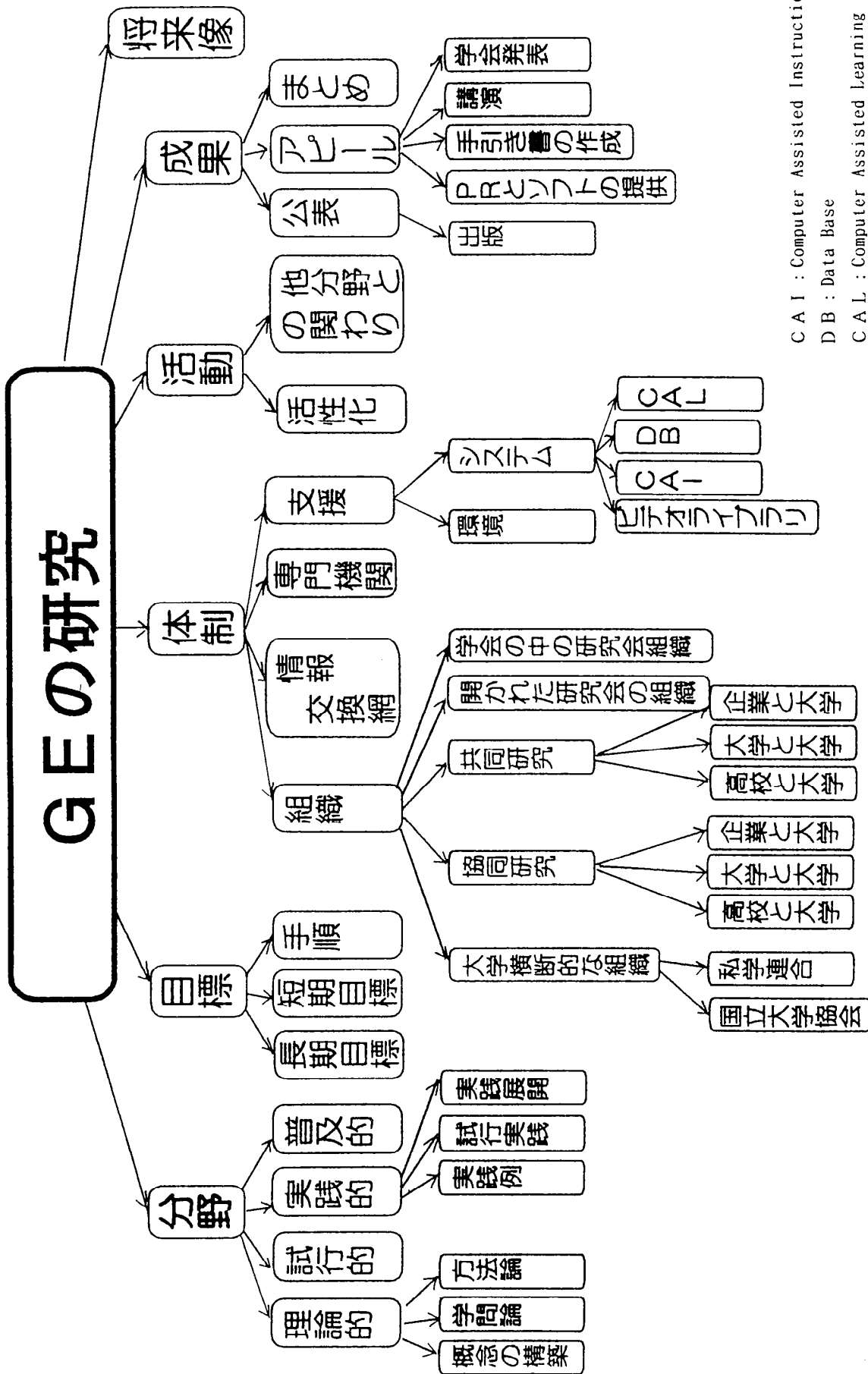


図6-2 ガイダンス教育の枠組み



CAI : Computer Assisted Instruction
 DB : Data Base
 CAI : Computer Assisted Learning

図6-3 ガイダンス教育の研究

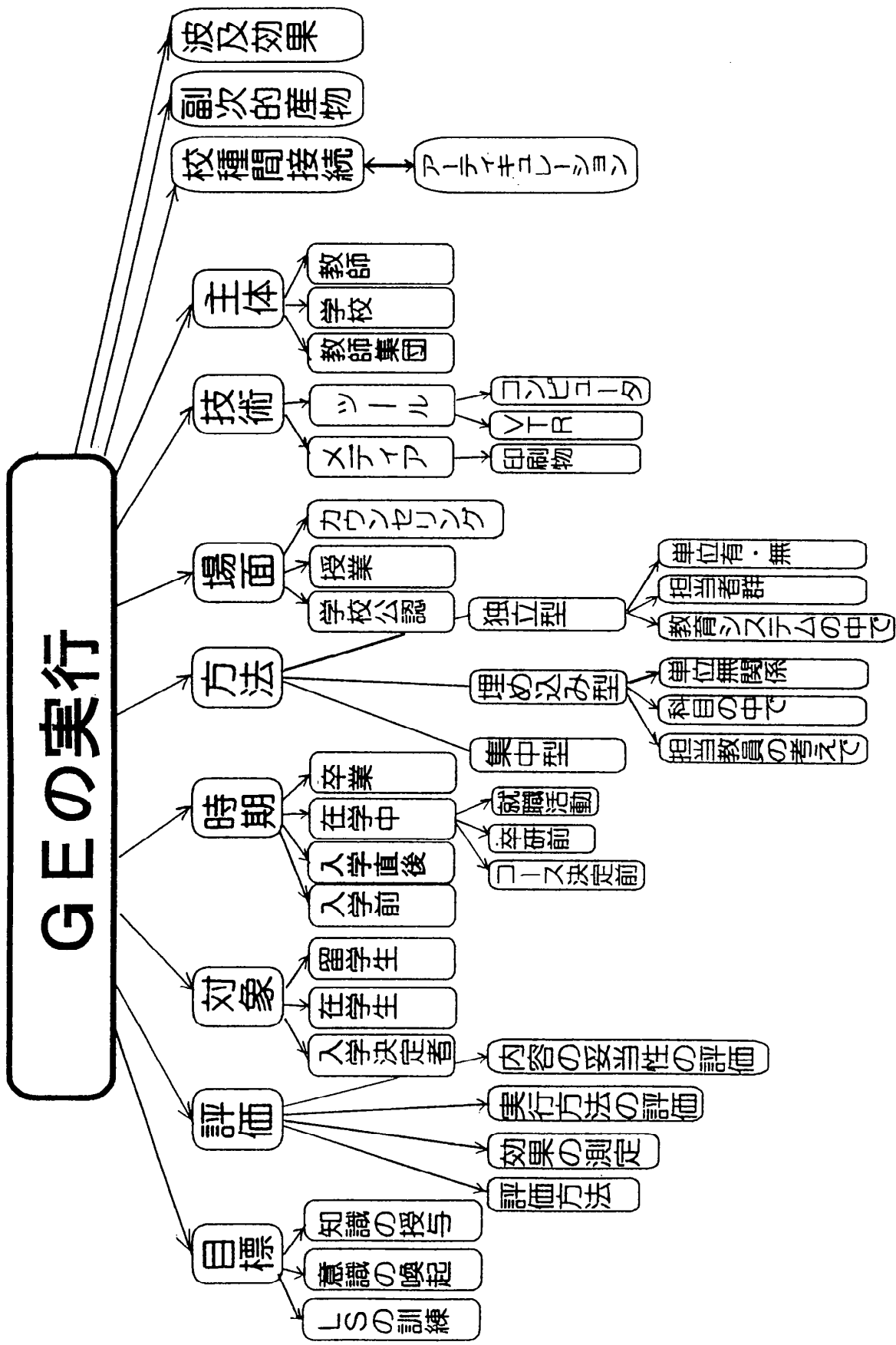


図6-4 ガイダンス教育の実行

6. 2 ビデオを用いた実践教育の研究

ガイダンス教育の目的には、大学生としての意識、知識、ラーニングスキルがあり、その実施時期や対象も多様である。しかもガイダンス教育という性質上、文書による指導は困難であり、口頭による指導も時間や場所や場面の確保ができにくい。それをビデオ映像で提供できれば効果的である。さらに取材したビデオ映像をガイダンス教育の資料として用いるばかりでなく、編集して研究用に、ガイダンス教育の教材用に、ガイダンス教育の紹介用など様々な目的に用いることができる。以下に、これらを目的としたビデオ映像の種類と内容を検討した。

(1) ガイダンス教育のビデオ映像の種類

筆者らは、ガイダンス教育の研究や実践にビデオ映像の特色を有効に生かすことができると考える。すなわち記録や取材したビデオ映像を目的別に編集して、用途別のテープを提供するのである。

まず、ビデオ映像の特性をとらえ、そして種類について考察した。

①メディアとしてのビデオ映像の特性

視聴覚メディアの特性や教育への利用の効果については、すでに多く語られている。

⁽¹⁾ また、ビデオを含めた映像についても研究はなされてきている。⁽²⁾ その中でガイダンス教育として利用する場合の特性は4つあると考えられる。

1. 生の情報の提供
2. 鏡的利用やモデリングとして
3. 情報量の豊富さ
4. 技術習得に有効

②ガイダンス教育の研究やそれに関連した内容

a. 研究の手だてとして

筆者らの行なう研究には、通常、実験や調査などの実証部分が含まれる。しかし、ガイダンス教育の研究では、それらは一部分の役割しかない。レクチャーによる研究では事例収集的や概念的分析に終わり易いが、ビデオ映像を取材・収集し、それをもとに編集や分析をすることによって、散漫になり易い論点や視点を明確にすることができる。

個々の大学で行なわれている（行なわれた）事例について分析して、その部分を取り出して分類するとき、ビデオ映像をもとに授業分析の手法を用いて分類を行なう。また、ガイダンス教育の3本柱（意識、知識、ラーニングスキル）の要素ごとに編集した映像や、基礎演習・課題演習・教養演習といったテーマ別に編集した映像を作成することは、実践に提供するばかりでなく研究にも役立つ。

b. 授業としてのガイダンス教育の映像

ガイダンス教育を授業として行なった場合の授業分析の対象や、また図6-5に示す授業改善の研究の記録として利用する。（後述の(3)実践例参照）

（図6-5 授業改善のサイクル）

c. 意見収集のための資料として

ガイダンス教育の普及や研究への協力を依頼する場合にも、映像資料の方が相手の理解が深まる。対象としては教員用（依頼する当事者用、一般教員用）、事務職員用、管理者用などが考えられる。

③ガイダンス教育の実践用

a. 研修や学習用の資料・教材として

1. 教員が研修用として使用する

大学教育の改革の一環として大学院生がTA（ティーチング・アシスタント）として採用されている。例えば、TAが配置される科目は、新入生セミナー、演習、実験などである。そしてこのTA制度の先進国であるアメリカでは、新入生セミナーを担当する大学院生に対して、TAとして実際に授業の場面に臨む前の訓練プログラム「TAセミナー」が実施されている。表6-2にTAセミナーのテーマ例を示す。

（表6-2 TAセミナーのテーマの例）

新入生セミナーの内容はまさにガイダンス教育の内のラーニングスキルの訓練であり、TAセミナーがその指導者のための研修である。このTAセミナーなるものは、大学教員にも必要であるというのが筆者らの考えである。このことは、大学教員が自己の経験と判断の範囲で教育を行なっているスタイルはすでに過去のものであり、新入生の学習スタイルに合わなくなっている実状を踏まえた上での提案であり、大学教員にも意識改革（発想の転換）を要求しているわけである。しかしながら、日本の現状では、大学教員に「TAセミナー」のような訓練を実施することはまだまだ困難である。したがって、イメージとしてのTAセミナーを映像ライブラリーによって構成することを考えた。場面や目的に応じたテーマごとの指導例や指導方法の映像をプールし、貸出やコピーとして提供する方法が良いと考えられる。

2. 学生が学習用として利用する

学生がガイダンス教育のビデオ映像を利用するには次の場合が考えられる。

7. 自学自習用（個別学習）

イ. グループ学習用

ウ. 教材として利用

3. スキル別の教材・事例集

スキル別のノウハウや事例の記録を中心とした映像で、学生用のラーニングスキル教材だけでなく、教員用のノウハウ集も考えられる。

7. 学生用

- ・ゼミの発表の仕方
- ・プレゼンテーションの技術
- ・図書館の活用（手続きではなく活用の仕方など）
- ・大学の授業（受講態度）

- ・グループ討議（ブレンストーミング、KJ法など）

イ. 教員用

- ・出席の取り方（特に大人数の場合のコツ）
- ・私語への対応の方法
- ・講義の進め方(1)(レクチャーの方法、マイク、板書、・・・)
- ・講義の進め方(2)(流れ、学生の関心、・・・)
- ・シラバスと講義内容

ビ. 「学生とガイダンス教育のかかわり」用

現在の大学生は、以前のように「大学」に対するイメージやレディネスもなければ必要性も感じていない者が多数であると言える。このような学生にとって、ガイダンス教育は「新しい教育」であると言える。

1. モデリングテープ用としての活用

これはマイクロティーチングの実施サイクルの中でのモデリングと同様の発想である。⁽³⁾ さらに、大学に入学の決まった高校生に対して入学前のプレ・エデュケーションとして、ビデオ映像は有効であると考えられる。

2. ゆさぶり用やヒヤリング用としての活用

ガイダンス教育の内容に対して、学生はいろいろなイメージや意見を持っていると考えられる。その意見をデータ化して、事前に対応の方法などを考えることは必要である。そのためにビデオ映像を利用する。これは学生のイメージのゆさぶり用や学生の意見のヒヤリング用としての活用である。

ビ. 大学外へのアピール

ガイダンス教育の対象は学生や教職員などの大学関係者であるが、ビデオ映像は学外へのアピールとしても活用できる。

- ・進学説明（大学ガイダンス）
- ・学生募集（本学の宣伝）
- ・企業対策（就職のための売り込み）

(2) ガイダンス教育のビデオ映像の流れ

ここでは、システムとビデオ映像の流れについて触れる。

① ビデオ映像の流れとストック

ビデオ映像を扱うのは、図6-6に示したように個人レベルと学校レベル（グループを含む）が考えられる。また、図中のサービス機関とは、具体的な場所ではなく、例えば研究グループのような不定形な形態を考えている。そしてビデオ映像の編集は、個人レベルでは負担増加を考慮して、必要性もあまりないので原則として行なわない。またビデオ映像（テープ）の流れ（提供や交換）は、階層的に行なわれるだけでなく、個人-機関、個人-他校などあらゆることが考えられる。

(図6-6 ビデオ映像の流れのイメージ)

②ビデオ映像の段階と活用

ビデオ映像には、記録したままの素材映像と何らかの目的を持って編集した映像があり、また、自者の映像と他者の映像がある。その各々と主な用途を分類したものを表6-3に示す。

(表6-3 ビデオ映像活用の例)

③ビデオ映像の素材テープ

編集されたビデオ映像については、時間や手間をかけることが可能であるし、必要でもある。しかし素材として記録される映像は、多く集めるためにはなるべく労力をかけない方がよい。必要な最小限のデータとしての保存を考える。

a. 記録映像の種類

・実践記録

実践と同時に記録される映像で、担当者が固定カメラで録画するものやそれが発展したイメージ。

・取材記録

他者が意図を持って記録する映像で同一校内や他校での記録がある。目的には研究や研修用、実践記録の収集などが考えられる。

・編集制作用映像

ある目的を持ったビデオ映像を制作するための素材である。ロケーション的な撮影や、ロールプレイング的な映像を作ること考えられる。

b. 素材テープの属性

素材テープには、図6-7に示すようなカードをつける。しかし、テープそのものにはテロップを入れるなどの手間は省く。

(図6-7 素材テープの属性カード)

c. 素材テープの流れ

記録された素材テープは図6-8に示すような流れで利用される。

(図6-8 素材テープの流れ)

(3) ビデオ映像を用いたガイダンス教育の実践例

①事例1 (基礎演習の映像)

MG短期大学では「読書と思索」という科目名で1年生必修の基礎演習が行なわれる。これは教員が各自で選んだ名著を通じて、「発表の仕方」、「討論の仕方」、「文献の調べ方」、「レポートのまとめ方」など大学での学習について指導するもので、原則として専任教員全員が担当する。⁽⁴⁾ 演習では、ゼミ発表の結果をビデオに撮影し、それらを学生に見せて、発表内容や方法などを評価させ、発表技術について学習させ

る。ここでは、メディアを活用して工夫したスタイルと、初心者が陥り易い棒読みスタイルの2つの異なった発表スタイルを第三者の学生に評価させることで、映像を見せて動機付けを行なうだけでなく、評価することによる学習効果を狙っている。評価項目は、以下の通りである。

1. 発表者の事前の準備(3項目)
2. 発表の仕方(5項目)
3. 他の学生の反応(2項目)
4. 発表者とのゼミ学生との質疑応答のやりとりについて
5. 教員との関係について(3項目)
6. 授業の目的に関する達成度(4項目)
7. 2つのスタイルの発表に参加してのメリット/デメリット(自由記述)
8. その他の感想(自由記述)
9. あなたの考える理想の大学の授業とは(自由記述)

②事例2(プレ・エデュケーションの映像)

OD大学では、学園の系列高校においてプレ・エデュケーションとして、大学教員が数学や物理について、および専門的学問のデザインについて話す機会がある。そこで「大学とは」のガイダンスを行なった。一般に高校生は大学について、入試に合格することを考えても、その先についてのイメージを形成することは少ない。まして内部進学を考えている生徒にとっては、余計に大学は遠い存在かもしれない。そのような生徒に大学生として必要な心構えを理解させる目的のガイダンスである。この様子をビデオ映像に納め、以後の機会にも利用できるものとした。

参考文献

- (1) 東京書籍研究開発室編、『教育メディアの原点と未来』、東京書籍、1991年など。
- (2) 植条則夫編著、『映像学原理』、ミネルヴァ書房、1990年など。
- (3) D・アレン、K・ライアン著、笹本・川合訳、『マイクロティーチング』、共同出版、1975年。
- (4) 中村・矢内・石桁他、「大学におけるガイダンス教育(5)」、日本教育工学会第9回大会講演論文集、1993年。

表 6 - 2 TA セミナーのテーマ例 (アメリカの大学)

討論の指導 レポートや試験の出題の仕方 レポートや試験の採点・評価	講義について シラバスの作り方について 研究計画の指導
---	-----------------------------------

表 6 - 3 ビデオ映像活用の例

	素材テープ		編集済テープ	
個人レベル	(自分のもの) モデリング 鏡的利用	(他者のもの) モデリング 学習・研修	モデリング 教材 学習・研修	
学校レベル	(自校のもの) 評価・改善 編集用素材	(他校のもの) 資料 改革 編集用素材	(自校のもの) モデリング 各種アピール	(他校のもの) モデリング 教材・研修
サービス機 関レベル	研究・分析用 各校・個人に提供(了解必要)		アピール用 各段階に提供 研究報告用	

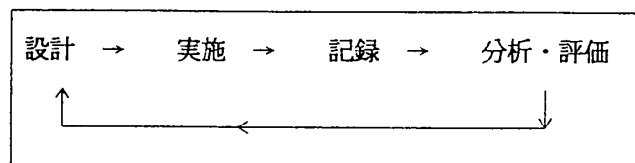


図 6 - 5 授業改善のサイクル

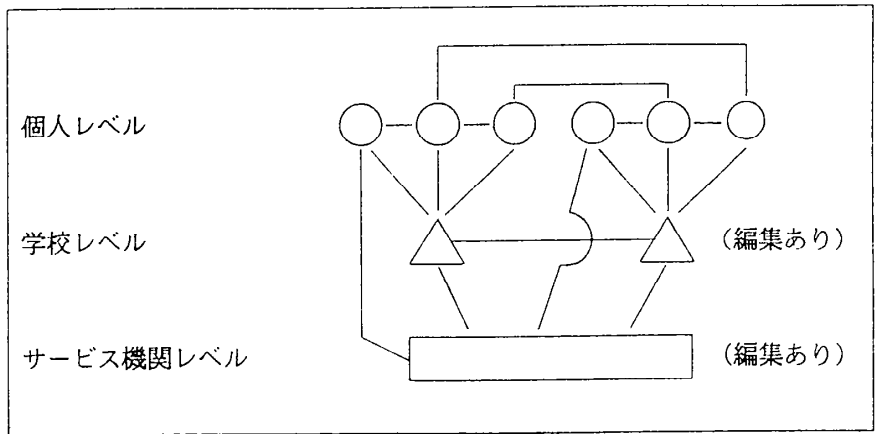


図 6 - 6 ビデオ映像の流れのイメージ

タイトル			
年	月	日	所要時間 分
種類	講義・演習・オリエンテーション・その他 ()		
コーディネータ (レクチャーなど)			
担当者 (係・記録者)			
ガイダンス教育の内容 (○印)	意識	知識	スキル
キーワード {	}		
内容概略			
コメント			

図 6 - 7 素材テープの属性カード

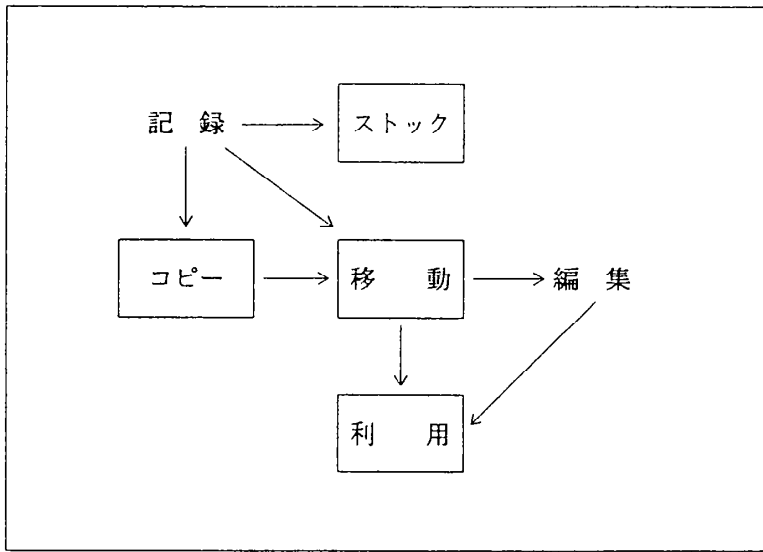


図6-8 素材テープの流れ

6. 3 研究会組織による研究の活性化

筆者らは、ガイダンス教育ができるだけ多くの大学・短期大学（以下、大学と記す）で取り組まれるようになることを望んでいる。そのためには、多くの大学関係者と情報交換しながら、背景や理論的な問題、具体的なテーマの実践など幅広い視点からの活動が不可欠だと考えている。すなわち、横断的な組織としての研究会組織の必要性を感じている。

ガイダンス教育の研究に取り組む上での視点についてブレインストーミングした結果を表6-4に示す。筆者らは、これらの概念と項目を概念チャート図に結び付けて、研究の位置づけを整理しながら活性化に努めようと考えている。それらの内容については、表6-1に示した研究発表の「ガイダンス教育の展開(4)」(概念チャート図による総観的解釈)で報告する。

表6-4 概念とその項目

(1) ガイダンス教育の背景 学生像 18才人口の減少 教師像 ガイダンス教育のための教師教育 大学当局のサポート FDとの関連	(2) 執筆とプレゼンテーション 出版物(本、論文・・・) 手引き書(学生用) 手引き書(教師用) PRとソフトの提供 学会発表 メインの学会 講演
(3) ガイダンス教育の支援システム ガイダンス教育の支援システム CAI CAL ビデオライブラリ DB	(4) ガイダンス教育の場面 高等教育でのガイダンス教育 大学教育でのガイダンス教育 中等教育でのガイダンス教育 企業内教育のガイダンス教育 社会人教育でのガイダンス教育
(5) 関係者の達成観(感) ガイダンス教育研究者の満足度 実践者の満足度 学生の満足度 関係者の満足度 ガイダンス教育のノウハウの提供	(6) ガイダンス教育のニーズ 変化する学生像 社会からの要望 大学の変革 大学行政の変化 校種接続(アティキュレーション)
(7) ガイダンス教育の実践 ガイダンス教育の実践例 ガイダンス教育の試行実践	(8) ガイダンス教育の評価 ガイダンス教育の効果測定 付加価値

ガイダンス教育の実践展開

(9) ガイダンス教育の理論

ガイダンス教育の概念構築
ガイダンス教育の方法論
ガイダンス教育の方法論の提供
ガイダンス教育の学問論
ガイダンス教育の実践論

(10) 研究資金

科学研究費による活動
研究活動のスポンサー
印税による研究資金

(11) ガイダンス教育の研究組織

協同研究（高校と大学）
協同研究（企業と大学）
協同研究（大学と大学）
共同研究（高校と大学）
共同研究（企業と大学）
共同研究（大学と大学）
大学横断的な組織
私学連合
学会の中の研究会の組織
開かれた研究会組織
国立大学協会

7. あとがき

7. 1 筆者らの研究の現状

筆者らの研究の現状は、ガイダンス教育研究会を結成し、会員同士の討論や試行的実践教育をビデオカメラを用いて情報の交換などを行ないながら、ガイダンス教育の必要性、教育の内容、教育の方法、実践の方法などについて、部分部分のまとめや学会発表をするところまで来ている。

研究の現段階で、筆者らが一番主張したいことは、従来の大学教育の考え方を継承しつつ、かつ新しく判明したことを包含させて、「ガイダンス教育」という1つの教育体系を作り上げて行くことである。

筆者らの考えは、これからの大学教育として欠くことのできない3本柱、①専門教育、②総合教育、③ガイダンス教育の3つを充実させることである。

①の専門教育は、専門知識の理解、専門分野の概念の把握、専門分野の学問の構造の把握、専門技術の習得、専攻した分野で将来専門者として認知されるのに必要な態度の養成、将来専門者として必要な習慣の形成などをめざすものである。

②の総合教育は、人間形成を目標としてきた一般教育を継承して、リベラルアーツ（学術・技芸といった古い枠で捉えるのではなく、知的好奇心を持ち続けたり、現代人としての知的向上心を身につけたり、自己学習力を持ったりすること）とジェネラリティ（一般化する能力を持つこと）に関心を持ち、文化の継承や諸学問の広範な理解をめざすものである。

③ガイダンス教育は、教育の連続性を考慮して、学生達が大学という教育の場で不適応を起こさないように、学生達に先手先手とガイドして行くために設ける教育の柱で、高校を修了した若者が初めて体験する大学生活に必要な情報や知識を授与し、大学生らしい心構えを育成し、ラーニングスキルを習得させるなど、「意識」、「知識」、「スキル」の3つをめざすものであるが、さらに学生が進むべき社会へ出たときに必要とする情報や知識や心構えなども教授することを含めなければならないであろう。

筆者らの研究は、③のガイダンス教育を、大学教育の中に正しく位置づけ、その具体的展開をして行くことである。目下、研究は試行錯誤的段階であるが、徐々にかつ着実に実践に移されつつある。

7. 2 今後の研究の目標

筆者らは年間数回、東京、京都、大阪で、研究会を開催しているが、その打ち合せの中で、今後の研究の目標を、「短期的なもの」と「長期的なもの」とに分けて設定している。

(1) 短期的目標

①多くの大学の現状を把握すること。

それは大学で考えられているガイダンス教育のカリキュラムや大学独自に行なわれている個別の教育実践を、調査を通じてその実態を把握することである。

②大学基準協会で把握している教育実践のデータを入手し、その中のガイダンス教育の部分を分析することである。

③概念構造の構築

ガイダンス教育は、その考え方が今までの教育の考え方と異なる点が多い。したがって、このガイダンス教育という概念の構造を明確にして、考え方を確立して行くことである。

④大学教育における3つの付加価値について再検討すること。

すなわち、人間形成教育で身につける人間的価値とは何か、専門教育で身につける学問性とは何か、基礎教育で身につける共通基礎学力やラーニングスキルとは何か、の3つをさらに検討しなければならない。

⑤ガイダンス教育の3本柱をさらに検討すること。

大学生としての「意識」を持たせる教育の方法、大学という存在体や大学という組織について理解させ、その「知識」を持たせる指導方法、「ラーニングスキルという基盤能力」や基礎学力の構造の検討などを行なわねばならない。

⑥既存の学会のこの方面への取り組みに関する動向調査を行なうこと。

教育に関心のあるいろいろな学会、あるいは協会に協力を求めて、調査に答えてもらい、その動向を把握する。

(2) 長期的目標

長期の研究目標を次に示す。

⑦ガイダンス教育の「教授プロセス」とその分析をすること。

⑧ガイダンス教育の中での学習者の学習プロセスを明らかにすること。

⑨ガイダンス教育のさらに具体的なカリキュラムや、個々の大学の目的に応じたカリキュラムの提案をすること。

⑩大学向けのガイダンス教育の設計を行なうこと。

⑪カリキュラムの背後に隠れているガイダンス教育が浮き彫りになるようなカリキュラム分析法を検討すること。

⑫ガイダンス教育についてのデータベース(DB)作りを行なうこと。

⑬ガイダンス教育について国際比較を行なうこと。

7. 3 研究会について

名 称：ガイダンス教育研究会（略称GE研）

事 務 局：〒611 京都府宇治市槇島町千足80

京都文教短期大学家政学科中村研究室

幹事代表：京都文教短期大学助教授 中村博幸

研究会の開催：東京、京都、大阪で、毎年数回行なっている。

会 員：ガイダンス教育に関心のある方なら歓迎です。

運 営：幹事制をとっている。

会 費：現在はなし。

参考文献

- (1) 矢内秋生他、「短大におけるガイダンス教育（１）」、日本教育工学会第8回大会講演論文集、1992年。
- (2) 中村博幸他、「短大におけるガイダンス教育（２）」、日本教育工学会第8回大会講演論文集、1992年。
- (3) 矢内秋生他、「短大におけるガイダンス教同（３）」、日本教育工学会第8回大会講演論文集、1992年。
- (4) 矢内秋生他、「大学におけるガイダンス教育（４）」、日本教育工学会第9回大会講演論文集、1993年。
- (5) 秋尾保子他、「短大におけるガイダンス教育（５）」、日本教育工学会第9回大会講演論文集、1993年。
- (6) 石桁正士他、「ガイダンス教育の展開（１）」、電子情報通信学会研究技法 E T 93-1 29、1994年。
- (7) 中村博幸他、「ガイダンス教育の展開（２）」、電子情報通信学会研究技法 E T 93-1 30、1994年。
- (8) 中村博幸他、「学習者としての大学生に必要なプロトコル」、日本教育社会学会第44回大会講演論文集、1992年。
- (9) 中村博幸他、「学習ガイダンス教育としての基礎演習のあり方」、日本教育社会学会第45回大会講演論文集、1993年。
- (10) 中村博幸他、「ガイダンス教育の展開（３）」、日本教育工学会研究会、J E T 94-4、1994年。
- (11) 中村博幸他、「大学におけるガイダンス教育とその研究」、京都文教短期大学研究紀要、第32集、P85-P99、1993年。
- (12) 一般教育学会「第16回大会発表要旨集録」、1994年6月4～5日、名古屋大学情報文化学部。

付 録

経営工学科 講義 「計測情報論I」
ガイダンス資料 (1994.4.)

情報心理学研究室 教授 石行正士

G. 合格率は毎年50%以下です。自主レポートはかなり有効です。
H. 情報処理技術者試験に合格している人は、最終成績に反映させますから合格証書のコピーを提出しなさい。

4. 勉強のポイント

- A. 教科書を事前にさっと目を通すこと。
- B. 教科書は何度も何度も読むこと。
- C. 友達と過去問題を見て、一緒に考える勉強方法をする事。
- D. 計算は実際に関電電卓を使って自分でやってみること。
- E. ノートを作るより、教科書に書き込みなさい。
- F. 教科書の研究課題は友達と一緒にやってみること。

5. その他

- A. 教科書について(必ず入手し、試験に持ち込むこと。)
・石桁、田中共著 「基礎計測と情報(増補改訂版)」 パワー社。
- B. 参考書について(図書館で見ること。)
・鈴木義一著 「データ解析術」 実教出版。
・野呂 影勇著 「官能検査入門」 日本規格協会。
・船戸 弘著 「イメージの心理学」 潮書房。
・小泉器盛監著 「単位の起源事典」 東京書籍。

6. おすすめしたいこと

国家が認定する資格のひとつとして「情報処理技術者1種、2種」の試験があります。在学中にこの資格を取得しておくことは、あなたの一生にとって大変有利です。大学1年生として、まず2種の取得をめざしなさい。寝屋川学舎のB206室の横山先生の所にこの試験の情報があります。見に行くこと。毎年、10月と4月に試験が実施されます。納谷嘉信先生の講義、「IE概論1・2」を受講していると、この試験に大変役に立つという評判ですよ。
寝屋川学舎の通用門の近くに「砂時計」という喫茶店があります。そこに私が過去に出した試験の問題がありますので、希望者は見に行ってください。

1. 講義の内容

- A. 計測の原理、測定、同量対応、単位、国際単位系、計測の目的とは。
- B. 物理量の計測、次元(L, M, T, θ, A, ...)、尺度構成とは。
- C. 感覚量・心理量の計測、ウェーバー・ヘビナーの法則、やる気の満り方。
- D. 計測後の処理、統計的処理の初歩、代表値、回帰直線など。
- E. 関電電卓の使い方、LOG、EXP、SIN、arctanなど。
- F. 2進数と数表現、コンピュータの仮数部、指数部、基数など。
- G. 情報の量、bit, Byte, KB, MB, GBなど。

2. 講義の特徴

- A. 高校レベルから大学レベルへと順を追って分かりやすく説明します。
- B. 選択必修科目ですので、出席は自由とします。(出席点はなし。)
- C. 毎回ビデオを、時々パソコンのソフトを見せるつもりです。
- D. 期末には定期試験を行います。関電電卓は持ち込むこと。
- E. 夏休みに、自分史またはやる気のレポートを出題します。
- F. 講義の最終日に、やる気の調査用紙の回収をします。必提出。

3. 受講上の注意

- A. 私語を禁じます。受講態度の悪い人には警告キップを渡し、教室から出て行ってもらいます。(その上、最終成績を20%カットします。)
- B. 第1回目の講義の時、やる気調査用紙を配布します。必受取。
- C. やる気のある人だけ受講して下さい。やらん気人間おこわり。
- D. 自主レポート提出者は加点し、義務レポート不提出者は減点します。
- E. こつこつ努力する人を高く評価します。要領のよい人は有利です。
- F. 分らないところは質問しなさい。分らずに黙っている人はだめです。

経営工学科 講義 「計測情報論Ⅱ」
ガイダンス資料 (1994.10.)

情報心理学研究室 教授 石桁正士

1. 講義の内容。
 - A. 交通安全のための情報処理、交通標識の最適配置、タコグラフの処理。
 - B. 個人識別のための情報処理、CGとは、指教、筆跡、印鑑の処理。
 - C. 社会福祉のための情報処理、点字の語訳の処理。
 - D. 情報処理的問題解決の例、情報心理の話。
 - E. システムズ・エンジニア(S・E)の世界の紹介。
2. 講義の特徴
 - A. 高校レベルから大学レベルへと分かりやすく順を追って説明します。
 - B. 選択必修科目ですので、出席は自由です。
 - C. 毎回ビデオを、時々にはパソコン・ソフトを見せつつもりです。
 - D. 期末には定期試験を行います。関数電卓は持ち込むこと。
 - E. 講義の中で自主レポートを出題します。
 - F. 講義の最終日には、やる気の調査用紙の回収をします。必提出。
3. 受講上の注意
 - A. 私語を禁じます。受講態度の悪い人には警告キップを渡し、教室から出て行ってもらいます。(最終成績を20%カットします。)
 - B. やる気のある人だけ受講して下さい。やらん気人間おことわり。
 - C. 自主レポート提出者は加点し、義務レポート不提出者は減点します。
 - D. 第1回目の講義の時、やる気調査用紙を配布します。必受取。
 - E. 分らないところは質問しなさい。
 - F. 合格率は毎年50%以下です。自主レポートはかなり有効です。
 - G. 計測情報論Ⅰの内容を基礎にしています。復習は必要です。

4. 勉強のポイント
 - A. 教科書は事前に目を通すこと。
 - B. 教科書は何度も何度も読むこと。
 - C. 自分で問題を作って自分で答えて採点するやり方をすること。
 - D. 関数電卓を使った計算は実際に自分でやってみること。
 - E. ノートを作るより、教科書に書き込みなさい。
 - F. 講義中に出した研究課題はやってみること。
5. その他
 - A. 教科書について(必ず入手し、試験に持ち込みなさい。)
・石桁、上田、田中共著「英例で学ぶ情報処理」(情報科学シリーズ2) パワー社。
 - B. 参考書について(読むことをおすすすめします。)
・石桁、田中共著「基礎計測と情報」(情報科学シリーズ1)
パワー社。(前期の計測情報論1の教科書。)
・情報学教育研究会編著「情報社会と情報基礎」第一法規。
・石桁正士著「情報処理的問題解決法」(情報科学シリーズ10)
パワー社。(4年生の情報科学特論の教科書。)
・石桁監修、本学OB著「S・Eをめざして」(情報科学シリーズ5)
パワー社。(産業心理学の参考書。)
・石桁監修、本学OB著「S・Eの世界」(情報科学シリーズ7)
パワー社。(産業心理学の参考書。)
6. 助言

これからの社会は高度情報化社会です。その社会で活躍する人はコンピュータやシステムについての専門家、問題解決の専門家、経営や管理の専門家などです。そのような専門家のことをS・S・E(システムズ・エンジニア)と呼んでいます。皆さんはS・S・Eになれる可能性を十分に持っています。

本学に來たかぎりこのような専門家になって社会で活躍してほしいと思います。今日、只今から、目標を持って本気で勉強を始めたいかがですか。

経営工学科講義 「産業心理学」

ガイダンス資料 (1994.10.)

経営工学科 情報心理学研究室 教授 石桁 正士

1. 講義の内容

- A. 産業心理学、組織心理学、組織管理、人事管理についての解説。
- B. SEの人材育成、SEの企業内教育、SEのキャリア・パスについての解説。
- C. 労働意欲、モラール・サーベイ、勤機づけについての説明。
- D. 仕事のやりがい、やる気のメカニズムについての説明。
- E. やる気の自己管理、職場管理、やる気のカウセンシングの解説。
- F. 労働観、価値観、価値観の時代的変遷、人間観についての解説。
- G. アイデンティティ(P、I、U、I、C、I、J、Iなど)の説明。
- H. IGF法によるやる気の調査とその実例の説明。

2. 講義の特徴

- A. 出席はとりませんが、授業中に作業課題を与えることがあります。
- B. 作業には、作文、小テスト、アンケートなどがあります。
- C. 講義の最終日には、この科目のやる気の調査用紙(第1回目の講義で配布します)の回収を行います。用紙は必ず提出して下さい。
- D. 普通教室で、OHPを使って講義をします。
- E. 価値観調査を2回(10月と12月)行います。調査は必ず受け、調査結果を必ず受け取って下さい。しない人は単位放棄とみなします。

3. 受講上の注意

- A. この科目は専門の選択科目ですから、やる気のある人だけを対象にします。勉強する気のない人、不まじめな人は切り捨てます。
- B. 私語は禁じます。違反者には警告キップを渡し、最終成績を20%カットします。
- C. 情報処理技術者試験の合格者は特別に成績をよくします。台格証書の

コピーを提出して下さい。

4. 勉強のポイント

- A. 新聞に出ている産業心理学関係の記事やSEについての記事によく注意すること。
- B. この分野のことを書いたやさしい本をたくさん読むこと。
- C. 自分の考えをどんどん文章にすること。
- D. 自分のやる気や自分のやりがいについて友達と話をすること。
- E. 定期試験には解説問題を出すので、まとめる力と表現する力を中心に勉強すること。
- F. 喫茶店の「砂時計」に過去問を置いてあります。見て下さい。

5. その他

- A. 教科書について
石桁正士編：「SEをめざして」、パワー社。
- B. 参考書について(図書館で見ること)
石桁正士編：「やる気の管理心理学」、講談社。(絶版)
石桁正士編：「SEの世界」、パワー社。
斉藤 勇著：「やる気になるさせる心理学」、日本実業出版社。
西岡文彦著：「やりがいの構造」、JICC。
マイケル・マコビー著：「WHY WORK」、ダイヤモンド社。
川瀬正裕・松本真理子編：「自分がしる心理学」、ナカニシヤ出版。
千石 保著：「やる気の研究」、講談社。
坪内寿夫著：「人間やる気や」、学習研究社。
柳平 杉著：「やる気の健康学」、日本経済新聞社。
スタックス・ターケル著： 中山 容他訳 「仕事」、昌文社。

C. 欠席した時

調査の日に欠席した人は、指定日に、石桁研(M206室)に来て、担当の卒研生の指示を受け、必ず行なって下さい。また、調査結果を必ず受け取って下さい。

経営工学科講義

情報科学特論 (1994.6.)

科目ガイダンス資料

教育情報論(石栢担当) 6回分/年間24回

情報心理学研究室 教授 石栢 正士

1. 講義の内容

- (1) プロローグ、この講義の目的とところ。
- (2) 大学教育論、大学教育の中心としての卒業研究とは。
- (3) 卒業研究を通じて、問題解決能力、情報活用能力、システム・センス、P I の確立、自己管理能力、責任感等の育成の考え方。
- (4) 情報心理的問題解決法、P S 7、C A S - L a b。
- (5) 学外研究者の特別講演。
- (6) エピソード、この講義から何を学んだか。

2. 講義の特徴

- (1) 毎時間必ず出席を確認します。
- (2) 毎時間必ずレポートを課します。レポートは研究室単位で作成して提出してもらいます。夏期休暇には各自に宿題を出します。
- (3) 学外の研究者(大学、研究所など)の方に教育に関する特別講演を1回してもらいます。この時は、感想文レポートを提出すること。
- (4) 最終回の時間(9/7)に期外試験を行います。試験の時は教科書、参考書、ノートなどを持ち込んでよろしい。
- (5) 不合格の人と未受験の人は、9/10に追再試験を行います。

3. 受講上の注意

- (1) この科目は、経営工学科の最上級の学生に、特に学んでもらうものですから、必修でしかも教員4人が担当し、きわめて大朝な講義として位置づけられています。真剣に聞くように。
- (2) 成績は100点満点で、私は出席点、レポート点、試験の点数の合計でつきます。(最終成績は4人の教員の平均点でつきます。)
- (3) 教科書をよく読んで下さい。分からないところは質問して下さい。
- (4) 私語を禁じます。受講態度の悪い人には教室から出てもらいます。このとき警告キップを渡し、成績を20%カットします。

- (5) 情報処理技術者試験の合格者には特別により成績を付けます。合格証書のコピーを提出して下さい。

4. 教科書およびその内容

教科書は必ず入手し、よく読み、試験の時には持ち込みなさい。
石栢正士著：情報心理的問題解決法、＜情報科学シリーズ(1)＞、パワー社、平成2年、2266円。

第0編	プロローグ	第3編	問題解決を支援するシステム
第1編	問題とは・解決とは	第4編	C A P S S
第2編	現実の問題解決過程	第5編	エピソード

5. 参考のために

- (1) P S 7とは「Problem-Solving 7 Thoughts」のことで、以下のものから成り立っています。
 1. 問題解決は最上流過程を考えること。(適行と下降のUターン)。
 2. 視座を常に意識すること。豊富な視点を設定すること。
 3. 視点を意識すること。豊富な視点を設定すること。
 4. 価値観を明確にすること。相手の価値観を理解すること。
 5. 問題解決の定石特にメタヒントを活用すること。
 6. やる気のメカニズムを理解し、やる気の心理を無視しないこと。やる気のメカニズムとは、次の4つからできています。
 - {1} 価値観によって自己の生き方を決める。
 - {2} 自己実現の志(こころざし)を立てる。
 - {3} その志を見失わずにやる気を持続する。
 - {4} 健康とやる気のエネルギーによって行動する。
 7. 自己管理の考え方を理解し、実行すること。

- (2) C A S - L a bとは「Communicative Active and Self-developing Laboratory」のことです。現在、いくつかのサブシステムから成り立っています。

- ・ 問題解決者にメタ・ヒントを提供してくれるC A M S S
- ・ 問題解決の支援のためのM A C A P、I C O N
- ・ P I 確立や自己管理用のC A S E S P I、O M A C (L)
- ・ メディア・ミックス型の学習環境、C A I、C T、など。

1. 受講上の注意

教育の場で発生する情報を、教育工学的配慮の上から処理するシステムの構成方法を中心に、教育システムと言う仕組みを取り上げる。大学教育はもちろんのこと、小・中・高の学校教育、企業内教育のシステムも視野に入れる。教科書、学会誌、参考書などの資料から題材をとって、輪講形式で行う。

輪講形式とは、受講生の中から毎週1人ずつのチューターを決め、その者が教壇に立って、授業を展開する。チューターになった者は、あらかじめ配布した資料を理解し、OHPシートを作成しておいて、担当の日に受講者の前で説明する。

輪講形式(チューター制度)で講義を行うため、受講生の人数制限を行なうことがある。できれば5-6人が望ましい。

2. チューターの心得

- (1) チューターに当たった人は、事前にOHPシート(先輩が作成したものと新しいものと)を、M206室の石桁研究室まで取りに来ること。
- (2) 事前に教科書をよく読み、内容を理解するように努力しておく。当日は、大きな声で、分かりやすく説明する。
- (3) もし分からないところがあれば、事前に教授室にきて質問し、理解するよう努力する。
- (4) チューター終了後、感想文を提出する。(1-2週間以内)

3. 教科書・参考書

○教科書 「An Introduction to Educational Information Technology (3rd Ed)」, Takahiro SATO NEC Technical College. 非売品。

○推薦・参考書 「教育情報工学シリーズ」 全4巻 佐藤、織田編、コロナ社。
¥2575、¥2369、¥2678、¥2215。

4. 大学院の講義について

私が受けた大学院(大阪市立大学、工学研究科、電気工学専攻)の講義は、教授室で行われ、すべてチューター制であった。受講生は同期生3人で、3週間に1回は当たった。教科書はほとんど英文であって、チューターは事前に翻訳をし、理解をし、参考書を調べ、分からないところがないようにしておく。当日は教授の前で説明をし、教授からの質問に対して答え、練習問題があればそれに解答する。助手の人が採点してくれた。

大学院生は、学部学生と基本的に異なり、自分で学びとって行くことが求められる。学びとる態度として、「全体知」という言葉があるが、常に全体を視野に置いて学びとりをしなければならない。教育は、人間を相手とする学問であることを忘れないで欲しい。

教育支援データベース特論 (1994. 10.)

大学院教育工学コース担当教授 石桁正士

1. 受講上の注意

教育の支援には、大きく分けると、教員に対する教授活動の支援と、学生に対する学習活動の支援と、職員に対する教務活動の支援と、経営者に対する経営・管理活動の支援の4つがある。4つの活動を支援するデータベースがそれぞれ考えられるが、ここではデータベースを利用した教育相談というシステムに限定して、教科書を中心に輪講形式で行う。

輪講形式とは、受講生の中から毎週1人ずつのチューターを決め、その者が教壇に立って、授業を展開する。チューターになった者は、あらかじめ教科書をよく読み、理解し、OHPシートを作成しておいて、担当の日に受講者の前で説明する。その上で、受講者からの質問に答えるのである。

輪講形式(チューター制度)で講義を行うため、受講生の人数制限を行なうことがある。できれば5-6人が望ましい。

2. チューターの心得

- (1) チューターに当たった人は、事前にOHPシート(先輩が作成したものと新しいものと)を、M206室の石桁研究室まで取りに来ること。
- (2) 事前に教科書をよく読み、内容を理解するように努力しておく。当日は、大きな声で、分かりやすく説明する。
- (3) もし分からないところがあれば、事前に教授室にきて質問し、理解するよう、努力する。
- (4) チューター終了後、感想文を提出する。(1-2週間以内)

3. 教科書・参考書

○教科書 「データベースと相談システム」 石桁、江沢、北川、磯本、山本共著 パワー社。¥2600。

○推薦・参考図書 「データベースの共同形成」 石桁、松田、磯本、弘原海共著 パワー社。¥2300。

4. 大学院の講義について

私が受けた大学院(大阪市立大学、工学研究科、電気工学専攻)の講義は、教授室で行われ、すべてチューター制であった。受講生は同期生3人で、3週間に1回は当たった。教科書はほとんど英文であって、チューターは事前に翻訳をし、理解をし、参考書を調べ、分からないところがないようにしておく。当日は、教授の前で説明をし、教授からの質問に対して答え、練習問題があればそれに解答する。助手の人が採点してくれた。

大学院生は、学部学生と基本的に異なり、自分で学びとって行くことが求められる。「全体知」という言葉があるが、常に全体を視野に置かねばならない。

科目ガイダンス

教育工学

(1994.7.)

大阪電気通信大学 工学部 経営工学科 情報心理学研究室
 大阪電気通信大学 大学院 工学研究科 情報工学専攻
 教育工学講座担当教授 石桁 正士

1. 講義の内容

- (1) プロローグ、この講義の目指すところ、私の期待する教育。
- (2) 教育工学の歴史、教授工学から学習工学へ、教育工学の考え方。
- (3) 教育工学の学問論とは、「哲・理・工・経」の階層の考え方。
- (4) 教育のシステムの捉え方、教育システムの入力・過程・出力・環境。
- (5) 教育情報処理、教育情報工学、教育方法学、視覚教育。
- (6) コンピュータ、マルチメディアの教育への利用、CAIの利用。
- (7) エビローク、この講義で何を学んだか。

2. 教育情報処理の内容

- (1) やる気の測定、IGF法、ベクトル法。
- (2) 知識の調査、理解状態の調査、プロトコルとステートメント。
- (3) 概念の構造、概念チャート図、コンセプト・プログラミング。
- (4) 集中度、興味度、理解度のアンケート調査。
- (5) 占席の調査、占席のタイプと成績、孤立者の把握。
- (6) SSM T (スモール・ステップ・マルチチャョイス・テスト)。
- (7) 思考態度調査、順位相関係数。
- (8) 成績評価関数の同定、評価者の心理的数直線。
- (9) 数直線2類による成績評価の構造。
- (10) 就職情報システムと進路指導。

3. 受講上の注意

- (1) この科目は就職課程の必修科目ですので、毎回出席を確認します。
- (2) 受講態度の悪い人には、教室から出ていってもらいます。その場合単位の認定をしない場合があります。ルールを守って下さい。
- (3) 毎回レポートを提出してもらいます。提出しない人には単位認定をしません。
- (4) 講義の最終日にはアチーブメント・テストを行います。テストは教科書、参考書、ノートなど持ち込んで行って下さい。

(5) やる気の無い人は受講しないで下さい。私語を禁止します。

(6) 最終評価は、出席点、レポート点、発表点、態度評価点、ペーパー・テストの点数などの総合点で付けます。

(7) 体調と勉強のやる気の調査を行います。必提出。

(8) グループに分かれて、テーマを検討し、代表者が発表します。

4. A V C教室について

本学の短期大学部にはA V C教室というすばらしい教育環境があります。

AはAudio、VはVisual、CはComputerの略称で、WSとしてNEWS、パソコンとしてPC-98、静止画ビデオとしてマビカ、8ミリビデオ、スライド・プロジェクター、VHS方式のVTR、書写テレビ、自動のスクリーン、自動のカーテン、リモート・コントロールの照明、エヤコン、タッチ・パネル式のコンローラー、100インチの大スクリーンなどが設備されていて、教育工学の講義には最適な教室です。これらの教育設備を何人かの人に操作してもらいます。

5. C A Iの実習について

もし実習を行う時間があれば、コンピュータを用いた形のものをおの方法で行なうつもりです。それはC A I (Computer Assisted Instruction) というコンピュータを利用した教育のシステムで、C A Iのコースウェアという一種のソフトウェアについて、既製の物を用いて学習してもらいます。その場合は、石桁研究室のM A C Cを使ったりC A Iを利用いたします。石桁研究室のティーチング・アシスタントの大学院生や4回生の卒業生の指示に従って下さい。

6. 教科書および参考書について

次の本は教科書です。必ず事前に入手し、よく読むこと。

大阪電気通信大学教育情報研究会編著：「教育情報処理」、<情報科学シリーズ(6)>、パワー社、¥2060。

次の本は参考書です。興味のある人は読んで下さい。

佐藤隆博、織田守矢編：「教育情報工学シリーズ」、全4巻、コロナ社、

¥2500、¥2600、¥2215、¥2369。

坂元 昂：「教育工学」、放送教育開発センター、¥1800

西之園晴夫編：「教育工学実践にとりくむ力量」、講座教師の力量形成4、ぎょうせい、¥2600。

経営工学特論受講上の注意 (1994.4.)

経営工学特論担当 事務幹事 教授 神村俊一

1. 評価の方法(1988年(昭和63年)4月の経営工学科教室会議の確認

事項)

A. この科目の評価は出席回数で決定されます。

- (1) 全出席・・・85点
- (2) 無断欠席1回・・・75点
- (3) 無断欠席2回・・・65点
- (4) 無断欠席3回以上・・・55点

B. 正当な理由で欠席する場合は出席とみなされます。正当な理由とは、

次に示す事項です。

- (1) 教育実習による場合
- (2) 就職活動による場合(企業訪問、面接など)
- (3) クラブ活動による対外試合の場合
- (4) 身内の慶弔による場合
- (5) 病気・事故による場合
- (6) 学外卒研活動の場合
- (7) その他、学科会議で認められた場合

C. 従来からこの科目には、「追再試験はない」としてきましたが、きわめて不愉快な前例が過去にあります。今後、「追再試験の実施」などの事態が二度と起こらないようにしたいと思います。出席さえしていたら、必ず単位は認定されます。

D. 全ての講義が終了した後に、卒研指導教員を通じて欠席回数を研究室ごとに確認しますので、事実と異なる場合は、すみやかに担当幹事の教員まで申し出て下さい。

2. 欠席した場合(事後届)・欠席する場合(事前届)の手続き

A. 上の理由による欠席の場合は、所定の用紙(第1回目の講義の時に各研究室に配布します)必要事項を記入の上、署名・捺印し、卒研指導教員の印をもらって、担当幹事のところに提出して下さい。できる限り事前に届け出ること。情報科学特論の用紙(別用紙)と間違えないようにして下さい。

B. 欠席届の用紙は、各研究室に配布してありますが、もし残数が少なくなったら、コピーして下さい。

C. クラブ活動の場合は、顧問の教員の印をもらって下さい。

D. 教育実習の場合は、実習終了後に教務課が発行する欠席証明書を出して下さい。

E. 病気や事故の場合は、診断書などの書類のコピーを添付すること。

3. 受講態度について

A. 当日講演して下さる方は、企業のVIPの方々です。私語・居眠り不まじめな態度は慎むこと。眼にあまる場合は、隣席している教員が注意をします。それでも態度を改めない者は、隣席した教員の判断によって当日欠席扱いとすることがありますので注意して下さい。

B. 講演後、質問時間がある場合、諸君の積極的な質問を期待します。

4. 出席の確認法

A. 必ず指定の座席に座ること。

B. 当日隣席している教員、あるいは教員から指示を受けた卒研生が、出席の確認をします。その方法は、座席位置に居るか居ないかで決めます。

C. 講演開始後、10分-15分ぐらいで出席を確認しますので、遅刻しないようにして下さい。

D. 遅刻した場合、速やかに隣席の教員に申し出て下さい。遅刻の時間があまりにも度を過ぎている場合は、欠席扱いいたします。

Abstract

Research and Development of Guidance Education in Higher Education

Tadashi ISHIKETA^①, Shigekata IWASAKI^①, Hiroshi YOKOYAMA^①,
Hiroyuki NAKAMURA^②, Yasuko AKIO^②, Akio YANAI^③, and Katsue IKEDA^③

① Osaka Electro–Communication University

② Kyoto Bunkyo Junior College

③ Mejiro Gakuen Women’s Junior College

The Guidance Education which is proposed by the authors is required in every stage of higher education. So we consider that the Guidance Education may be given to the students before entrance, freshmen, each graders, and the students who study graduate thesis. The contents of the Guidance Education are to be prepared variously, and the aims of the Guidance Education are as follows.

- (1) To make the students have the knowledge about the university–life or college–life and the information about the university–system or college–system.
- (2) To have the students be conscious of the member of the university or college.
- (3) To have the students acquire the learning skills. For example, how to write report, how to utilize university library, how to use personal computer or word–processor, how to read technical documents, etc.

The authors are now researching and developing the Guidance Education in higher education.

高等教育研究叢書 バックナンバー

旧大学ノート

- 第 1 号(1971. 8) ケックス大学のカリキュラム：自然科学系ハンドブック1966-67より
…… 大学問題調査室〔編訳〕
- 第 2 号(1971. 9) ドイツの大学におけるInstitute数及び教授数に関する集計
近藤 春生
- 第 3 号(1971.10) 高等教育に関する主要外国雑誌目録… 岩村 聡〔編〕
- 第 4 号(1972. 7) 欧米の医学カリキュラム…………… 杉原 芳夫〔編訳〕
- 第 5 号(1972. 8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
…… 関 正夫・川上 昭吾〔編訳〕
- 第 6 号(1973. 2) ケックス大学のカリキュラム：人文・社会系ハンドブック1966-67より
…… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 7 号(1973. 3) 諸大学学寮規程・規則集(1) … 大学教育研究センター〔編〕
- 第 8 号(1973. 8) ドイツ大学改革と学生生活の現況
-マールブルク大学を中心として-
… 千代田 寛・阪口 修平
- 第 9 号(1973. 9) 広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料…………… 杉原 芳夫〔編〕
- 第 10 号(1974.1) 理学部生物科に関する調査 -カリキュラムを中心に-
…… 川上 昭吾
- 第 11 号(1974.2) 大学院・研究体制に関する文献目録…喜多村 和之〔編〕
- 第 12 号(1974.2) 大学院・学位に関する規程集……………喜多村 和之〔編〕
- 第 13 号(1974.3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
…… 関 正夫〔編訳〕
- 第 14 号(1974.3) 諸大学学寮規程・規則集(2) … 大学教育研究センター〔編〕
- 第 15 号(1974.6) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究 農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究-普通高校生との比較…………… 山谷 洋二
- 第 16 号(1974.9) カフォルニア大学の農学系カリキュラム …………… 山谷 洋二〔編訳〕
- 第 17 号(1975.1) ヨーロッパの学生宿舎を見て…………… 横尾 壮英
- 第 18 号(1975.2) 学寮の管理運営の法的検討
…… 畑 博行・村上 武則
- 第 19 号(1975.3) 大学院・学位制度に関する資料集…………… 寺崎 昌男〔編〕
- 第 20 号(1975.10) 大学の大衆化をめぐって
-第3回(1974年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号(1976.1) 大学英語教育に関するアンケート調査
-広島大学における学生の意見-
…五十嵐 二郎・稲田 勝彦・岩村 聡
藤本 黎時・湯浅 信之
- 第 22 号(1976.3) 西ドイツ高等教育改革の青写真…………… 天野 正治
- 第 23 号(1976.3) 宮城教育大学の教育改革 -視察報告-
…… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 24 号(1976.8) 広島大学学生の宿舎と生活 -アンケート調査から-
…… 黒川 正流・上里 一郎・岩村 聡
- 第 25 号(1976.9) 高学歴社会 -その現実と将来-
-第4回(1975年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 26 号(1976.11) 大学の組織・運営に関する総合的研究
…… 組織・運営プロジェクト〔編〕

- 第 27 号(1977.2) 教師教育カリキュラムの研究(1) …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 28 号(1977.2) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究 -その2・東日本の場合-
…… 山谷 洋二〔編〕
- 第 29 号(1977.3) 理科系学生に対する教養課程における自然科学教育に関する調査・研究 -広島大学一般教育課程における物理学教育に関するアンケートから-
……理科系教育研究プロジェクト(物理グループ)
- 第 30 号(1977.6) 日本のアカデミック・プロフェッション -帝国大学における教授集団の形成と講座制- …… 天野 郁夫
- 第 31 号(1977.9) 大学における専門教育 -第5回(1976年度)『研究員集会』の記録- …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 32 号(1978.8) 大学の国際化 -第6回(1977年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 33 号(1978.10) 諸外国の大学における国際交流 -とくにアメリカ合衆国を中心として- …… 喜多村 和之・天野 郁夫・湯浅 信之
- 第 34 号(1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(I) -広島大学の事例を中心として-
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 35 号(1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(II) -理科系専門教育の立場から-
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 36 号(1979.2) 広島大学医学部と地域社会
…… 大学と地域社会プロジェクト
- 第 37 号(1979.5) 諸外国における一般教育および科学技術教育改革の動向
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 38 号(1979.7) 高等専門学校の現状と課題 …… 葉柳 正
- 第 39 号(1979.10) 地域社会と大学 -第7回(1978年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 40 号(1979.11) 大学と地域社会の相互関連に関する調査研究(I)
-広島大学教員実態調査-
…… 大学と地域社会プロジェクト(池田秀男)
- 第 41 号(1979.12) 大学の国際交流に関する文献目録
…… 「大学の国際化」研究プロジェクト〔編〕
- 第 42 号(1979.12) 大学と地域社会の相互関連に関する調査研究(II)
-地域住民の大学観-
…… 大学と地域社会プロジェクト(吉森 護)
- 第 43 号(1980.1) 日本の大学における外国人教員 -全国調査結果の概要-
…… 「大学の国際化」研究プロジェクト〔編〕
- 第 44 号(1980.7) 大学と地域社会の相互関連に関する調査研究(III)
-広島大学と地域社会-
…… 大学と地域社会プロジェクト(黒川正流)
- 第 45 号(1980.7) 大学農学教育に関する文献目録 …… 山谷 洋二〔編〕
- 第 46 号(1980.9) 理科系学生に対する一般教育の現状と課題
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 47 号(1980.11) 諸外国の大学における外国人教授の任用 -制度と実態-
…… 喜多村 和之
- 第 48 号(1981.7) 大学医学教育に関する文献目録 …… 川崎 尚〔編〕
- 第 49 号(1981.8) 科学社会学の研究 …… 新堀 通也〔編〕
- 第 50 号(1981.10) 大学における教育機能(Teaching)を考える

- 第9回(1980年度)『研究員集会』の記録-
- …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 51 号(1982.1) 19世紀における科学の制度化と大学改革
-フランス・ドイツ・英国- …………… 成定 薫〔編訳〕
- 第 52 号(1982.2) 日本の大学院教育に関する留学生の意見調査
-全国調査結果の概要-
……「大学の国際化」プロジェクト
- 第 53 号(1982.3) 工学系大学・学部の教育改革に関する事例研究
-広島大学工学部改革調査-
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 54 号(1982.10) 大学における教授と学習
-第10回(1981年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 55 号(1982.12) 教師教育カリキュラムの研究(2) …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 56 号(1983.3) 日本の理工系大学教育の現状と将来像
-全国大学教員意見調査結果の概要-
…… 高等科学技術教育研究プロジェクト〔編〕
- 第 57 号(1983.8) 大学教育とカリキュラム
-第11回(1982年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 58 号(1983.11) 高等教育に関する統計資料 -理工系分野を中心として-
…… 前川 力
- 第 59 号(1984.10) 大学における教育と研究の接点を求めて
-第12回(1983年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 60 号(1985.1) 外国大学における日本研究 …………… 新堀 通也〔編〕
- 第 61 号(1985.3) 明治初期専門教育成立に関する公文関係史料
…… 三好 信浩〔編〕
- 第 62 号(1985.3) 日本の大学教育の現状・課題・展望
-カリキュラムとティーチングを中心に-
……「大学教育に関する全国調査」プロジェクト〔編〕
- 第 63 号(1985.10) 新制大学の35年 -その功罪を考える-
-第13回(1984年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 64 号(1986.3) 学生の体調とやる気 ……石桁 正士・岩崎 重剛
- 第 65 号(1986.3) 研究者の流動性と研究能力の向上に関する研究
…… 小林 信一・塚原 修一・山田 圭一
- 第 66 号(1986.3) アカデミック・プロダクティビティの条件に関する国際比較研究
…… 有本 章〔編〕
- 第 67 号(1986.8) 大学入試と教育改革
-第14回(1985年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 68 号(1987.2) 将来社会における研究者の需給予測に関する研究
…… 山田 圭一〔編〕
- 第 69 号(1987.3) アジアの高等教育…………… 馬越 徹〔編〕
- 第 70 号(1988.1) アジア8か国における大学教授の日本留学観(上)
…… 権藤 与志夫〔編〕
- 第 71 号(1988.1) 官学と私学 -大学の設置形態と国公立大学の将来-
-第15回(1986年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕

第 72 号(1988.11) 大学と政府 -高等教育における役割と責任-
-第16回(1987年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕

第 73 号(1989.10) 臨教審と高等教育改革
-第17回(1988年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕

高等教育研究叢書

第 1 号(1990. 3) 留学生受入れと大学の国際化
-全国大学における留学生受入れと教育に関する調査報告-
…… 江淵 一公〔編〕

第 2 号(1990. 3) 大学教育改革の方法に関する研究
-Faculty Developmentの観点から-
…… 関 正夫〔編〕

第 3 号(1990. 3) 近代日本高等教育における助手制度の研究
…… 伊藤 彰浩・岩田 弘三・中野 実

第 4 号(1990. 3) ファカルティ・デベロップメントに関する文献目録および主要文献紹介
…… 伊藤 彰浩〔編〕

第 5 号(1990. 3) 大学教育の改善に関する調査研究
-全国大学教員調査報告書- …… 有本 章〔編〕

第 6 号(1990. 3) 「大学」外の高等教育 -国際的動向とわが国の課題-
…… 阿部 美哉・金子 元久〔編〕

第 7 号(1990.10) 大学評価 -その必要性と可能性-
-第18回(1989年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕

第 8 号(1991. 3) 中国高等教育関係法規(解説と正文)
…… 大塚 豊

第 9 号(1991. 3) 学生の勉学のやる気の状態遷移の分析
…… 石桁 正士・岩崎 重剛・横山 宏

第 10 号(1991.3) 学術研究の改善に関する調査研究
-全国高等教育機関教員調査報告書-
…… 有本 章〔編〕

第 11 号(1991.3) アジア8か国における大学教授の日本留学観(下)
…… 権藤 与志夫〔編〕

第 12 号(1991.3) 諸外国のFD/SDに関する比較研究 …… 有本 章〔編〕

第 13 号(1991.3) ヨーロッパにおける留学生受入れのシステムと現状
-独・仏・英国現地調査報告- …… 江淵 一公

第 14 号(1991.10) 2005年に向けてのカリキュラム改革
-食糧・農業科学の将来計画- …… 山谷 洋二〔訳〕

第 15 号(1991.11) 大学評価 -提案と批判-
-第19回(1990年度)『研究員集会』の記録-
…… 大学教育研究センター〔編〕

第 16 号(1992.1) アジア8か国における大学教授の日本留学観
-総合的考察- …… 権藤 与志夫〔編〕

第 17 号(1992.2) 外国留学効果の評価に関する研究
-フルブライト計画によるアメリカ大学院留学体験者を
対象とする調査研究報告書-
…… 小林 哲也・星野 命〔編〕

第 18 号(1992.3) 短期大学教育と現代女性のキャリア
-卒業生追跡調査の結果から- …… 金子 元久〔編〕

- 第 19 号(1992.10) アメリカの大学院評価
 -大学院教育の専門分野別評価を中心に-
 …… 江原 武一・奥川 義尚
- 第 20 号(1992.11) 高等教育改革の新段階 -大学審議会答申を踏まえて-
 -第20回(1991年度)『研究員集会』の記録-
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号(1993.3) 大学評価と大学教授職
 -大学教授職国際調査[1992年]の中間報告-
 …… 有本 章〔編〕
- 第 22 号(1993.3) 戦後近代社会と高等教育 -H.パ-教授講演集-
 …… 有本 章・安原 義仁〔編訳〕
- 第 23 号(1993.3) 市民大学に関する研究 …………… 池田 秀男〔編〕
- 第 24 号(1993.10) 高等教育研究と大学教育研究センター -創立20周年記念-
 -第21回(1992年度)『研究員集会』の記録-
 …… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 25 号(1994.3) 現代日本におけるエリート形成と高等教育
 …… 麻生 誠・山内 乾史〔編〕
- 第 26 号(1994.3) 私立大学の授業料規定要因に関する日米比較研究
 …… 丸山 文裕
- 第 27 号(1994.3) 卒業生からみた広島大学の教育 -1993年卒業生調査から-
 …… 金子 元久・山内 乾史・小方 直幸
- 第 28 号(1994.3) 大学院の研究 -研究大学の構造と機能-
 …… 有本 章〔編〕
- 第 29 号(1994.10) 大学改革の動向と高等教育研究の新体制
 -第22回(1993年度)『研究員集会』の記録-
 …… 大学教育研究センター〔編〕

執筆 者 紹 介

石 桁 正 士 (いしけた ただし)

大阪電気通信大学工学部教授、同大学院工学研究科博士課程教授 教育工学講座を担当。

学会および社会活動

広島大学・大学教育研究センター学外研究員

CAI学会 理事、関西支部 支部長

日本教育工学会 理事

やる気研究会 主宰 など。

主要著書

やる気の管理学 (編著、講談社、昭和63年)

情報科学シリーズ 全10巻の担当責任者 (編集者、著者、パワー社、昭和56年～平成2年)

学習環境の構築 (情報教育工学シリーズ(4)) (共著、コロナ社、平成2年)

情報社会と情報基礎 [改訂版] (共著、第一法規、平成6年) など。

岩 崎 重 剛 (いわさき しげかた)

大阪電気通信大学短期大学部講師 教育工学の研究に従事。

学会および社会活動

CAI学会 正会員

日本教育工学会 正会員

日本教育情報学会 専門会員

一般教育学会 正会員

CAI学会関西支部 事務幹事

やる気研究会 事務局長 など。

主要著書

教育情報処理 (情報科学シリーズ(6)) (共著、パワー社、昭和60年)

やる気の管理学 (共著、講談社、昭和63年)

学習環境の構築 (情報教育工学シリーズ(4)) (共著、コロナ社、平成2年)

情報社会と情報基礎 [改訂版] (共著、第一法規、平成6年)。

横 山 宏 (よこやま ひろし)

大阪電気通信大学短期大学部講師 情報教育の研究に従事。

学会および社会活動

CAI学会 正会員

日本教育工学会 正会員

日本教育情報学会 専門会員

一般教育学会 正会員

CAI学会関西支部 CMI研究会幹事 など。

主要著書

教育情報処理 (情報科学シリーズ(6)) (共著、パワー社、昭和60年)

情報社会と情報基礎 [改訂版] (共著、第一法規、平成6年)。

中 村 博 幸 (なかむら ひろゆき)

京都文教短期大学家政学科助教授 教育社会学、視聴覚教育、情報教育の研究に従事。

学会および社会活動

日本教育工学会 正会員

日本教育社会学会 正会員

日本視聴覚・放送教育学会 正会員

日本家政学会 正会員

京都府高等学校視聴覚教育研究会 顧問

大阪府高等学校視聴覚教育研究会 顧問 など。

主要著書

実践教育原論（共著、学術図書出版社、平成1年）
視聴覚教育の新しい展開（共著、東信堂、平成1年）
情報生活論入門（共著、同文書院、平成3年）
情報社会と情報基礎〔改訂版〕（共著、第一法規、平成6年） など。

秋 尾 保 子（あきお やすこ）

京都文教短期大学実習職員 教育工学、情報教育の研究に従事。

学会および社会活動

日本教育社会学会 正会員
日本教育工学会 正会員 など。

主要著書

情報社会と情報基礎〔改訂版〕（共著、第一法規、平成6年）。

矢内 秋生（やない あきお）

目白学園女子短期大学生生活科学科助教授 教育工学、地球物理学（地域自然情報）の研究に従事 生活工学、生活情報論などを担当。

学会および社会活動

日本教育工学会 正会員
日本環境教育学会 正会員
日本自然災害学会 正会員
日本気象学会 正会員 など。

主要著書

情報生活論入門（共著、同文書院、平成3年）
地球環境の生活と科学（共著、サイエンスアート社、平成3年）
教養の理科ハンドブック（共著、小林出版、平成5年）
生活と情報（共著、建帛社、平成6年）
情報社会と情報基礎〔改訂版〕（共著、第一法規、平成6年） など。

池田 勝枝（いけだ かつえ）

目白学園女子短期大学生生活科学科助手 教育工学、情報教育の研究に従事。

学会および社会活動

日本教育工学会 正会員
情報処理学会 正会員
日本環境教育学会 正会員 など。



高等教育機関におけるガイダンス教育の展開

(高等教育研究叢書 30)

1995 (平成7) 年3月20日 発行

編 者 石 桁 正 士
発 行 所 広島大学 大学教育研究センター
〒730 広島市中区東千田町一丁目1-89
TEL (082) 241-1221 内線(3706)
印 刷 所 (有)高橋 騰 写 堂
〒730 広島市中区千田町3-2-29
TEL (082) 244-1110代

ISBN4-938664-30-5

IRE